
NARUTO ~ 転生と始まりと終焉 ~

魁斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NARUTO〜転生と始まりと終焉〜

【Nコード】

N7488V

【作者名】

魁斗

【あらすじ】

気づいたら長い行列に並んでいた主人公

その列はなんと転生待ちの列だった！！

チートな主人公がNARUTOの世界で生きていく話です

転生

長い長い行列

その行列の一番後ろに俺は居た

あれ？

俺なんで並んでるんだ？

つてかここどこだ？

取りあえず前に居る奴に聞いてみる

「なあ

これなんの行列？」

「あん？

なんだ知らねーのか？

これは転生する為の行列だ

今回は神の暇つぶしでサイコロを降って出た数だけ能力が貰えるらしいぜ」

転生？

転生つてあの？

つてか俺死んだんだな……

まあ別に前世には悔いがないか……ああ有ったわ……俺彼女出来なかった

おい画面の前で笑った奴後で有り難いOHANASHIをしてやる

あれから数十年間

はあ…漸く俺の番か…

っえ？何故そんなに掛かったかって？ああ後から来た奴を先に行かしたからな

何故そんなめんどくさい事を？っと思うだろ？

まあもうちよつとしたら分かるよ「汝が最後の転生者だ

さあ眼の前に有るサイコロを振るえ」

俺は如何にも閻魔ですって奴に言われた通りに眼の前に有るサイコロを振るった

出た数は……6

どうやら俺は運が良いらしい

「ほう

6か……まさか最後の最で出るとは……

おい少年もう一度サイコロを振るえ」

……っえ？

「ど…どういう事だ？

まさかさっきのは無かった事になるのか？」

「いや

違うそのサイコロは特殊でな前世で良いことをすれば良い数に悪い事をしてれば悪い数にどちらもした場合は間ぐらいの数が出る

そしてもし6の数を出した者が居れば次は普通のサイコロを降って6プラス普通のサイコロで出た数の能力をやるというルールなんだ」

へえ〜

「なら

お言葉に甘えて」

出た数は……3

……………どうやら俺の運は普通らしいな

「では6 + 3 = 9個の能力をやるう
言ってみろ」

「まずは転生者が居ない世界でNARUTOの平行ワールドに
転生」

「うむ……

二つ目は？」

「容姿を家庭教師リボーンのアラウディにしてくれ」

「三つ目は？」

「年はナルトと同じで」

「四つ目は？」

「前世の記憶」

「五つ目は？」

「性別は男性に」

「六つ目は？」

「自身の能力を分かってその能力を完璧に扱えるように」

「うむ……」

聞いた所あまりチート能力は無いようだがいいのか？」

「良いんだよ」

次の三つを貰えばな」

「ふむ」

じゃあ七つ目は？」

「転生者の能力」

「転生者の能力？」

なんだその能力？」

「見た所」

俺以外にも転生者がいて能力を貰って行った
その能力だ

ああ似てる能力なら強くて使いやすいほうをくれ」

これが俺が列を譲った理由だ

「ふむ……」

なるほど6つ目の能力はそう言う事か……」

閻魔？が言った通りに6つ目の能力はこのためだ
転生者の能力は強いがどんな能力か分からないし使えなければ意
味がない

「ふむ

少々驚いたが良いだろう
後二つは？」

「始まりと終焉で」

「？」

「どういう事だ？」

「簡単に言えば始まりは全ての始まり人間や神しろ始まりあつた
その始まりの力

終焉とはどんなものにも成長があり終わりが来る

その終焉の力

この二つが欲しい」

「……………」 「？」

「どうした？」

何時まで経っても何も言わない閻魔？に話しかける
そしたら

「ククツ……ハハハハハ！！！」

いきなり笑い出した

何だ？頭が悪く成ったか？

つとか考えて至ら

「転生者の能力って言った時点で他の奴とは違つたがまさか此処までとわな

ツクク良karou

始まりの能力と終焉の能力をやるっ」

そんなに俺は可笑しかったか？

まあ貰えるなら良かった

「それでは

その扉の奥が次のお前が行く世界だ」

閻魔？が後ろにある扉を指を指して言う

「ああ〜

その前にお願いが有るんだが？」

「む？

何だ言って見る」

「俺からNARUTOの原作知識だけ抜いてくれねえか？」

「？

何故だ？原作知識があればやりやすいだろ？」

「いや

それだと面白くないだろ？」

「ククッ

そう言う事か…良いだろう

それぐらいなら俺の権限でもどっにか出きるだろうっ」

「そうか

ありがとうな」

「なに

気にするな俺を笑わせてくれた礼だ」

「そうか……」

「じゃあ俺は行く」

そう言つて俺は扉を開けて中に入っていく

S i d o 閻魔

「ククッ」

閻魔は先程の男性を思い出して笑っていた

「うん？」

閻魔「ご機嫌だな」

「ゼウスか……」

閻魔の目の前には白髪で痩せ形の男性がいた

「何か面白い事でも有ったのか？」

「ああ

実はな……」

閻魔は先程の事をゼウスに話す

「ハハハハハ！！！！」

人間にしてはユニークな発想だな！！！！」

「だろ？」

今までは無限の剣製やら王の財宝やらで詰まらんかったがまさか最後にこんな奴が出てくるとはな」

「まあ

誰かは知らねーがそいつに神のご加護が有ることを……」

「神のお前が言うか……」

呆れた目で見た閻魔

まさか創造神ゼウスに面白いと思われる事を主人公は知らない

転生（後書き）

「おい作者」

なんだい？

「何故俺の名前が出てねえんだ？」

ああ……うん

いやね……君の名前が……ね？

「……なんだよ」

いや……余りにも可哀想でな……

「一体どんな名前なんだ？」

ああ……全 夜半音【ぜん 夜半音】……

「……………」

さてさて……主人公がショックしてますが次回もよろしくね

転生完了

「あぶあぶあぶ……あぶ？（どうやら転生完了のようだ……あれ？）」

主人公は自身の声に疑問を持った

「ふふ」

疑問を持っていたら隣から急に笑い声が聞こえたのでみてみたら女性がいた
可愛いより綺麗な銀髪の女性がいた
だがそんな事よりも主人公が気に成ったのは

「あぶっ！！！（デカっ！！！）」

そうデカいのだ

……胸じゃないよ？

あついや確かにでかいけど……って何を言わす！！

コホン！！さてさて気を取り直して

デカいのは身長だ

巨人ですか？とまではいかなくともデカい

そんな事を考えていたら逆方向から声が聞こえた

「この子の髪

君に似て綺麗な銀髪だね」

「ふふ

目はあなたに似て透き通るような水色ですよ」

「ふふ

目はあなたに似て透き通るような水色ですよ」

「紛れも無く僕達の子供だね」

「ふふ

そうですね」

俺を見ながら2人はいう

……まさか

俺は自身の手を見た

……小さい

「あぶぶぶぶ（赤ちゃんからののぶぶぶ）」

「ふふ

元気が良いわね」

「そうだな

……そうだ

この子の名前を考えたんだが

思い付かなくてね

出来ればエミに決めて欲しいだ」

何故名前って言った途端悲しく成るんだろうか

「そうね……アラン……アランなんてどうかしら？」

「アラン……いい名だね

さすがエミ」

良かった……何が良かったのだろうか？

「これからあなたの名前はアラン

青葉アランよ」

青葉アラン……それがこれからの俺の名前

さてさてあれから数時間後……

いま僕はチャクラの確認している

ん？一人称や言い方が変わってるって？

ああそれはね只単に見た目がアラウディに成るなら俺って一人称よりも僕の方が良いと思ってね

話を戻して

転生して僕は修行法を考えただけど……まあ赤ん坊の僕に何が出るんだ？って話で取りあえずチャクラの確認をしようと思う

どれどれ……

数分後

随分……速く見つかったな

青い靄？みたいものがあつた

それ以外にも赤色、薄い青色、薄い赤色、黄色、白色等々の靄？も感じられた

感じられたと同時に頭にチート能力の使い方等が流れてきた

白眼……写輪眼……永遠の万華鏡写輪眼……輪廻眼……ギアス……

直視の魔眼等や完成【ジ・エンド】……大嘘つき【オールフィクシヨン】……知られざる英雄【ミスターアンウン】……光化静翔【

テーマソング】etk……の使い方が頭に流れてきた

どうやら初めの青色の靄？ 以外は魔力、妖力、霊力、気力等らしいな

…… 分けるのはめんどくさいね

…… 出来るか分からないけどやってみようか

数分後……

…… 上手くいったね

何をしたかって？

チャクラや霊力等その他全てを一つにしたんだだけだよ

数分で出来るのかって？ 始まりの能力で新しい能力を作って終焉の能力で進化させて完成【ジ・エンド】で上手く操れるようにしたんだよ

そして作った能力は合体【ドッキング】

効力は一度だけ自身が合体したい2つの力を合体出来る能力だよ

何故一度だけかと言えば始まりの能力で強力な能力作ろうと思うとチャクラ等を多く使うからだ

なので一度だけと言う制限をかけた

そして作った能力を終焉の能力で成長させて合体したい能力の制限を無くしてチャクラ等全てを合体した

合体した力の色は銀色みたいな靄だった

そして合体【ドッキング】は無くなったさて次はチャクラコントロールだね

……… 地味

凄く地味だ

どんなだって？

簡単に右の腕にチャクラを集中させてそのまま左腕、右足、左足に

移動させてるだけ

数分後

さて今日の修行は終了だね

修行が終了した同時にお腹が空いてきた

ぐううううう

そんな時部屋のドアが開いた

「あらあら

お腹すいたのね」

そう良いながら胸を出す母親……っちょー！待ってー！何してるの
！……！「いまおっぱいあげるからね」

……そうだったー！

今俺赤ん坊だったー！

ん？口調が戻ってるって？

いやいや今それどころではないからねー！

「はーい

いっぱい飲んでね？」

「あ……あぶぶぶ……！（い……イヤアア……！……）」

数分後

ねえ……今羨ましいと思った人がみ殺すよ？

転生完了（後書き）

良かったな

普通の名前で

「まあね

……まあもし普通の名前じゃなかったら作者をかみ殺してたよ（ボソッ」

ガクガクブルブル

え……えっと……こ……今回主人公のアラン君が魔力等を一つにしてましたが完全なる作者の想像です

合体させたチャクラ？の色が銀色だったのも作者の想像です

「ねえ

なんで銀色にしたんだい？」

あああれね

初めは金色にしようと思ったんだけどアラウディには金色似合っていないって

「まあ……確かにね」

ならばまだ想像が出来る銀色にしたんだよ

まあ紫も考えたんだけどそれだと面白くないしね

「へえ……」

そうなんだ」

それではまた次回

「見ないとかみ殺すよ？」

ねえ

なんで雲雀さんなの？

「……アラウディの喋り方が分からなかったただだよ……」

転生2年間の出来事（前書き）

第三話の始まりだよ～～～
作者の魁斗です

「第三話が始まったんだね
やあ主人公の青葉アランだよ」

さて今回は九尾事件と主人公のアランの決意が出てくるよ～～

「僕の決意？
ワオ楽しみだね」

初めてワオ頂きました！！！！

「君を見てるとかみ殺したくなるよ」

「では第三話の始まりです！！！！！！」

ツバ

逃げ出した作者

「逃がさないよ」

追いかけるアラン

「ギャアアア」

転生2年間の出来事

転生完了してから3ヶ月がたった

僕は何時ものようにチャクラコントロールを行う

最近ではスムーズに右手左手右足左足とチャクラを集中出来るようになった

そして修行が終わった時にいきなり部屋の扉が開いて父さんと母さんと何人かの忍が部屋の中に入ってきた

入ってきたと同時に母さんと父さんは僕を抱き上げてギュッと抱きしめて僕にしか聞こえない声で何かを言った後他の忍の人に僕を渡す

「それでは

お願いします」

父さんは何時もニコニコしていた顔を苦痛に歪め母さんは涙を流すのをこらえていた

忍の人は一度頷くと勢い良く飛び出して行く

数時間後

あれから忍の人は僕をどこかの部屋のベッドに寝かせてどこかに行った

僕は何もする事が無かったので少し寝ていた

誰かの声が聞こえてきたので目を開けると三代目火影がいた

「すまん……すまん

儂が不甲斐ないばかりにお主の母親と父親を………」

其処まで聞いて悟った

（ああ母さんと父さんは死んだんだ……）

我ながら冷たいと思った

どちらにしても暮らしてたのはほんの数ヶ月なのだから悲しくない
……悲しくないのになんで

「お主もやはり悲しいのか」

なんで涙が出てくるんだ

なんで……父さんと母さん顔を思い出すんだ……

なんで……父さんと母さんと暮らした日々を思い出していくんだ……

なんで……なんで……二人の最後の言葉を思い出すんだ

『『アラン……

私達（俺達）はあなたを（お前を）愛している

私達（俺達）の息子に生まれてきてくれてありがとう』『』

ずるい……ずるいよ

ずるすぎだよ

死んじやったら伝えられ無いじゃないか

僕も好きだよって……僕は転生して初めて泣いた

泣いて泣いて決心した

僕はあの2人の分だけ生きて生きて最高の人生だっと思えるぐらい
生きて死んだ後は天国にいる母さんと父さんに自慢して色々な話を
して『好きだよ』って『僕を産んでくれて……愛してくれてありが
とう』って伝えるんだ

それが僕に出来る最初で最後の親孝行だから……

一才時……

あれから色々あったが僕は三代目火影の養子になった

養子になったあと取りあえず立つことと喋れるように努力をした
立てないと何も出来ないからね

そして最近漸く歩けるようになった

話す事はまあ……少しぐらい出来る

取りあえず歩けるようになった僕は監視の目を盗んで変化の術と影
分身の術を覚える事にした

変化の術はコツを掴んだら数分で出来た

影分身も転生者の能力の中にあつた超大天才のお陰で数十分で出来た
超大天才とは名の通りに天才を超えた天才が大天才で大天才を超え
た天才が超大天才それをまた超えた天才が超大天才らしい
どんな事でも人より速く習得出来るらしいよ

さて影分身を習得した次に終焉の能力で影分身を進化させる

進化した影分身の能力は自身のチャクラが無くなるまで影分身は消
えないと言うチート能力になった

影分身の術がチート能力に成つたあと影分身の術をして作つた
だいたい10000人

10000人の僕は同時に変化の術をする

僕の影分身は鳥、蝶、虫 e t k …… に変化した

影分身達に修行法方を教えて外に飛ばした

練習法方は簡単に1000人ほどに始まりの能力の特訓次に100
0人に終焉の能力の特訓次に1000人に転生者の能力の特訓に2
000に体術の特訓に20000人に新しい術の開発&実践に使える
ように特訓残りの30000人に実践練習つとこんな感じに分けた

二才時……

最近結構喋れるようになったよ

10000人の影分身はあれから更に増やして約17000人ぐらいになった

新しく増えた影分身の割り振りは3500人を新しい術開発&実践に使えるようにするための特訓に

残りの3500人は実践特訓に行かした

本体の僕は取りあえずチャクラコントロールの向上をしている

チャクラコントロールだけは影分身に任せず本体の僕がしている

僕も出来る事はする事にした

まあ一才の時点で原作のサクラ以上チャクラコントロールはあったけどね

最近のチャクラコントロールの修行法は右手の人差し指だけに集中等と難しく成ってきたが何とかやっている

それから影分身を解くのはアカデミー卒業時に全て解くつもりだ

転生2年間の出来事（後書き）

「……………」

「どうやら作者は死んだようだ「死んでないよ!!」…………ツチ」

「まさかの舌打ち!？」

「舌打ち何てしてないよ?」

「本当に?」

「本当だよ」

「本当に本当?」

「本当に本当だよ」

「本当に本当に本当?」

「君…………しつこいよ」（殺気

「す……すいませんでした」（ガクガクブルブル

作者が落ち着くまでお待ち下さい

「そ……それでは次回もよろしくね!!!!」

「次回も見ないとかみ殺すよ?」

原作キャラとの出会い（前書き）

「今回初めての原作キャラが出てきます!!!
作者の魁斗です」

「本当かい？」

主人公の青葉アランだよ」

「本当だよ

……そしてアランのハーレム一号でもある」

「何か言ったかい？」

「な……何もないよ」

（よし聞こえなかったな

聞こえてたらかみ殺されたから良かった……）

「そう

ねえ今無性に君をかみ殺したいんだけど」

「っえ?!」

「じゃあ行くよ!!!」

「ギャアアア

つてか毎回こんなかん……ギャアアア!!!!!!」

原作キャラとの出会い

僕は三歳に成った

影分身修行から約一年たった

今日は火影と一緒に日向一族に向かっている

どうやら青葉一族は木の葉でも有名な一族だったらしい
だからなのか有名な日向一族の娘の誕生日に呼ばれた

因みに青葉一族は今僕しかない

どうやら青葉一族は元々少なかったらしくこの前の事件？で僕以外
死んだらしい

アランは原作知識を忘れてるため九尾事件も忘れてます

次の日

今は日向一族の娘の日向ヒナタの誕生日の祝いがあった次の日ヒナ
タの父親とヒナタの稽古を見せて貰ったよ

でも稽古の前に慌ただしかったけど何かあったのかな？ アランは
ヒナタ誘拐事件も忘れています

まあそれは良いとして

稽古を見た感想はヒナタははっきり言って弱いね

別に力とか強さではない強さならこの年で強い方だろうね
ただ心が弱い……いや優しくすぎなんだね

稽古を見せて貰ったあとヒナタはどこかに行ったあと帰ってきてい
ない

ヒナタの父親——ヒアシと言っらしい——に探してきてくれな

いかと頼まれて暇だったから探しに来ただけ……
全然見つからないね

「ひつく……ひつく」

うん？

誰かの泣き声？

取りあえず泣き声のする方へ行ってみようか

草木などの奥に行くと湖がありそこに探していたヒナタがいた

「やっと

見つかった」

僕は泣いてるヒナタに近づいてそう言った

s i d o ヒナタ

今日は私の誕生日

だから色々な人が私の誕生日を祝に来てくれた

私が色々な人をみていたら優しそうなおじいさんがやって来てお父様とお話をしていた

話が終わったのか優しそうなおじいさんは私を見てニコツと笑って

「初めましてじゃな

ヒナタちゃん君に紹介したい子が居るんじゃ

君と同じ年なんじゃけど会ってくれるかのう？」

私と同じ年の子……

今まで私と同じ年の子と会ったことが無いから不安だけど……

こんな優しいそうなおじいさんの知り合いなら大丈夫だよね？

「は…はい」

「そうか」

なら少し待っていておくれ

アラン！…！」

優しいそうなおじいさんがアレンっと言う名を言ったら後ろの人混みから私より少し背が大きくて太陽でキラキラ光る銀髪で透き通る青い瞳を持った格好いい男の子がやってきた

「なに？」

「アラン」

この子がさっき話していたヒナタちゃんじゃ

僕は少しヒアシ殿とお話するからアランはヒナタちゃんとお話して
いてくれんかのう？」

「ふ〜ん……」

まあいいよ」

銀髪の少年が答えたあと優しいそうなおじいさんはお父様と話をしました

優しいそうなおじいさんがお父様に話かけたと同時に銀髪の少年が私に話かけてくる

「僕は青葉アラン

呼び方は好きな呼び方で良いよ」

「わ…私は日向ヒナタです」／／／

私は恥ずかしさで顔を下に俯けた

「どうやら僕は嫌われたようだね」

アラン君は苦笑いする

ち…違うよ！！！！

「それじゃ

農達に行くからのう

また会おうヒナちゃん」

話が終わったのか優しそうなおじいさんはそう言ってアラン君と一緒に人混みに入ってしまった

初めて会った同い年の人なのに……

私は残念な気持ちで今日1日を暮らした

次の日……

今日もお父様と一緒に稽古をする

そう言えば朝から何か騒がしかったけど何かあったのかな？ ヒナ

タは恐怖の余り記憶が飛んでいます

取りあえずお父様がいる稽古場に行った

稽古場にはお父様と昨日の少年——アラン君——がいた
ビックリした私がお父様に聞いたら

「アラン君が日向の力を見てみたいと言ってな」

つと言った

そうだったんだ……

取りあえずアラン君が見ている以外は何時も通りに稽古に入った

そして何時も通りに負けた

お父様は厳しく

「それでも日向一族の本家か！！！！」

つと言ってきた

そして漸く稽古が終わったと同時に私は重い足取りで庭を歩いていった

そして私のお気に入りの湖について私は泣いた

泣いて泣いて何時間かたった時後ろから声がかかる

「やつと

見つけた」

振り向いたら銀髪少年アラン君がいた

「なに泣いてるんだい？」

アラン君は私の隣まで来て私が泣いている理由を聞いてきた

私は素直に話した

お父様が言った通り私は日向の落ちこぼれなんだ……私がそういつたらアラン君はいきなり

「フフッ」

笑い出した

私はなぜ笑ってるのかが分からなくて何故笑っているのかを聞こう

と思ったら先にアラン君の口が開いた

「ヒナタ君は馬鹿だね」

——っえ？

私は思いがけない言葉に啞然としていたらアラン君は続けて言った

「誰にだって不得意な事はあるよ

勿論ヒアシ様にも僕にもね

それと同時に誰にも負けない得意な事だって皆あるんだよ」

「……あるかな？

誰にも負けない事……私にも」

「あるよ

少なくとも僕は知ってるよ」

「っえ？」

私が誰にも負けない事

アラン君は知ってるの？

そう思ってたらまるで心の声が聞こえるかのように私の質問に答えた

「ヒナタは誰よりも優しい……それがヒナタの良いところだよ」

優しい……親戚皆に言われ言葉

初めは『優しい子だね』とだけ段々と『優し過ぎて忍に向いてない』って言われた

アラン君の言葉を聞いて親戚の皆に言われた事を思い出していたらアラン君がまた話し出した

「確かに優しすぎるね」
「やっぱり……」

「でも優しいからこそ出来る事があるよ
優しいからこそ他人の気持ち分かる
優しいからこそ困ってる人がいたら助けてあげられる
誰にでも出来る訳じゃ無い
だから——ヒナタは凄いんだよ」ニコッ

初めてそんな事言われた
心の中が凄くポカポカしてきた
「じゃあ
帰ろうかヒナタ」

アラン君は私の手を握りしめて歩き出した
アラン君ありがとう

夜……

アラン君…… / / / /
何でだろうアラン君の事考えると顔が熱く成ってきたよ / / / /
私アラン君の事が好きなのかな? / / / /
…ああそう言えばアラン君私の手を握りしめて………ボンッ / / / /

アランが自分の手を握っていた事を思い出して顔を更に赤くするヒ
ナタだった

原作キャラとの出会い（後書き）

「ピクピク

「今回死んだよう」「だから死んでないって!!」……ツチ今度はかみ殺してあげるよ……」

「今不吉な声が……

と……とにかく初めての原作キャラはヒナタでした!!

次回（次回って言っても直ぐですが……）は主人公設定です」

主人公設定（前書き）

「今回は主人公のアランの設定です
作者の魁斗です」

「僕の設定かい？
主人公の青葉アランだよ」

「そう君のプロフィールって言えば良いのかな？
を書いたんだよ」

「へえ」

「勿論前世の名前とかもね」

「ピク……名前？
君かみ殺して欲しいの？」

「……っあ
え……えっと……ごめんなさい」

土下座

「許さないよ」

「ギャアアア
こ……このネタばかり……バタッ」

主人公設定

転生前（前世）

名前

全夜半音

転生後（現在）

名前

青葉アラン

転生前（前世）

年齢

18才

転生後（現在）

年齢

3才

好きなもの

仲間、小動物（人とかではなく猫とか）戦い

嫌いなもの

甘いもの、ム力つく奴

髪の色

銀色

瞳の色

青色

容姿

アラウディを幼くした感じ

一人称

『僕』

ステータス

() 内は本気時です

筋力

B (特定不能)

速力

A (特定不能)

チャクラ

A +

チャクラコントロール

A +

能力

最強

チャクラA + は九尾並みのチャクラの約倍のチャクラ量です

神から主に貰った能力

転生者の能力

今まで転生させてきた人たちにあげたチート能力全て

始まりの能力

色々使い道がある

例えば古いものを新しく出来たり新しい能力を創ったりできる

但し大きい能力にを創る場合その能力を創るのに必要な分だけのチヤクラを消費する

終焉の能力

終焉つまり終わり

これも様々な使い道がある

例えば始まりの能力の逆で新しい物を古くしたり進化できる能力を進化させたりできる

何故能力を進化させられるかと言ったら終焉〃最終進と言った感じで進化させられる

ぶっちゃけ始まりの能力と終焉の能力があれば大抵何でもできる

設定

知らず知らずのうちに死んでしまつて転生の列に並んでいた主人公取りあえず流れに任せて転生した

容姿がアラウディだからアラウディみたいな口調にしようと思ったが分からなかったのでアラウディに似ている雲雀みたいな口調にしている

だけど性格が違つので似てない時がある（逆に似てる時があるのかな？）

主人公設定（後書き）

「どうだった？僕のプロフィールは……」

うん？作者かい？彼なら今閻魔に会いに行ってるよ

そんな事は良いけど僕の前世の名前に触れたらかみ殺すよ？
じゃあ次回もよろしくね？

見なくてもかみ殺すからね？」

うちは姉妹との出会い（前書き）

「今回はタグに書いたとおり性転換原作キャラがでます！！
作者の魁斗です」

「誰かは分かりやすいね
主人公のアランだよ」

「まあ確かに題名を読めば分かるよね……」

「分からない人は馬鹿だね」

「とりあえず本編スタート！！！」

うちは姉妹との出会い

ヒナタと出会った時から約一年経った

今日はうちは一族に来ている

日向一族に続いて木の葉で重要な一族だ

何故日向一族とうちは一族が重要かと言ったら2つの一族には特別な瞳術を開眼する場合がある

それが白眼と写輪眼

日向一族は白眼

能力は相手の点穴や経絡系をみたり遠くの方を見ること等々できる
うちは一族は写輪眼

能力は相手の動きをが鈍く見えたり相手の術のチャクラの性質を色で見えたり相手の術をコピーしたり等々ができる

因みに青葉一族にも特別な瞳術がある

全能眼と呼ばれている

だけどその全能眼は青葉一族の初代リーダーしか発動していないらしく能力は分からない

さてさて話を戻そうか

何故僕がうちは一族に来てるかといったら

うちは一族の長？が青葉一族の生き残りの僕と会いたいらしくて三代目火影に言ったらしい

三代目火影何故僕に会いたいかを聞いたら何でも同い年の娘がうちは一族だから友達がなかなか出来ないらしくて考えていたら青葉一族の僕の事を思い出したらしい

……まあ確かに木の葉でも重要なうちは一族更には長の娘と来たら話ずらいだろうね

その点僕はうちは一族と同等かそれ以上の重要な一族だからね……

まあそう聞いた三代目火影は僕に『行つてきなさい』と言つてきたので暇つぶしにやつてきたんだけど……

遅いな……確か十時に待ち合わせだったよね……

因みに今は十一時です

間違えたのかな？

そう考えていたら後ろから声がかかる

「あなたが青葉アラン君ですか？」

「ワオ

僕の名前を知つてるなんて……君達誰だい？」

「ああ

ごめんね先に名乗るのが先立つたね

私はうちはイタチこつちが妹のうちはサスケよ

ほらサスケ自己紹介だ」

「……………」

サスケと呼ばれた少女は姉のイタチの裾をギュッと握って隠れる

「サスケ」

イタチはサスケに自己紹介するようにサスケの名前を呼んだ

「別に構わないよ

名前は分かったからね」

「そう？」

「ごめんね」

「謝る必要無いよ」

「それでこれから何処に行くだい？」

「そうねえ」

「僕がこれから何処に聞くと考え出すイタチ

……… 決まってるやないようだね

「そう考えていると後ろから声がかかる

「ねえ

「お姉さんこんな餓鬼共ほっというて俺達と遊ぼうぜ？」

「そうそう」

「つとイタチにナンパをする小食動物たち

「嫌よ」

「そんな小食動物の言葉をはっきりと断るイタチ

「良いじゃねえ…… あん？」

「君達嫌がつてるだから止めなよ」

「足を叩いてこっちに視線が来たので思った事を言ってみた

「なんだあ？

餓鬼は黙ってな！！」

「ワオ……

小食動物の癖に僕に喧嘩を売るとはね
良いよかみ殺してあげる」

「餓鬼があんまり調子に乗んなよ！！！」

「あ…危ない！！」

小食動物が殴りかかってくると同時にイタチから声がかかるが今の
僕には関係ないね

「行くよ」

僕は服の中に隠していたトンファーを取り出して相手の攻撃を交わ
してカウンター気味に相手の横腹に攻撃する

「ウグッ！！！」

その勢いで回った後隣に居た男にも攻撃を仕掛けるがかわされた

「クク

そんな攻撃じゃ俺はたお……グッへ！！！」

トンファーに仕込んでいた鎖を出してもう1人の男に当てる

「君達弱いよ」

s i d o サスケ

今日お父さんからあつて欲しい子が居ると言われ姉さんと共に待ち合わせ場所にやってきました

「あなたが青葉アラン君ですか？」

待ち合わせ場所に居た私より背が少し大きい銀髪の少年がいた
その少年に姉さんが待ち合わせをしていたアラン君なのかと聞いている

「ワオ

僕の名前を知ってるなんて……君達誰だい？」

どうやら彼が青葉アラン君だったようだ

「ああ

ごめんね先に名乗るのが先立ったね

私はうちはイタチこつちが妹のうちはサスケよ
ほらサスケ自己紹介だ」

「……………」

私は恥ずかしくて話せなかった

「サスケ」

姉さんは私の気持ちを知ってか背中を押してくれた

「別に構わないよ

名前は分かったからね」

勇気が出なくて姉さんの裾をギュッと握っていたらアラン君がそう言ってくれた

「そう？」

「ごめんね」

「謝る必要無いよ」

それでこれから何処に行くだい？」

姉さんはアラン君に謝ったがアラン君は必要ないと言った後どこに行くかを姉さんに聞いていた

「そうねえ」

「ねえ」

お姉さんこんな餓鬼共ほっというて俺達と遊ぼうぜ？」

「そうそう」

姉さんが悩んでいたら変な男組が姉さんをナンパした姉さん綺麗だからね

「嫌よ」

そう考えていると姉さんはきっぱりと断った
さすが姉さん

怖く無いのかな？

「良いじゃねえ……あん？」

「君達嫌がつてるだから止めなよ」

二人組の男達は断れても諦めずに姉さんをナンパしようとしたらアラン君が止めた

って！！危険だよ！！！！

「なんだあ？

餓鬼は黙ってな！！」

「ワオ……

小食動物の癖に僕に喧嘩を売るとはね
良いよかみ殺してあげる」

相手の男達がアラン君を睨んで黙ってると言うと言つとアラン君は相手を挑発？した

「餓鬼があんまり調子に乗んなよ！！！！」

「あ…危ない！！」

姉さんはアラン君に言ったが私は何故か大丈夫だと思った
アラン君なら……って

「行くよ」

アラン君はいつの間に持っていたのか両手に持っているトンファー
でカウンター気味に1人倒した

「ウグッ！！」

1人を倒した後アラン君はそのままもう1人も倒そうとして空中で

回転して攻撃をもう1人の男に当てようとするがかわされた

「クク

そんな攻撃じゃ俺はたお……グッヘ！！！」

何かを言おうとした男をトンファーから出ている鎖で倒す
凄……

「君達弱いよ」

格好いい……／／／／

アラン君の顔を見ると自然と顔が赤くなる／／／sidオイタチ

今日父さんからサスケと同じ年の子とサスケが会ったので付き合って
あげてくれて言われたので集場所までやってきたけど……

何処に行くかか……

決めていなかったわ……

私が考え事していると二人の男達が私をナンパしてきたが私が断
った

断ったのにまだ諦めていないのかまたナンパしてこようとした

「君達嫌がつてるだから止めなよ」

さっき会ったアラン君が男達に言った

「なんだあ？

餓鬼は黙ってな！！」

「ワオ……

小食動物の癖に僕に喧嘩を売るとはね

「良いよかみ殺してあげる」

「ちょ… ちょっと…！…そんな挑発したら…！…！…！」

「餓鬼があんまり調子に乗んなよ…！…！」

男達がアランを殴ろうとする

「あ… 危ない…！」

私はアラン君に声をかける

次の瞬間服の中から取り出したトンファーで二人を倒した

「君達弱いよ」

「やばい…！…！…！惚れちゃった…！…！…！」

s i d o アラン

あの後ご飯を食べたりあまり外を出ない僕のために木の葉の里を案内してくれたり中々楽しめたよ

…！…！けど二人共顔が赤かったけど何だったんだろうね？

原作主人公との出会い（前書き）

「今回は原作主人公のナルトが出ます！！
作者の魁斗です」

「ワオ

楽しみだね

主人公の青葉アランだよ」

「まあ完璧にキャラ崩壊だけどね……」

「？

何か言ったかい？」

「い……いや何も言ってないよ」

「……嘘だね」

「な……何故分かつ……っあ……」

「本当に嘘だったんだね

僕に嘘つくなんて……そんなにかみ殺して欲しかっただね」

トンファーを構えるアラン

「そ……そんな事は無いよ？」

逃げる準備をする作者の魁斗

「逃がさないよ」

「ギヤアアア」

ま…またこの流れ…ガクッ」

原作主人公との出会い

うちは姉妹と出会ってから一週間位経ったある日三代目火影から会って欲しい子が居るとまた言われたから——三代目火影の庭で——
——待っているんだけど……
遅い……遅すぎる……

「お〜い
アラン」

後ろから声がしたので振り向いたら火影と火影の後ろに隠れるようにしている金髪の女の子がいた

「遅かったね」

僕は少し殺気を出して火影に言う

「ハハハハ
そう怒るでない」

「……まあ良いよ
今日は許してあげるよ
それで僕に会わしたい子って誰だい？」

「おお
そうじゃったそうじゃった
アランに会って欲しい子はこの子じゃ」

三代目火影は後ろにいた金髪の女の子を僕の前に出してきた

「ほらナルト
自己紹介じゃ」

「う…うずまきナルトです」

……何故口調に疑問があるのかな？
まあどうでも良い事だね

「そう

僕は青葉アランだよ

呼び方は好きな風と呼んで良いよ
それで僕をナルトに会わせてどうしたいの？」

僕はナルトに自己紹介した後三代目火影に訪ねた

「うむ

アランを呼んだのはナルトと友達に成って欲しいんじゃない」

三代目火影は僕の間にそう言った
だけど疑問が一つ有る……

「？

何故僕何だい？」

そうこれが疑問
別に僕じゃなくても良いだろうし逆に僕は自分の家からめったに出
ない

因みにアランは三代目火影の養子に成ってますが3歳の時から1
人暮らしをしています（家はアランの父親の家）

「うむ

ナルトは友達作りが不得意でう

そこで余り友達が居ないアランと友達に成って貰おうと思つての」

嘘……ついてるね

何故分かるかつて？

三代目火影は嘘をつくとき自分の頭を撫でる癖が有るからね直ぐ分かるよ

まあ別に本当でも嘘でも僕には関係無いね

「ふん

別に構わないよ友達になるくらいならね」

「そうかそうか

良かったのうナルト」

「う…うん!!」

ナルトは三代目火影の問いに戸惑いながら笑顔で答える

「それじゃあ

少しアランと2人つきりで話すかの？」

「うん」

「良いかの？」

ナルトに聞いた後僕にも聞いてきた

「別に構わないよ」

「それじゃあ
後は頼むよ」

Sidonナルト

今日お爺ちゃんから私の友達に成ってくれる子が居るけど会うかと
言われたので会いに行ってみる事にした
お爺ちゃんとお爺ちゃんの庭に行ったら
庭には私の髪とは逆の色の綺麗な銀髪をした男の子が居た

「お〜い
アラン」

お爺ちゃんが銀髪の少年——アラン——の名前を大きな声で呼
んだ

銀髪の彼は顔を振り向けて

「遅かったね」

不機嫌そうにお爺ちゃんに答えた

アランが殺気を出したのは火影だけです
それに少しだけ殺気を出ただけなのでナルトに向けてもナルトは
気づけません

「ハハハハ
そう怒るでない」

「……まあ良いよ

今日は許してあげるよ

それで僕に会わしたい子って誰だい？」

「おお

そうじゃったそうじゃった

アランに会って欲しい子はこの子じゃ」

お爺ちゃんと銀髪の子が話しているとお爺ちゃんが退いて銀髪の子に見えやすいよう私を前にだした

「ほらナルト

自己紹介じゃ」

「う…うずまきナルトです」

私は少し緊張しながら言った

「そう

僕は青葉アランだよ

呼び方は好きな風と呼んで良いよ

それで僕をナルトに会わせてどうしたいの？」

アラン君は私に自己紹介した後お爺ちゃんにアラン君と私を会わせて何をすれば良いのかを聞いていた

「うむ

アランを呼んだのはナルトと友達に成って欲しいんじゃない」

「？

何故僕何だい？」

アラン君はお爺ちゃんの問いにそう答えた
やっぱりアラン君も私なんかじゃだよ……

「うむ」

ナルトは友達作りが不得意でう

そこで余り友達が居ないアランと友達に成って貰おうと思つての「

お爺ちゃんは私に氣遣つて嘘を言つてくれた

私は友達作りが不得意ではなく私が化け物だから友達がいないんだ

……

ナルトはまだ自分の中に九尾が居ることを知りません

「ふん」

別に構わないよ友達になるくらいならね」

……え？

「そうかそうか

良かったのうナルト」

「う…うん!!」

私は初めての友達が出来て嬉しくて久しぶりに笑った

「それじゃあ

少しアランと2人つきりで話すかの？」

「うん」

「良いかの？」

お爺ちゃんがアラン君と話すかを聞いてきて即答で答えた後お爺ちゃん
はアラン君に良いか聞いた

「別に構わないよ」

「それじゃあ

後は頼むよ」

お爺ちゃんは最後にそう言って去っていった

数時間後

あれから様々な遊びをしていた

今している遊び終わったと同時にアラン君がいきなり

「ねえ

友達作りが苦手って言うの嘘だね？」

つと言ってきた

心臓がドキンツて跳ね上がったのが分かった

どうして？どうして分かったの？やっぱり私が化け物だから？

「まあ別に嘘でも構わないよ」

なんで？なんでそう言うの？構わない？じゃあ私と友達に成ってく
れないの？

「ナルトと友達なのには変わりないしね」

私が化けも……っえ？

私はアラン君が言った言葉が分からなくて分からなくて今アラン君は何て言ったの？友達？友達に成ってくれるの？

「なにボーっとしてるの？ほら行くよ」

アラン君が私の手を掴んで走り出した

ドキドキ

何で？何でさっきまで大丈夫だったのにアラン君の顔を見たら顔が熱くなるの？

何でアラン君に手を握られるだけでこんなにドキドキするの？

何で……私アラン君の友達で終わるんじゃないくてそれ以上の関係に成りたいなんて思うんだろ？

ああ……そっか私アラン君の事が好きなのか……
そう考えていたら

「どうしたんだい？

顔が赤いけど…風邪かな？」

アラン君の額が私の額に当たる

っえ？っちょ…ちよつとアラン君！？何してるの！…いやじゃないけど恥ずかしいよ／／／／

「熱は無いみたいだね」

アラン君の額が離れていく

むうもう少ししていても良かったのに
なんならキスしても／／／／

「でも顔が赤いから今日は安静にしとかないとね」

この後お爺ちゃんが来て寝室に行った後アラン君は帰って行った
アラン君……また会えたら良いなあ／／／／

原作主人公との出会い（後書き）

今回は後書きは無しにさせて貰いました

理由は今回この後書きで二つアンケートをしたいと思います

一つ目

オリジナル技を募集

オリジナル技は異常でも荷負担でも魔法でも魔術でも術でも何でも構いません

但し技の効力や出している時の変わりようや見た目等は詳しくしてくれたら助かります

二つ目

原作通り？それともブレイク？

これは主にナルトとサスケです

先ずはサスケですがアランに言われて復讐を諦めてアランと一緒に結構してうちは一族を復活させようと夢を見る

この場合サスケの代わりのオリキャラが出ます

それとも原作通りにさせるか

この場合はオリキャラは出ません

始めを選んだ方はサクラをオリキャラに惚れさせるかアランに惚れさせるかも投稿して下さい

次にナルトですが原作通りにドベかアランに修行をしてもらいそこそ強くするか……どちらが良いでしょうか？

この二つ（三つ？）のアンケートは多い方で決めさせていただきます
但しサクラがオリキャラに惚れても最終的にはアランを惚れるかも

し
れ
ま
せ
ん
w
w
w
w
w
w

日向の天才娘との出会い（前書き）

「久しぶりの更新です」

……但しグダグダだけどね」ボソツ

「本当に久しぶりだったね……何してたんだい？」

「うん？小説めぐ……あれ？アラン君今君の手にトンファーが見えるよ？」

何でだろう？ そのトンファ―を僕に対して構えてるような……幻覚だよね……！ 疲れてるだけだよね……！！！！！！」

「安心しなよ……」

「幻覚じゃないよ」

「安心出来ない！！出来ないから！！！！ってギャアアア！！！！」

日向の天才娘との出会い

ナルトと出会ってから数ヶ月が経った
今僕は久しぶりに日向家にやってきた

日向家本家に入ろうとした時門の前で日向家を睥んだ少女が居た
？何してるんだらう？

僕は興味本位でその少女に話かけた

「ねえ

何してるの？」

「ビックッ!!」

少女に話かけたら少女はビックリして此方を見た後口を開いた

「……貴方は誰ですか？」

質問を質問で返してきた

まあ知らない人（子？）に話かけられたらこうなるね

「僕は青葉アラン

君の名前も教えてくれる？」

「私は日向ネジ……」

「日向？」

日向なのに何故日向家を睨んでいたの？」

「ここに住むヒアシ様が私の父様を殺したからだ！！！！」

話を聞くと僕が前来たときつまりヒナタの誕生日の日にヒナタは誘拐された時ヒナタの父親のヒアシが誘拐した人物を殺したらしい殺した相手は雲隠れの里忍らしく雲隠れはヒアシの首を求めたが本家のヒアシの首を易々出せないで影武者を出すことに決めたその相手がヒアシの双子の弟でネジの父親のヒザシに白羽の矢が立つたらしい

そしてヒアシはヒザシに掛かってる分家の呪印でヒザシを殺したらしい

偶然それを聞いたネジは本家を恨んでいるらしい

「分家は所詮本家の玩具

籠に入った鳥だ！！空も自由に飛べない鳥なんだ！！！」

……??

「君馬鹿かい？」

「な……なにっ！！！！」

「鳥だって空を飛びたければ自力で籠を出れる君だって空ぐらい自由に飛べるよ」

「そ……そんなの……むりに……」

「無理じゃないよ……」

僕だって自由に居られるのに君が自由になれない何てないよ

……でも頑張っても出来ないなら……次は僕も手伝ってあげるよ」

「……っえ？」

ネジは僕の言葉を聞いた後目を開けてポカーンとしている
でも僕は話すのを止めない

「君だけじゃあ無理なら僕が手伝ってあげる
だから……頑張ってみよう……空を自由に飛べるように
籠に入った鳥だって籠さえ出れば自由に飛べるんだから」

「出来るかな？」

ネジは顔を俯かせたまま僕に問う

「出来るかなじゃないよ……出来るんだよ」

「……うん……！」

私頑張ってみる……でも出来なかったら……そ……その……／／／／

俯かせていた顔をバツと上げて力強く言った後に顔を赤らめて何か
を言おうとする

僕は次に何を言うのが分かったので

「フフッ

分かってるよ……その時は僕も手伝ってあげるよ」

笑いながらもネジに言ってあげた

この後ネジは本家の門を恨めしく睨まず笑いながら帰って行った

「さて…

そろそろ出てきたらどうだい？」

僕はネジが見えなくなっただのを確認してから後ろに向かって話しかける

「いつから気づいていた？」

「ネジと話しを終えてからぐらいかな？」

嘘であるアランはネジと話すときから知っていた

因みに何故分かったかと言うと転生者の能力で視線に敏感になる能力のお陰である

「それで？」

何か用かい？」

「ああ」

ヒアシは一步前に出てきて

「ありがとう」

頭を下げて来た

「……なんだい？」

いきなり悪いけど僕には男の頭を下げる趣味はないよ？」

「……それでもだ

ありがとう」

「……どう致しまして

じゃあお礼として何時かネジに真実を教えてあげてよ」

アランがそう言った瞬間ヒアシは勢い良く頭をあげた
ヒアシの顔はまるで有り得ない物を見る目でアランを見た

「君は……一体
何を知ってるんだ？」

「さあね…
少なくとも今回の真実は知ってるよ」

アランは記憶眼と言う能力でこの家に残る記憶を覗いた
記憶眼とは物が体験した記憶を見ることが出来る目アランが創った
能力

「じゃあね
また会おう」

アランはそう言ってヒアシに背を向けて歩き出す

「……ライトとエミは最後に凄いものを置いていったな
流石木の葉の鉄壁と木の葉の妖精の息子と言うことか……」

ヒアシがそう呟いた言葉をアランは聞こえなかった

s i d o ネジ
フフフフ

つえ？何笑ってるか？
それはね？今日嬉しい事があったんだ
何があったのか？それはね……ある銀髪の優しい男の子に会ったんだ

彼はこんな私でも自由に成れるって自由に飛び回れるって

それに……こんな私を……そ……その……手伝ってくれるって／／／／

そう言ってくれたから私は頑張れる

今思えば私は誰かに助けて欲しかったんだと思う

だから……ありがとうアラン

でもアラン格好良かったなあ……

って私は何を思ってるの／／／

うう……アラン……だ……だ……だいす……き……ボフツ／／／

想像の中でアランに告白？するだけで気絶するネジ

その頃アラン大好き軍団（ナルト、サスケ、イタチ、ヒナタ）は……

「……っは！！……何だろう？何かアラン（くん）関係でライブ
ルが増えた気が??」

同じ事を言っていた

その頃アランは……

「クシユ

……誰か噂をしてるのかな？」

約五名が噂しています

日向の天才娘との出会い（後書き）

「アンケートの結果サスケの変わりのオリキャラを出します
サクラは今の所は勘違いで行きたいです

ってかサクラ嫌われてるね……殆どNARUTOの小説でアンチさ
れてるし……

まあ僕もあまり好きじゃないから良いんだけどね

だけど最終的にサクラもハーレムに入れようと思います

もしもサクラを最初っからハーレムに入れるべきって意見が出た場
合検討させてもらいます

それではまた次回！！！！」

復讐の先（前書き）

「今回はサスケが復讐を誓うのか誓わないのかをかけた回です
まあ……ぶっちゃけ分かってる人いっぱい居ますよね？」

「ってか……雲雀さんの性格で説得？は難しい」

「でも雲雀さんの性格に似させてるだけで雲雀さんではないのでその
辺はしっかり分かった状態でお読み下さい」

「……アラン君どこに居るんだろうって？……秘密です」

復讐の先

ネジと出会ってから数ヶ年が経ち僕は七歳に成った時事件が起きた
事件の内容は下に書いてあるよ

うちは一族皆殺し

加害者

うちはイタチ

被害者

うちは一族

但し生き残りが2人存在している
生き残ったのはうちはイタチの妹うちはサスケ
うちはクウロの二名である

それを聞いた僕は取りあえずサスケに会いに行ってみる事にした

数分後……

取りあえずうちは一族の土地に着いたけど……

サスケはいないね……

仕方ない…違う所も探してみようか……

数時間後……

あれから数時間探したものの全く見つからない
夕日が落ちてきたので今日は諦めて家に帰ろうとしたとき

湖の橋？の所に座っているサスケを見つけた
僕はゆっくりサスケに近づいて話しかけた

「何してるの？」

「！！！！」

……アラン」

サスケは振り向いた瞬間驚いていたが直ぐ元に戻って僕の名前を呼ぶ

「それで

此処で何してたの？」

「……実はね」

サスケから今回の事件の事を聞いた

……記憶眼で見た記憶と一緒にだね……但し真実とは違うね

記憶眼でイタチの任務の事を偶然知った

でも……今僕が真実を教えてもサスケは信じてないね

これは……本人から聞かなきゃいけない

はあ……全く面倒な姉妹だね

「……それで

サスケはどうしたいの？」

僕はサスケの話を聞いた後僕はサスケに訪ねる
これからどうしたいのかを……

「復讐したい！！！！」

私から父さんを……母さんを奪った彼奴に復讐したい！！！！」

「復讐した後は？」

「そ……それは……」

復讐したい気持ちを聞いた僕は復讐をした後の事を聞いたがサスケは考えていなかったのか答えられない

仕方ないね……

僕は違う質問をした

「サスケは復讐して何をしたいの？」

何をしたいの……復讐したから父親、母親が生き返る訳ではないなら……何故復讐したい？

「……………それが私の生きがいだから」

「……………馬鹿なの？」

ネジの時も思っただけど……何故自分で全てを決めてしまっただろうね？

「っえ？」

サスケは僕の顔を見てくるが僕は気にせず話を続けていく

「生きがい？ならイタチを殺したら死ぬのかい？

生き残ったのに自分で自分の命を奪うのかい？

それで君は満足なのかい？……違うね

そんなので満足になる人間なんていないよ

それにイタチにも事情があつたのかもしれないよ？」

「そんなの……彼奴に有るわけ……」

「なら何で君を生かしたの？」

全く僕はお人好しだね

でも例え誰かが僕の事をお人好しと呼んでも自己満足と言っても僕は僕のしたいようにするだけだよ

それが僕の悪党【せいぎ】だからね

「それは……自分の器を図るため」

「幼い君を？」

自分の器を図るなら他にいっぱいいるよ？」

「いつか自分を殺す奴として血を分けた私を……」

「自分殺すため？」

何故わざわざそんな事をするの？

いつか自分の脅威に成るかも知れないんだよ？
なら生かさないよ……普通はね」

「そんなの……そんなの」

「サスケ……」

まず復讐なんかよりイタチの事を分かることから初めても良いと思うよ

知った後にやっぱり復讐するって言うならそれでも良い……それはサスケが決める事だからね

でも……今すぐ決めなくても良いと思うよ
ゆっくり……ちよつとづつ分かっていこう
僕も手伝ってあげるから」

「……本当？」

本当に姉さんに復讐しなくても良いの？」

「うん」

サスケも無理してたんだよね？好きな姉さん
だけど同じくらい大好きな母親に父親達……どちらも選べない
そんな狭間に居た
無理に復讐なんてしなくても良いんだ

「うん……」

私姉さん……イタチの事を知っていく
でも……復讐はしないよ」

「……それが今の君の答え？」

「答えかは分からないけど……私はそう決めた」

「そう」

なら先ずは自分家に帰ってご飯食べなきゃいけないね？」

「え？……っあ……！！」

もうこんな時間！！！！！！」

どうやら時間を忘れていたみたいだね

「それじゃあ僕も帰るよ」

「っあ！！」

ね…ねえ！！！！！！」

「？」

なに？」

立ち去ろうとした僕にサスケが声をかけてきたので振り返ってサスケに何か用か訪ねた

「そ…その

家近いんだけど…その…ね…き…今日……やっぱり何でもない！！！！！！」

ああ……

そう言う事ね

「ねえ」

「な…なに？」

「僕の家遠いんだけど今日君の家に泊まらせてくれない？」

「っえ？」

「駄目かい？」

「う…うん！…！！」

「い…良いよ！…！！！！」

こうして僕はサスケの家に泊まらせて貰うことになった

s i d o サスケ

あれから家に帰ってきてても落ち着かずにいたため料理とかはアランに着くつて貰った……ううゝ本当は私が作るつもりだったのに……でもアランの料理美味しかったなあゝゝ

それにしても……相変わらず格好いいなあ／／／／／格好いいのに優しいなんて卑怯だよアラン／／／／／

ああ……明日も楽しみだな！…！！

復讐の先（後書き）

「やあ

前書きでは居なかったアランだよ

どこに行つてたかつて？

ある作者をかみ殺しに行つてたんだよ

まあそんな事はどうでも良いとして今回のグダグダな話を楽しんでくれたかい？

楽しんでくれたと言つてくれる読者がいたら作者の代わりに僕から

お礼言わせて貰うよ

ありがとうね

では次回も見てくださいなきやかみ殺すよ？」

特別編小さく可愛くなったアラン（前書き）

「めずらしく連続投稿です!!!」

……但し特別編

今回は何時もみたいにシリアス？ではなく笑い？です

ぶっちゃけノリで書きました

キャラ崩壊してますサスケが……アランのキャラが一気に変わります
嫌な方は見ないで下さい」

特別編小さく可愛くなったアラン

さて……今日は何をしようかな？……うん？何だい？この薬？

これ飲めば良いこと有るよ……いやマジで……！！！！
神様より

ワオ……面白そうだね……

アランは如何にも怪しい薬？を開けて飲んだ

ボフンっ！！！！

飲んだ瞬間爆発音がして白い煙がアランを包む

s i d o サスケ

昨日はアランに説得されてイタチに復讐をするのを止める事にした
復讐はしないけど一発殴るくらいはするよ？

そんな事を考えていた時だった……

ボフン！！！！

いきなりアランが泊まった部屋から爆発音がした

「アラン！！！！」

私はアランに何かあったのかと不安に成りながらアランが泊まった

部屋の前に行って一気にドアを開ける
ドアを開けたら白い煙がたっていたが今は気にする余裕が無い私は
部屋の中に入っていた

「アラン！……アラン！……アラン！……」

私は夢中にアランの姿を探していたそうしていたら煙が徐々に薄れていき部屋の中心位に人影があった

「アラン！……」

私は漸く見つけたアランに近づいた

「アラ……ン」

するとそこには……

「なんにやい

きみゆ……かみゆこりよしてほちいの？」

【なんだい

きみ……かみ殺して欲しいの？】

舌足らずの声で身長が小さく成ったアランが居た

な……な……か……可愛い……これがあの格好いいアランなの？！

「？」

なにゆだめってりゆの？」

【？】

なに黙ってるの？】

可愛い〜

もう駄目抱きしめちゃう！……！

「むきゅ……！

く……くりゃひい……！」

【ムグッ

く……苦しい】

な……涙目のアランも……可愛い……！

私もう……死んでも良いかも……

一時間後……

漸く正気に戻った私は取りあえずアランの姿を堪能……ではなく何故こんな……可愛い過ぎる姿に成ったのかを探していつかまたこの姿にしよう……じゃなくて元の姿に戻そうとしている
だが……！

「……………」トコトコ

私の後ろに着いてきているチビアランが可愛いくて……じゃなくて何時転ぶか心配で集中できない

ジロジロ見るサスケ

そんなサスケにチビアランは……

「？

どうひたの？」

【？

どうしたの？】

首をカクンとして訪ねる

ぐはっ！……！

サスケはああ……！アラン可愛すぎ……！もう私死んでも良い……！
！ポイントに9999のダメージを受けた

「な……何でもないよ」

サスケは鼻を押さえてどうにか耐えた

「ほんとおつに？」

【本当に？】

下から覗き込みながら言うアラン

ぶはっ！……！

サスケはああ……！アラン可愛すぎ……！もう私以下略に9999の
ダメージを受けた

私……今日生きていけるかな？

本気でそう思ったサスケであった

だけど……此処で死んでもしやわせ!!!!!!

本気の本気でそう思ったサスケであった

数時間後……

チビアランの可愛さ……ではなく頭脳との勝負で苦戦したサスケ
だが何か怪しい薬を見つける
薬には……

小さく、舌足らずになる薬

但し1日限り

因みに小さく成ってる時の記憶は本人には残りません

っと小さく書いていた

これでまたいつかアランを小さく……ではなくアランが戻れる鍵を
見つけた

1日たてば……何時も通りのアランに……

べ……別に悲しくなんかないわよ？少し……いやものす……っ
く残念なだけだよ？！

それにしても……小さく成ってる時の記憶は本人には残らないって
良かったわね薬を作った人物残ってたらアランにかみ殺ろされて……
っ!!!!!!残らない!!!!!!それって……今アランに何をしても
アランの記憶には残らないってこと!!!!!!

「ね……ねえ？

アラン」

「なにゆ？」

【なに？」

「一つ私の言うこと聞いてくれる？」

「うにゆ

いによ」

【うん

いいよ】

「ありがとう」

ナデナデ

「うにゆ～～」

和むアランに

ぐはっ！！！！

サスケはああ！！！！アラン可愛す以下略に9999のダメージを受けるサスケ
数時間後

「じゅ…準備できた？」

「うにゆ

できゅたよ」

「じ…じゃあ出てきて」

そうサスケが言った瞬間ドアが開いた
ドアが開いた其処には………

「こりえでいいによ？」

黒いメイド服を来たアランがいた………って！！何故メイド服がある
んだ！！…と言う苦情は受け付けません
強いて言うなら神とかがサスケにプレゼントしたんじゃない？
因みにサスケは余りにも可愛い過ぎるアランを見て言葉を失って
います

「どうしたによ？」

そんなサスケにアランは首カックン&下から目線&メイド服でトド
メをさしにいった
次にどうなるか………皆さん分かりますよね？

「ぶはっ！！！！」

サスケはああ！！！！アラ以下略に9999のダメージを受けた
サスケはこの世に悔いなし！！！！と言うかのように気絶した

因みにサスケが気絶して目覚めた時にはアランは既に元通りだった
らしい
けどまたチビアランにさせようと企んでいたりするサスケが居た
とか居なかったとか………

s i d o 創造神

クククッ

俺が思ってた通り面白く成ったな
ハハハハッ

今回の犯人である創造神は笑っていたとか……

s i d o アラン

何だろ……今すぐ創造神をかみ殺したい気分だよ

アランはまだ見ぬ創造神をかみ殺す事を約束した
その時神界で創造神が震えていたとか居なかったとか……

特別編小さく可愛くなったアラン（後書き）

「はじゅみえまちいて

あにえばありやんでちゅ」

【初めまして

青葉アランです】

「か…かかか可愛い過ぎる！…！！！」

「フミユ

い…いちゃい」

涙目モード

「ぶはっ

……………ガクッ」

作者は気絶した

「みゅ？」

アランは首を傾げた

……………取りあえず締めてくれ

「じゅかいもみにやいちよかみゅころちゅよ？」

【次回も見ないとかみ殺すよ？】

因みに【】はチビアランが言った言葉です

修正しました

アカデミーでの日常（前書き）

「今回はアランの日常を書いてみたよ」

「僕の日常？」

「そうだよ」

……そして日常の中でのフラグもね」

「何か言ったかい？」

「い……いえ？」

何も言っていないよ？」

「そう……」

なら良いけどね」

「話を戻して今回の話は結構飛ばしています
バンバン飛ばしていますのでご注意ください下さい
ってか何時に成ったら戦闘に成るだろ？」

アカデミーでの日常

今回は僕のアカデミーでの日常を紹介するよ

ん？何時入学したかだつて？大体……サスケと同じぐらいかな？

入学式を書け？特に面白くないよ

それに……うちの作者の力量を分かってるでしょ？

メタ発言禁止っ！！！！

作者

それ……A O i a ネタだね

分かる人居るかな？

まあどうでも良いね

それじゃあ楽しんで来てよ

s i d o サスケ

こんにちわ

前回チビアランのかわ……コホンっ超可愛い姿に気絶したサスケだよ

っえ？言い直した意味がないって？其処はツツコンじゃ駄目だよ？

コホンっ……それじゃあ話を戻して

私は今アラン君の家に向かっている

何しに行っているかって？それはねアランとラブラ……ではなく一緒に登校するためだよ

っえ？いまラブラブ登校って言いかけたらどうって？……イッテナイヨ？

そんな事をしているとアランの家が見えてきた
アランの家の前には金髪の女の子2人と黒髪の女の子5人がいた

……またか……

「サスケ……何時も何時も来なくても良いよ？
アランは私と登校するから」

いきなり睨めつけながら話かけてきた子はうずまきナルト
アランに恋心がある

「そうよ
それからナルト？貴女も来なくて良いわよ？私がアランと登校する
から」

もう1人の金髪の女の子は山中いの
ナルトと同じでアランに恋心あり

「めんどくさいけど……
アランと登校するのは譲らないよ？」

めんどくさいが口癖の女の子は奈良シカマル
此奴もアランに恋心がある

「例えシカマルでもアランは譲らないよ？
アランと登校するのは僕だからね！！！！」

シカマルと親友の秋道チヨウジ
もちろんアランに恋心がある

「べ…べべ別に私はアランと登校したいわけじゃないわよ？／／／／
た…偶々通り過ぎただけだからね？！／／／／」

彼女は犬塚キバ何時も赤丸と言う犬を連れている
因みにこう言ってるがアランに恋心がある

「わ……わわ私も偶々っていうかね？」

ワタワタしている女の子は日向ヒナタ
アランとは古くの知り合いでアランに恋心がある

「私はアランと登校出来れば文句無い……」

無口の彼女は油シノ
何故かは知らないが彼女もアランに恋心がある

って！！アラン貴方好かれすぎよ！！！！
……こんなにライバルが居るなんて……

しかもアカデミーにはもっと居るし教師陣も狙ってるって噂だし……
ああっ！！もうアラン！！！！フラグ立て過ぎよ！！！！
そんな事を考えて居ると不意にアランの家の扉が開いた
そこには……

「君達……
うるさいよ？」

不機嫌そうなアランが居た

「……あ……アラン（君）おはよう！！！！」「……」

「」

「……おはよ

それで？何の用だい？」

「あ……あのね？

私達……その……アランと一緒に登校したくて……／／／／」

「「「「「／／／／「「「「「」

ナルトが皆の気持ちを代弁するが……

「わ……わわ私は違うわよ？……私は……そのう……偶々って言うかね？……偶然あんたの家の前を通っただけよ！！／／／／」

素直になれない者が若干一名いた

「キバの事は一先ずおいといて……アラン！！！！私達と一緒に登校して！！！！／／／／」

私はドキドキする気持ちを抑えてアランに言う

「ふうん

まあ良いよ……ちょっと着替えてくるから待っててよ

アランがそう言って家の中に入って行った

「「「「「やった~~~~~！！！！「「「「「」

「……やった」

「良かったあ」

「……良かった」

アランが家に入った瞬間皆が喜びを叫んだ

因みに下の3人は上がキバで中間がヒナタで下がシノである
数分後……

アランが着替え終わって出てきた

因みにアランの服装は雲雀が着ている服です
学ランではなく黒い服です

相変わらず格好いいなあ……って私は何を考えてるんだっ！！
！！！！

「それじゃあ
行こうか？」

「……………うん！！（…うん）……………」

アカデミー到着

sidoアラン

あれから僕達は9人全員でアカデミーに登校をした
だけど……何故僕が頭を撫でたら皆顔を赤くするんだろうね？

ん？鈍感？

僕は鋭い方だよ？

……何だいそのため息は？かみ殺すよ？

まあそんな事はどうでも良いとして何故か男子から殺気が飛んでくるのは何でだろうね？

女子からも殺気が飛んできてるしね……

僕何かしたかい？

男子はアランがモテるから

女子はアランの周りにいる8人に殺気を送っているのだがアランは自分に送られてると勘違いしている

取りあえず到着した僕達は席に座る事にした

僕が座ったら隣にキバが座ってきた

「どうしたんだい？

僕の隣に座るなんて珍しいね？」

「べ……べべ別に良いでしょ？どこに座ろうが私の自由でしょ！！
！！」

「ふゝん」

僕は座ったキバを見た

キバは何故か俯きスンツとしていた

そんなキバを見て僕はキバの頭の上に手を乗せた

「ふ……ふえ？……っ／／／／」

キバは始め何が何だか分からなかったようだが分かった瞬間顔を真

っ赤にしていたよ

……そんなにイヤなのかな？僕に触られるの

「な……ななな何してるの／＼／／」

「……キバが犬に見えたからつい……」

僕は小動物が大好きなんだよ

……だからキバがスンとした姿が小動物の犬に見えたから撫でてみたんだけどね……

そんなにイヤなら仕方ないね

アランはそう思ってキバから手を離れた

「っあ……っ／／／／」

キバは残念そうな声を出した後急に顔を赤くして席を立ちどこかに行った

s i d o キバ

私は何時ものように素直に成れなかった

今日だってアランと一緒に登校したかったのに嘘をついた

……アランに嫌われてないよね？嫌われてたら嫌だなあ……

そんな事を考えているとアカデミーに到着して皆各自好きな場所に座っていく

そんな中私はアランの座った席を見た……
アランの座った席にはまだ誰も座っていなかった……

チャンスと思つた私はアランの隣に座つた
座つた瞬間アランが

「どうしたんだい？」

僕の隣に座るなんて珍しいね」

何て言つてきた

それは何時も皆に取られるからで……／／／／

「ベ……ベベ別に良いでしょ？どこに座ろうが私の自由でしょ！！
！！」

まだ

私は何時も素直に成れない

「ふゝん」

素直に成れない自分に落ち込んだ私
そんな時頭の上に何かが乗つた感触がした

「ふ……ふえ？……っ／／／／」

何なのか初めは分からなかつたけど良く見たらアランの手だつた
……っえ？アランの……手？

「な……ななな何してるの／／／／」

私は慌ててアランに言う

「……キバが犬に見えたからつい……」

わ…私が犬？

アランの犬……悪くないかも……って私は何を考えているんだ……！！

そう考えていたらアランが私の頭から手をどけた

「っあ……っ／／／／」

私は残念な気持ちともっとして欲しい気持ちがいっぱいになってつい声を出してしまった

声を出した事が分かって恥ずかしく成って席を立って教室から出た教室から出た私は誰もいない廊下まで走った誰もいない廊下で崩れるように座りアランが撫でた頭を触った

「気持ち良かったなあ／／／／

っだから私は何を考えているんだ……！！

うっう……これもどれもアランの所為だ……！！胸がドキドキするのも切なく成るのも顔が赤くなるのも全てアランの所為だ……！！／／／／」

それから数分して漸く正氣に戻れた私は教室に戻った

sidoアラン

何故か教室を出て行ったキバの代わりにキバが座っていた席に座る
チヨウジ

「あ…ああアラン／／／／」

何故か顔を赤らめて僕を呼んでくるチヨウジ

「何だい？」

「きよ…今日はいい天気だね！！！！／／／／」

「そうだね」

数分後

「アラン！！！！」

そ…その…あの…ね……」

何かモジモジしだしたチヨウジ

「き…今日ね……」

アランの……為にね……お……お弁当……作ったんだ／／／／」

「ワオ

本当かい？それは楽しみだね

……でも僕が作った弁当はどうしようかな？」

「っえ？

あつ！！そ…それなら良いよ！！！！アランはアランが作った方食べなよ！！！！！！」

そう言った後チヨウジは俯いた

「……ねえチヨウジ」

「な…なに？アラン」

「僕のお弁当いらない？」

「っえ？」

でもそうしたらアランのお弁当無くなっちゃうよ?」

「僕は大丈夫だよ」

そう言いながらアランはチヨウジが持っているお弁当を取り

「僕にはチヨウジが作ってくれたお弁当があるからね」

「っあ……／／／／」

「うん？」

このお弁当くれないの?」

「う……うん!!」

い……良いよ!!! 僕が作ったお弁当で良いなら……／／／／」

「そう?」

ならチヨウジが作ったお弁当楽しみにしとくよ」

アランはそう言った後チヨウジが作ったお弁当とアランのお弁当を交換した

「……ありがとうアラン／／／／」

チヨウジは小さくそう言った

s i d o チヨウジ

やっぱりアランは格好いいよ……あんなさり気なく優しくするなんて……
もっともっと好きに成っちゃうじゃん……

大大好きだよ……アラン／＼／
s i d o アラン

授業などが終わり今はお昼ご飯時

皆好きな場所で好きな相手（恋愛間ではない）とご飯を食べている
僕はめったに誰も来ないアカデミーの裏の森に向かっている
廊下を歩いていたら急に肩を（優しく）叩かれたのでそちらを向いたらシノがいた

「シノ？」

どうしたんだい？何か僕に用かい？」

「一緒に…食べない？／＼／／」

少し顔を赤らめながら言うシノ

「ワオ…シノが誘って来るのは珍しいね」

何時もはナルトやサスケ、いの等が多い

「……駄目？」

「ん？」

別に良いよ？」

僕はそう言って裏の森に向かう足を動かした

数分後

数分した時いきなりシノが話しかけてきた

「…………どこに向かつてるの？」

「僕が最近見つけた食事場だよ」

そう言つて更に森の奥を進と今までの雑草としたような場所ではなく
広くて気の間から太陽の光が見えるのが綺麗で中央には大きな湖
がある

「…………綺麗」

シノはそんな場所に目を奪われていた

「僕のお気に入りの場所の一つだよ
特別にシノだけに教えてあげるよ」

「…………特別／＼／／」

シノはアランの特別と言つ言葉を気に入つたようだ

「だから

誰にも言つたら駄目だよ」

「…………言わない…………絶対」

「それじゃあ

「ご飯食べようか？」

「……………うん」

その後今日のお弁当はチョウジが作った物って言ったら機嫌を損ねたので頭を撫でたら機嫌が直ったよ……………何で頭を撫でたら機嫌が直るんだろうね？

読者の代わりに言っておける……………この鈍感！！！！！！
作者より

何だい

今凄くムカつく声が聞こえたような？

s i d o シノ

アランの手暖かった……………

シノはアランが撫でた頭をさすっていた

でも……………弁当の時は胸がムカムカした……………

次に胸のあたりをさすった

……………胸……………無い

アランもやっぱり胸がある方が好きなのかな？

……………明日から牛乳飲も……………

ガッツポーズをとって決意するシノ

s i d o アラン

今はシノとお弁当を食べた後シノと別れて先に教室に戻ってきた所だよ

そしてまた授業が始まる

因みに隣の席はシカマルだよ

そう考えていたら教室のドアが開きそこから担任のカズヤ先生が出てきた

「それじゃあ

授業始めるぞ〜」

今回の授業は隣の席同士で行う心動の術を行うぞ」

心動の術……医療忍術の基礎の基礎で相手の体を触って心臓が動いているかを瞬時に分かる術である

「それでは右に座ってる者は左に座ってる者の手を握れ」

右は僕で左がシカマルだから僕がシカマルの手を握る事になるね

因みに他はナルト×サスケ、いの×チョウジ、ヒナタ×シノ、キバ×サブキアラである

「／／／／」

アランの手が近づくに連れて顔をどんどん赤らめる
それと同時に7、8人位の手が赤くなる
そしてアランの手がシカマルの手に触れて絡める

「ドキッ！！！！／／／」

それと同時にシカマルの顔が一気に赤くなる
そして7、8人位の手も一気に赤くなる

「手を繋いだら早速心動の術をかける」

アランは素早く片手で印を結んだ

「心動の術！！！！」

ドクドクドク！！！！

心臓の音が速い？

「大丈夫かい？シカマル」

「ふ…ふえ？／／／
にや…にやに？」

「心臓の音が速いけど大丈夫かい？」

「だ……大丈夫だよ／／／？」

……本当に大丈夫なのか？

s i d o シカマル

アランの手が私の手に……／／／
今日めんどうだからって適当な場所に座らないで良かった／／／

「それでは次は逆で術をかける」

ぎ…逆？

逆って…私がアランの手を握るの！？

む…無理だよ

「？

何してるの？速く印結びなよ」

「う…うん／／／／」

私は慌ただしく印を結びアランの手を握った

この時また7、8人位の手が赤く成った

「し…心動の術／／／／」

ドク…ドク…ドク

こ…これがアランの心臓の音…／／／／

そんなこんなで今日の授業が終わり私は顔を俯けたまま帰った
自分の手を握りながら

s i d o アラン

漸く授業が終わり皆各自帰って行く
さて…僕も帰ろうか

そう思い立ち上がり玄関？に向かった
玄関？からでて門？を通る時

「ね…ねえ／／／
アランもし良かったら一緒に帰らない？／／／」

金髪の女の子
いのから声をかけられた

「別に構わないよ」

「ほ…本当！！！！／／／／」

「うん

ほら速く行くよ」

「あ……うん！！」

アランが先々行くのを少し遅れてからいのが駆け寄る

アランに追いつきそうな時足を挫いてこけそうになるいの

「あつ！！！！」

咄嗟に目を瞑つたいの
だが何時まで経っても痛み来ないので目を開けてみるとアランに抱
えられていた

「大丈夫かい？」

「う…うん大丈夫…痛っ!!」

いのは大丈夫と言いながら立とうとするが挫いた足が痛む為立てない

「無理しなくても良いよ

僕がおんぶしてあげるよ」

「で…でも

私重いし……」

「はあ

仕方ないね……先ず謝つとくよ？悪いね」

「っえ？な…なに……キヤア!!!!!!」

アランはいのの腰に手を伸ばしそのまま持ち上げる所謂お姫様抱っこである

「あ…アラン？／／／／」

「しばらくの間我慢してね？」

「う…うん／／／／」

その後のいののの家まで送っていった
勿論お姫様抱っこそのままである

sidoいの

うう／／／／／

アランが変な事するからお母さん達にからかわれたじゃない／／／

アランが送ったあといのの母親は「いの何時の間にあんな格好いい彼氏作ったの？」といのをからかい父親は「孫を見るのは速いかもな！……！」と笑いながらいのに言い

いのはそんな事を言われて顔を赤らめていた

うう／／／／

で……でもアランの顔をあんなに間近に見れたしお……お姫様抱っこもして貰ったし……今日は最高の日だったなあ／／／／

アランの日常はフラグと共に毎日過ぎて行くのだった

アカデミーでの日常（後書き）

「はい

今回のあとがきは私作者一人で勤めます

今回の話は今回新しく出てきたハーレム陣にフラグを強化しました

っえ？シノ達のフラグを立てた時の話を書け？まあ………何時かね？

っえ？それからフラグ強化無理ありすぎ？

文才の無い作者の私が無理無しではやっていけませんよ

っえ？ナルト達は？

彼等は今まで出てきていたので無しです

っえ？TSキャラ達の容姿が気になる？

仕方ないですね………TSキャラの容姿は

ナルト

容姿

リボーンの京子の髪を金髪にした感じ

サスケ

容姿

キノの旅のキノ

キバ

容姿

とあるシリーズの御坂

シカマル

容姿

ブリーチのルキア

チヨウジ

容姿

遊戯王GXのレイ

シノ

容姿

涼宮ハルヒの長門の髪を黒くした感じ

ネジ

容姿

バンブーブレイドのタマちゃん

です

因みにチヨウジは痩せています

それからシノの口癖の「何故ならば」は言いませんしグラサンも当然かけていませんので悪しからずに……
それでは次回も見てください」

神との遭遇新たな能力&転生者VSアラン（前書き）

「今回アランに新たなチート能力がつきます！！
つえ？これ以上強くなるのかって？

成りますよ

それでは本編スタート！！！！！！」

神との遭遇新たな能力&転生者VSアラン

あれから何年か経って今僕は12才になった

12才になったって言うことは皆分かるよね？

僕は木の葉の下忍に成って3歳から始めていた影分身修行を終えた所だよ

っえ？アカデミー卒業シーンを書けっつかい？

書いても良いけどつまらないよ？

僕が分身の術をしたただけだからね

さて話が長く成ったね

今僕が何をしてるかっつて言うといきなり影分身を解いてフィードバックしてきた経験が凄すぎて気絶したただだよ

……今情けないって思ったかい？

なら君なら耐えられるのかい？何度も何度も殺される経験に？

まあそんな事はどうでも良いんだけど

僕気絶したのに何故か白い空間に居るんだけど……？

確か僕気絶したよね

なんでこんな場所に居るんだい？

「それは俺が話そう」

声がしたので声がした方を見ればモヤシみたいな奴が居た

……体は細いけど強いね……

僕は前世のスキルで此奴がただ者じゃないことが分かった

「誰だいきみ？」

「俺かい？」

俺は神だ……それも最高神ゼウスだぜ！！！！」

親指を立てて威張る最高神ゼウス

………ウザイね

「それで？」

その最高神ゼウスが僕に何のようだい？」

「まあ

用事は2つあるんだけど………良い知らせと悪い知らせどちらが良い？」

「なら

良い知らせから聞かせてよ」

悪い知らせは後から聞きたいからね

「分かった……

なら良い知らせだ………お前神に成ったぜ！！！！しかも最高神クラスの！！！！やったね！！！！」

………ん？

「今なんて言ったの？」

「だから………お前神に成ったんだよ

しかも俺と一緒に最高神にな

最高神なんて俺を入れても2人しか居なかったんだぜ？

ああ………因みにもう1人は天照大神な」

「そんなのはどうでもいいよ
それよりなんで僕が神に成ったりしたんだい？」

「まあ

お前が神に成った理由は五個ある

一つ目はあの永遠の影分身だ

あれのおかげでお前は12才という体で何万年も生きた事になった
からだ

まあ何万年生きて神になる奴は沢山いるからな

2つ目はお前が転生した一族が神の血を引いて居たからだ

全能眼は神の血を引いているから出てきたんだしな

……しかもお前の場合前世でも神の血を引いていた一族だったからな
三つ目は転生者の能力のせいだ

あまりの膨大な力だった為世界が神と認めたんだ

まあそれでも下級神だがな

四つ目は始まりの能力のせいだ

始まり……つまり始まりである俺や天照大神の力も使えると言うわけだ

まあ大抵の奴は力に負けるんだがお前は転生後で俺と天照大神の血を引いているから大丈夫だったんだよ

最後の理由はやっぱり終焉の能力のせいだ

理由はまあ始まりの能力と一緒に魔神や邪心死神等々の能力が使える
まあこれも普通なら力に負けるんだがそれはお前の前世の神の血が
役にたったんだろうな

まあこれだの理由でお前は最高神になったんだな」

……何かとんでも無い真実を知ったよ

僕の家計が前世も含めて神の血を引いていたなんてね……はあまさ
か良い話で疲れるとは思わなかったよ……

「まあ

その話はもう良いよ

それで？悪い話の方は？」

「悪い話はな……

お前の世界に間違っつて転生者を入れちゃった！！」

「……ん？

確か転生者の列は僕が一番後ろだったし能力？に僕以外の転生者が居ない世界って言ったよね？」

「すまん……手違いでな」

「まあ……良いよそれは

っで何故わざわざ僕を呼び出したんだい？もしかしてそれで終わるかいい？」

「ああ……実はなお前の世界に送った奴を始末して欲しいんだわ」

「？

何故だい？」

神であるものがわざわざそんな事を言うのはおかしいよね？

「いや……な

そいつが転生した理由がな……」

「なんなんだい？」

「ハーレムを作るためなんだよ」

……はい？

「そんなの僕には関係無いじゃない……」

「その所を頼む……」

やってくれたらお詫びと神昇格のお祝いとして三つ能力をやるから

……！！

だから頼む……！！」

「はあ

仕方ないね

なら能力の三つを言わせて貰うよ？」

「ああ……！！

何でも来い……！！」

「まず一つ目の能力は転生能力」

「？

なんだその能力？」

あれ？

こんな会話前もしたような……？？

「転生能力は死んだ後違う世界に転生できる能力だよ
勿論僕が言った能力を持つてね」

「なる程なる程……

それで？次の能力は？」

「今の僕は疲れているからね
その疲れとチャクラ等の消費を回復してよ」

「それは簡単だな……
なら最後の能力は？」

「そうだね……
なら………つて出来るかい？」

僕は小声でゼウスに最後の能力を伝える

「まあ
難しいがやってみよう

はあ…… お前の頭の中はどうなってるんだ？今でも下手したら俺と
天照大神2人が相手でも負けるかもしれないってえのに更に強く成
ろうなんて」

「僕はまだまだ強くなるよ
…… もう後悔はしたくないからね」

「……そうか
ああ後ろにある扉を開ければあちらの世界に戻る
それと同時に新たな能力を追加される」

「うん
何から何までありがとうね」

アランはそう言って後ろの扉から出て行った

「頑張れよ……」

悪党【せいぎ】と言う真理を見つけた神よ」

ゼウスがそう言った言葉はアランに聞こえない
だからアランは知らない

アランが神に成った一番の理由は悪党【せいぎ】という世界の真理
の一つを見つけた事だということに……

inアランの家

さてどうやら帰ってこれたようだね

さて…… 先ずは転生者をかみ殺すでしょうか

「能力作成…… 転生者探し…… 使用回数一回…… 創造……!!
そして発動」

……… いたっ!!……!!

「腑罪証明【アリバイブロック】発動」

その瞬間アランが消えた

sido転生者

アハハハハ!!……!!

転生完了だ!!……!!

これでヒナタやいのを俺の嫁に出来るぜ……!!

しかもこの世界はナルト達は女と来た!!……!!

これは俺にハーレムを作れと言う世界からのメッセージだ!!……!!

違います

作者&世界より

あん？

今なんか聞こえたような……？

「まあ

どうでも良いや」

「何がどうでも良いんだい？」

突然後ろから話しかけられて振り向いたらそこにはアラウディが居た……っは？嘘だろ？なんでNARUTO世界にリボンキャラのアラウディが……？

ああ……コラボか！？

ならハルや京子も俺のハーレムに……！！！！

馬鹿な転生です

もう一度言います馬鹿な転生です

因みに今居るのは死の森です

「まあ……

僕には関係無いけど……僕は君をかみ殺すだけだからね」

つぶ……！！

何此奴！！！！アニメで出てきても闘わなかった奴がチートオリ主の俺に勝てると思ってんのか！！ｗｗｗｗ

「行くよ」

アランはトンファ―を取り出して馬鹿な転生者に攻撃を仕掛ける

「う…うわああ…！！！！…たんてね投影開始【トレースオン】
！！！！」

馬鹿な転生者は馬鹿な演技をして如何にも転生者が選ぶ1位2位に出てくる投影で干将・莫耶【かんしょう・ばくや】を投影してアランのトンファーを防いでそのまま後ろに下がったアランに干将・莫耶【かんしょう・ばくや】を投げつけ

「壊れた幻想【ブローケン・ファンタズム】！！！！」

爆発した

「ははははっ！！！！」

これで俺の勝ちだ！！！！」

勝ちを宣言した馬鹿な転生者

……だが

「誰が勝ったの？」

爆発で煙が立ったのが晴れてきた

そしてその場には半分黒で半分白の指輪を右手に嵌めて左手には指輪と一緒に半分黒で半分白のボックスが握られていた

指輪には黒と白の炎がたっていてその炎をボックスの穴に注入するそしてボックスが開きボックスからは真っ白なトンファーと真っ黒なトンファーが出てきた

「な…なんだよそのボックス兵器は！？」

そんなの原作でもアニメでも出ていなかったぞ！？」

「当たり前だよ……
これは僕専用の武器だからね……話はもう終わりだよ……それじゃあ行くよ?」

「ック……
投影開始【トレースオン】!!!!熾天覆う七つの円環【ローアイアス】!!!!!!」

馬鹿な転生者の前に花弁状の七枚の盾が現れた
……がアランの真っ白トンファーで攻撃すると盾は何事もなく破壊された

「っな!!!!!!……っく!!!!!!
投影開始【トレースオン】!!!!約束され【えく】」

聖剣を投影したが次は真っ黒なトンファーで破壊される

「っくそ!!!!!!
王の財宝【ゲートオブバビロン】!!!!!!」

馬鹿な転生者は次の手でまたまた転生者が選びそうな能力で右手に赤い槍を取り出す

「突き穿つ死翔の槍【ゲイボルク】!!!!
まだだ!!!!!!」

赤い槍を投げたと同時に新たな剣を取り出す

「天地乖離す開闢の星【エヌマエリシュ】!!!!!!」

最強の飛び道具に最強の一撃がアランに迫る

「modechange盾!!!!!!」

真っ白いトンファーと真っ黒なトンファーが靄に変わった
アランは片手を前に出した

その瞬間靄は真っ白い盾と真っ黒な盾に変わった

すると突き穿つ死翔の槍【ゲイボルグ】は真っ黒な盾で天地乖離
す開闢の星【エヌマエリシュ】は真っ白な盾に防がれた

「な…なに!!!!!!」

「うん……新しい力の試しはもう良いかな？」

ほら転生者君早く次の手を打たないとかみ殺すよ？」

「つく!!!!!!」

体は剣で出来ている

血潮は鉄で心は硝子

幾たびの戦場を超えて不敗

ただ一度の敗速もなく

ただ一度の勝利もなし

担い手はここにひとり

剣丘で鉄を鍛つ

ならば我が生涯に意味は不要ず

この体は無限の剣で出来ていた！！！！」

その瞬間世界が塗り替えられた

「へっ」

世界を塗り替えたんだね

それでこそかみ殺しがいがあるよ」

アランの目の前には無限の剣達がいる

「……だけど

僕の前じゃあ意味ないけどね

modechange銃」

盾だったものが靄になり次に銃に成った

アランは黒い方の銃で様々な方向に撃った

「ははははっ！！！！」

なにしてやがる！？この剣達に怯えて狂ったか！？」

相手はアランを挑発するがアランはお構いなしに銃を撃った

そして急にアランが撃つのを止めた

「あん？

もう終わ……っな！？」

そして……変化が起きた世界が……塗り替えられた世界が壊れていく

「この銃は破壊を司る

こんな事は簡単にできるよ

さて……もう君には打つ手はないようだね」

そう言つて真つ白な方の銃を向ける

「ま……まってく」

「さよなら」

バンっ

真つ白な銃を撃つと転生者は氷
砕けた……

神との遭遇新たな能力&転生者VSアラン（後書き）

今回のあとがきは今回出てきた真っ白&真っ黒な武器紹介です
今回出てきたあの二つは七つの武器になります
今回は七つの武器の能力を紹介します

刀

黒
速さ

白
見えない

弓

黒
時空を超える

白
追尾生

銃

黒
破壊

白
創造

盾

黒

効果をなくす（ゲイボルグ等）

白

破壊力をなくす（エクスカリバー等）

トンファー

黒

どんな武器でも壊す

白

どんな盾でも壊す

グローブ

黒

殴った後（力は無い）指を鳴らすと殴った場所が爆発する

白

馬鹿力

槍

相手の身体的能力を関係なく殺せる

以上！！！！

槍は2本より一本の方が使いやすそうなので光と闇の靄を合わせた
ら槍になりと言う設定です

……ってかチート過ぎだろって我ながら思います

こんなチート過ぎる能力を持った主人公ですが呼んでいただけると
ありがたいです

それからお気に入り200を超えました！！皆様本当に感謝しま
す！！！！

それではまた次回お会いしましょう！！！！

はたけカカシ登場（前書き）

「今回は前回忘れていたアランの神としての能力とアランのもう一つの名前を出します」

「一応言っとくけど前世の名前じゃないよ？」

「それでは本編スタート！！！！！！」

はたけカカシ登場

昨日転生者を倒したアランだよ

あの後魔改造&持ち運び型精神と時の部屋に入って昨日貰った武器の修行&影分身修行の復習をしたよ

……おかげで今はくたくただよ……

魔改造&持ち運び型精神と時の部屋とはこの精神と時の部屋は1日で二年間であり持ち運びが可能なのだ!!!!!!

今何をしてるかって？

下忍に成ったから写真？を撮って今はアカデミーの席に座ってイルカ先生を待つてるんだよ
それにしても……

因みにイルカ先生も性転換してます

ガヤガヤ………

相変わらず五月蠅いね

ガラガラ

「はーい!!!!!!

静かにする!!!!!!」

イルカ先生が入ってきて生徒達を静める

「今から先生が決めた班を発表する」

イルカ先生がそう言った瞬間

「「「ええ~~~~~」」」

不満の声が上がった

「それぐらい俺達で決めさせてくれよ！……！」

「そっだそっだ！……！」

……君達

忍に成る気あるの？

誰と成ろうが関係無いよ

「静かに！……！」

お前等はこれから忍に成るんだ！……こんな事で一々文句を言うな
！……！」

イルカ先生がそう言うと言は黙った

「それでは一斑から発表する………次第七班………うちはクウロ
春野サクラ………そして………うずまきナルト………！」

（よっしゃー！……！

クウロ君と一緒に！……！）

（そんなぁ………アランと離れちゃった………）

（………フン）

分かりますが上からサクラ、ナルト、クウロです

「次に八班

犬塚キバ

油女シノ

日向ヒナタ！……！」

（アラン……）

（アラン君……）

（……アラン）

上からキバ、ヒナタ、シノである

「次に九班は……第十班は奈良シカマル
秋道チョウジ
山中いの」

（……めんどくさい

アランとも一緒じゃないし……）

（そんな……

アランと一緒にじゃないの！？）

（ええ……！？

なんでアランと違うのよっ……！）

上からシカマル、チョウジ、いのである

「十一班……………だ」

あれ？

僕とサスケの名前だけがでなかった……？

「そして青葉アランとうちはサスケは特別班第零班だ」

「先生

第零班って何ですか？」

サスケがイルカ先生に尋ねる

「まあ

基本はスリーマーセル何だが今回は2人が余ったからな男子と女子から成績優秀者を入れたんだ
まあ基本第七班と活動してくれ
担当上忍も一緒だからな」
これを聞いたナルトは……………

（やったあああ！！！！！！）

思いっきりガッツポーズを取っていたとか……………

「それでは担任の先生を名前を言うぞ

先ず一班は……………第七班と第零班ははたけカカシ先生

第八班は紅先生第九班は……………つで第十班はアスマ先生つで第十一

班は……………つだ

それじゃあ担任の先生がくるまで大人しくまっ待っているよ？」

イルカ先生はそう言って教室から出て行った

それから数分後……

第七班と第零班の担任上忍以外は来た

……それにしても遅いね

「サスケ

僕少し眠るから担任上忍が来たら起こしてよ」

「っえ？

あつ……うん分かったよ任せて」

僕は隣のサスケにそう言っただけで眠りについた……

ん？

何だいここは……

どこかで見たことがあるような……ああ神か……

「よう

久しぶり……ではなく昨日ぶりだな」

「そうだね

……それより僕に何の用だい？」

「いやな

お前の神の名前とお前の神の能力を教えようと思ってな」

……ん？

「神の能力って創造能力じゃないの？」

「いや

創造能力は下級神だ

俺達上級神になると創造能力でも出せない能力を出す
具体例をあげるなら天照大神の能力は始まりと終焉の炎だ」

「へえ

そうなんだ

それで僕の神の名前と能力は？」

「うん

お前の名前は阿耨美須王汰那斗簾神【あぬびすおうたのとすかみ】
だ」

やたら長いね……

「神としての能力は死を司る……」

「？」

「良く分かってないようだな……

つまり死を司るって言うのは死体を腐らさなかったり相手に死を錯
覚させたり出来るんだよ」

「……なにそれ

僕今でも充分なのにそんなデタラメな能力……」

「まあ出ちまったもんは仕方ねえからな

……ほら目覚めの時間だぞ」

「ん？どうい「ア……ラ……」サスケ？」

「お前今寝てるだろ
どうやら起こそうとしてるらしいな」

「そのようだね
じゃあ僕はもう行くよ」

「ああ
じゃあな」

アランは光に包まれ消えた

sidoゼウス

それにしても始まりの能力と終焉の能力でだいたいの神の能力が使えるつてのにこの2つでも使えない能力をだすとはな

しかもエジプト神の死の友と呼ばれた神アヌビスとギリシア神の死の神の名前を足した名前……

全く未恐ろしい少年……いや本当に恐ろしいのは人間だな……創造した俺より想像力があるなんてな……

「全く……
飽きないな人間は」

ゼウスは微笑みながらその場から消えた

sidoアラン

さて……サスケに起こされた……此処までは良い……でも何故僕達の担任が黒板消しは頭に乘せてるんだい？僕が寝てる間に何があったんだい？

そんな疑問を持ちながらもアカデミーから外に行き適当な階段の所に座った

「それじゃあ

先ずは自己紹介からだな

先ずは……金髪の女の子から順にだ」

先生は女性です

金髪の女の子……ナルトしかないね

「先生

先ずは先生から自己紹介してください」

ナルトが正論を言った

「私からか？

まあ良いか……私の名前ははたけカカシ
好きなものはまあ色々だ

嫌いなものをお前達に教える気は無い

将来の夢って言っても今更私が言っても意味が無いだろう……

……ま……こんなところだな」

……結局分かったのは名前だけだね

「それじゃあ

金髪君からだな」

「仕方無いですね……」

私の名前はうずまきナルト

好きなものは一楽ラーメンとイルカ先生と仲間です……でも一番好きなのはアラン（ボソッ

嫌いなものは諦めるやつと仲間を傷つけるやつ

将来の夢は……内緒です／＼／＼」

ナルトは何故か此方を見て言った

今更ですがナルトの口調は慌ててる時とかにだってばねという設定にしました

「それじゃあ次はピンク髪の子」

「私の（以下略）」

原作の所をサスケからクウロに変えたのと嫌いなものにナルトと言わなかっただけ

「次に黒髪の少年」

「俺の名前はうちはクウロ（以下略）」

此方も原作のサスケとほぼ一緒なので

「じゃあ

黒髪の女の子」

「はい

私の名前はうちはサスケです

好きなものは仲間と……アランです

嫌いなものは仲間を傷つけるやつです

将来の夢はうちは一族復旧です」

サスケが将来の夢を言った瞬間クウロが睨んできたがサスケは完全に無視した

「最後に銀髪の君ね」

「僕の名前は青葉アラン
好きなものは小動物に仲間
嫌いなものは仲間を傷つけるやつに甘いものと覚悟のない正義かな？
将来の夢は特に決めてないよ」

僕が自己紹介を終えると先生が口を開いた

「それじゃあ

明日演習場に集合してくれ」

「先生

演習場に集合して何をするんですか？」

「何……下忍最終試験だよ」

「……っえ？」「」「」

僕以外が疑問視をあげる

「あれ？

君はビックリしないんだね」

「だいたい

予想してたからね」

「ふうん

まあ良いか……ああそれから明日朝ご飯は食べてこない方がいいわよ？」

「な……何故ですか？」

サクラがビクつきながらカカシに聞く

「……………吐くから」

先生は笑いながら少し殺気を出してサクラに言う

殺気だすって……アカデミー卒業したての下忍に出さないでよね

「それでは……解散！……！」

こうして僕達は家路についた

……何故か僕とクウロ以外は異様に燃えていたけどね

（（アランと一緒にの為に……！！！！！！））

（クウロ君と一緒にの為に頑張るわよ！！しゃんなろー！！！！！！）

分かりますが上がナルトとサスケで下がサクラです

まあ僕も楽しもうか

先生……覚悟してね？

明日は僕がかみ殺してあげるから

はたけカカシ登場（後書き）

「ねえ

僕の神としての名前のアヌビスとタナトスの話は本当かい？」

「本当だよ？

ちゃんと調べたしね

アヌビスは死の友で死体を腐らさない神でエジプトの神
タナトスは死の神でギリシアの神だよ」

「ふゝん

魁斗にしては良くやったね」

「初めてほめて貰えた！！！！

……さてと……あとがきはこれぐらいにして……次回もよろしくお
願いします」

「次回も見ないとかみ殺すよ？」

はたけカカシVS青葉アラン

今僕は自分の部屋でいる

今の時間帯は9時30分

昨日上忍が指定した集合時間は8時00分……完璧に遅刻だね……
っん？何故落ち着いてられるかって？

ああ……それはね

あの上忍必ず遅れると思うからだよ

何故そう思うって？

まあ昨日の出来事があったからね

後は勘かな？

まあ多分僕の勘は当たってると思うけどね

さて10時00分までに行くとして……まずは転生者狩りに行く
かな？

っえ？前倒しただろって？

それがねあの馬神またやってくれてね……

全く困ったもんだよ

とりあえず行きましようか……

数十分後……

ある野原……

ここは数十年有名になる場所である

何故？理由は簡単……そこで死んだ数十人の死骸が“腐らなかった

”からだ

皆は個々を【死の神が居た野原】と呼ぶ……

さてと……転生者狩りも終わったし早速演習場に向かうとしようか
……

因みにアランが演習場についた時間はジャスト10時00分だった
とか……

「遅い！！！！」

着いた瞬間ピンク髪の……サクラにそう言われた
っえ？今忘れてただろって？

うん忘れてたよ
だって興味ないもの

「そうだよアラン……
集合時間から随分遅いよ……」

周りのナルトやサスケもそう言ってくる

「ってか
君達あの上忍が速く来ると思ったの？」

僕は初めから思っていた疑問を三人にする
残念ながら僕は信じられなかったよ……まあ現に今居ないんだけどね

「……遅いわね」

「……そうだね」

話そらしたね……

まあ別に構わないけど……

さてあの上忍担任が来るまでどうやって転生者を狩ったか教えてあげるよ

〈回想〉

あの時僕はとりあえず転生を見つける能力を創った後また能力を創って転生者を一力所に集めた

「な……なんだ!？」

「ここは何処なんだ!……!」

「俺は波の国の近くに転生した筈だぞ!……!」

何十人と居る転生者の前に僕は降りた

「やあ

転生者達君

転生したばかりの君達には悪いけど……此処で“死んでよ”」

僕がそう言った瞬間転生者達は倒れていく

……何をしたかって？

簡単だよ僕の神としての力を使っただけに過ぎないよ

「つぐ……!……!」

な……なんなんだよ!……!」

「俺は……まだ死にたくねえ!……!」

あれ？

2人も残っちゃったね

っえ？何故残ったかって？

……僕の神としての力はね複数人を相手だと生き残る“可能性”があるんだよ

まあ最低でも神とかから力を貰った転生者レベルがなきゃ駄目なんだけどね……さてどうしよっかな？あの2人は……よし……力カシと戦う前のウォーミングアップとして闘ってあげるよ

奇術師【マジシャン】&暗器術師【ブラックマスター】発動

奇術師【マジシャン】とはどんな相手でもばれずにマジックが出来る

暗器術師【ブラックマスター】とは暗器がとても上手く出来る異常である

この二つを使ってボックス兵器とリングを取り出した

因みに奇術師【マジシャン】を発動していたので指輪は指に嵌っている状態です

ボウッ！！

僕はリングに炎を灯しボックスに炎を注入する

そしてボックスから出てきたトンファー（普通）を持つ

「それじゃあ

行くよ？」

アランが脅威的な速さで相手に近づく

「つくそが……！！！！」

光化静翔【テーマソング】発動！！！！」

「setピカピカの実！！！！」

2人はアランを上回る光の速さでアランの攻撃をよける

「setゴムゴムの実！！！！
ギアセカンド！！！！」

2人のうち1人が体が赤くなり体から煙がでる

「ゴムゴムの……JETピストル！！！！」

「光化静翔【テーマソング】……フルコーラス！！！！」

1人は目にも止まらない拳でアランに攻撃をしよう1人は何十何百となり周囲から攻撃をする

「……死の翼【デス・バッド】」

ドカンッ

「ハアハアハア
ど…どうだ！！！！」

煙が晴れ……そこには何も居なかった

「「よ…よっしゃー！！！！」」

「何を喜んでいるんだい？」

「……っな！！！！」

突然後ろから声がして振り向くと銀色に輝く髪に全てを飲み込みそうな青い瞳……そしてボロボロな黒い翼を生やしたアランがいた

「な……何故だ！！！」

光の速さで攻撃したのに……何故お前が其処にいる！？」

光化静翔【テーマソング】を使っていた転生者がアランに問う

「確かに君達は速かったよ……それも光の速さ並みにね
……でもねただ光より速いだけだよ……僕は死よりも速い」

「俺……よりも速い……だと？」

そんな事はない……俺が負けるはずがない」

「あ……有り得ない

悪魔の実の能力を持った俺が負けるはずがない……！！！！
つくそ！！！！！」

ゴムゴムの……JETピストル！！！！！！」

「そつだ……さっきのはまぐれだ……！！！！
そつに違いない！！！！」

なら次は無い！！！！光化静翔【テーマソング】フルコーラス！！
！！！！」

「君達に次はないよ」

いつの間にか転生者の後ろに立っていたアラン

「誰も僕には触れられない」

ドサッ！！！！！

アランの言葉と同時に倒れる転生者達……

〽回想終了〽

つとこんな事があつたんだよ……

「やあ皆おはよ」「遅い！！！！」「」「」

さてと……どうやらカカシが来たようだね
じゃあ楽しもうか……

「それで……
何をするんだ？」

クウロはカカシにそう聞いた

「うん？ああ
今日わね……」

チャリン

カカシは忍具入れのポーチから鈴を4つと時計を取り出した

「この時計が鳴るまでに鈴を私から取れたら合格だよ」

「っえ？」

せ…先生それ…数あつてませんよ？」

「？」

何言っている

これであっている」

「で…でも！！

私達5人ですよ！？1つたりませんよ！！！！！」

「だから

それであっているだよ

必然的に1人残ると言うことは1人は最低でも失格するんだよ」

「そ…そんなの」

「忍の世界は“そんなの”って事ばかりだよ」

「っ……………」

カカシの最後のセリフで黙るサクラ

「それじゃあ

私がスタートと言ったら開始だ

因みに殺す気でこないと取れないぞ？」

少々殺気を出しながら言うカカシ

「それじゃあ……」
スタート！！！！」

スタートと同時に全員隠れた……

さて……

この試験の正解はチームワーク……わざとみんなで行けないようにしているようだけど忍の世界ではどんな任務でも成功するために何でもする……犠牲は必要になる今回もそれなんだけど……サクラとクウロは無理だね
それに僕も1対1でやってみたいしね……まあナルトとサスケにはこの事は話しておくかな？

数分後……

取りあえずナルトとサスケを見つけて今回の試験の答えを教えた後
カカシと1対1で戦いたいから邪魔しないでと釘をさした
その代わり僕がサスケとナルトの分の鈴は取るけどね……
ん？どうやらクウロとカカシの戦闘が終わったようだね
何故分かるって？僕の実力の一つの千里眼を使ってるだけだよ
さて……と

次は僕の番だね

s i d oカカシ

さてと……うちはの生き残りの1人とピンク髪の女の子は倒したと……
あとはあの人の娘とうちは一族のもう1人の生き残りとおの人のライバルと呼ばれた人の息子……楽しみだね

そんな事を考えていたら手裏剣が飛んできた

「っ!!」

カカシは忍具入れのポーチからクナイを取り出して手裏剣を弾く

「流石は上忍だね」

手裏剣が飛んできた方向には太陽で輝いている銀髪の少年アランがいた

「今の手裏剣

当たっていたら危なかったよ？」

さっきの手裏剣は正確に急所を狙っていたからね……

「あれは挨拶だよ

それにあらぐらいしてもらわなくちゃね」

「ッッフ

言うね」

あれぐらい……少なくとも中忍では出来ない事をあれぐらい……ね

「話は此処までだよ」

アランは何処から出したか分からないけどトンファアを取り出した

「まあ

本を仕舞うぐらいの時間はあげるよ」

原作と一緒にクウロやサクラ相手に本を読んだ状態で闘ってました
読んでいた本はイチャイチャパラダイス（男性版）です

「結構優しいね
けどそんなのいらな
ビュン

カカシが喋り終わる前にアランがクビにトンファーを軽く当てた
「っ！！！！」

トンファーをカカシの首から外して後ろに下がった

「次が最後だよ
本……しまいなよ」

……フフ
これは……本気をださないと駄目のようだね

「これで良い？」

カカシはポーチに本をしまった

「うん……
これで遠慮せずに鈴を奪えるね」

「簡単には取らせないよ」

アランとカカシは同時に動いた

アランが右手で殴ろうとすると左手で防ぎ防いだと同時に左手で鈴を取ろうとすると右手で抑えた
抑えた瞬間足を上げて左足で力カシの頭に当てようとするが力カシは咄嗟に左手で防いだ
そして開いた右手で鈴に手を触れるが力カシが後ろに飛んだ為取れなかった

「結構やるね
君」

「……ふふ
君本当に下忍成り立てかい？」

何処から出したのか分からないトンファー
何時仕舞ったのかも分からなかった
こっちに近づいたときには手元になかった……
本当に恐ろしいね

「これは……本当に本気で行かなきゃ駄目かな？」

「……ん？
なに言ってるんだい？
もう勝負はおしまいだよ？」

「どう事だい？
まだ鈴は取れてないよ？」

「鈴ならもう……」

チャリン

「「取れたよ」「」

草村から出て来たナルトとサスケとアランの手には鈴が握られている

「!!!!!!」

何時の間に……

それになんであの2人まで……？

ピリリリリ

3人が鈴を見せたとはほぼ同時に時計が成った

s i d oアラン

漸く終わったね……

ん？どうやって鈴を取ったかって？

暗器術師【ブラックマスター】で目にも見えない糸をつけたと同時に鈴を2つナルトとサスケの方向に鈴を投げた後糸を引っ張って奪っただけだよ

まあ……そんな事よりどうやら終わったみたいだね

何がつて？

ああこの試験の第2幕がかな？

簡単に説明すると

時間が来たので終了

←

みんなが集まる

←

← サクラとクウロにこの試験の答えつまりチームワークを教える

← そして鈴を取れなかった2人に忍を止める宣言をする力カシ

← キレて攻撃をするクウロ

← だが普通に抑えられて首過ぎにクナイを当てサクラに「クウロを助けたければアランを殺せ！！！」と言う

← 戸惑うサクラ

…… ねえ？もしかして本当に殺す気？

← あんな小食動物以下の奴のためにかい？

← そんなサクラを見て殺気を出すナルトとサスケ

…… 何故？

← 取りあえずクウロの上からどいて話の途中で襲ってきた罰としてクウロには弁当を食わせるなど言ってどこか（遠く？の木の陰に）行った

← なんやかんやでナルト、サクラ、サスケそして僕のお弁当をクウロに上げる事に……全部じゃないよ？流石にクウロも全部は食べれないよ？

← 皆のお弁当からちよつとづつ出した

← あげたと同時に力カシ登場

← その後力カシが「忍者は裏の裏を読むべし忍者の世界でルールや掟を破る奴はクズと呼ばれる」ちよつと間を開けて「だけどな！仲間を大切にしない奴はそれ以上のクズだだと私は思う！！！！」つと

言って合格に成った

……第2幕の答も当たっていたね……

まあ取りあえず明日から下忍なんだね……

ツフ……頑張ろう

はたけカカシVS青葉アラン（後書き）

「ククッ……」

読者の君達……アランの神としての能力を出すのはカカシだと思っ
たか？……残念！！！！転生者だよ！！？」

「またイメチェンかい？」

「いやこれは言いたかっただけ」

「まあ……僕には関係ないね

それより僕の台詞で死よりも速いつて何だい？」

「っえ？

……ああ書いてみたかったただだよ！！！！！」

「それだけかい？」

「いやもう1つ理由がある」

「？

どんな？」

「人は……いや動物もだね

脆く直ぐに死ぬ……僕はそれは何よりも速く……誰でも止められな
いと思うんだ……」

「何か深いような深くないような感じだね」

「まあ良いんだよ

それでは次回もよろしくね？」

「またね」

死の神アラン（前書き）

「ヤッホー！！」

みんな元気にしてたかな？ 魁斗だよ～～～！！」

「…………アランだよ」

「アラン元気が無いよ！！！！もつと元気よ」「うるさいよ…………」ま
まあ偶には元気が無い時もあるよね？

つと話がずれた………… 今回の話はアランの修行&ゼウスの秘密？つて
かみんな絶句する秘密&新しいキャラクター3人登場です！！！！！！」

「結構

沢山あるね」

「書いていたら書きたい内容が増えてね！！

まあアランの修行は短いけどね…………

取りあえず本編出発！！！！！！」

死の神アラン

「ふぁよく寝た

……うん？どこだい此処は？」

アランが目を覚ました場所は右は真っ白な空間で左が真っ黒な空間で後ろと自分が立っている場所は灰色だった

そして真っ白な空間には見覚えのある人物がいてその人物を見た瞬間冷めた目をして

奇術師【マジシャン】と暗器術師【ブラックマスター】を発動して黒白のボックスと黒白の指輪を取り出して指輪に黒白の炎を灯す

「また君かい？ゼウス

次はなんだい？またミスとかなら今すぐ君をかみ殺すよ？」

それを聞いたゼウスは汗を流しながら

「ちょ…ちょっと待ってくれ！？いやマジで待って！！！！君のその武器まじで滅茶苦茶だから！！！」

特に槍の能力が……！！！！

なに能力関係無く殺せるかって……！！！！それなら不老不死である俺でも死ぬから……！！！！

ってか自分にあつた能力を持つ武器って言う願いで何故そんな武器が出て来た！！！！ぶっちゃけそれだけで世界の一つや二つぐらい手に入れられるだろうが！！！！！！！！」

何故か途中でキレルゼウス……まあ一理はあるけど……作者より

「話聞くから早く言いなよ」

炎を消しているアラン

「お前がいきなりボックスとリングを取るからだろうが……」

「……早く言わないとかみ殺すよ？」

再びリングに炎を灯すアラン

「はい言わせて頂きます!!!!!!」

今回アランを呼んだのはアランの神としての能力を完璧に扱って貰うためです!!!!!!」

「？」

完成【ジ・エンド】で十二分に出来るんじゃないの？」

「完成【ジ・エンド】にも限界があるわよ？」

いきなりゼウス以外の声が真っ黒な空間からしたのでそちらを見たら白髪で黒眼の女性がいた

「誰だい君？」

「私？」

私は神……名前は天照大神」

「君が……もう1人の最高神か……」

「私もあなたの事は知っているわ

ゼウスとか他の神が始めた暇つぶしの転生者でありながら神に成った少年……しかも最高神と言う今まで2人しか居なかった席につい

たつて……

神界、天界、地獄、地底では有名よ？アラン……いえ阿濡美須王汰那斗簾神【アヌビスオウタナトスガミ】と呼んだ方が良いかしら？」

「好きな方で構わないよ」

「そう？」

ならアランと呼ばせて貰うわ

私も天照大神ではなくアテムって呼んで私の真名よ」

「真名？」

なんだいそれ」

「あら？ゼウスから聞いてないの？」

「……聞いてないよ」

「そう…真名を教える前に神には位があるのよ

下から順に見習い神、下っ端神、新人神、下級神、中級神、土地神、悪神、善神、上級神、最上級神、そして私達最高神とあるわそして中級神に成ると神としての名前を頂ける訳なのよ

真名はそれまで名乗っていた名前ってわけよ」

「？」

僕は前世と現世では名前が違っよ？それならどうなるんだい？」

前世の名前に成るんだったら……イヤだね

「神に成った時に名乗っていた名前だからアランになるわ」

良かった……

「分かったよ……」

それで？さつきから気になってただけど何故黒色、灰色の空間が増えたんだ？」

「これはさつき言った神位が土地神に成った時にそのものの空間をあげるのよ

ゼウスの場合創り私の場合炎

つまり創る者と壊すもの対に成ってるから白と黒の空間……そして今君が立っている空間はあなたの空間よ」

「そう言うこと……」

つまり死〓灰色ってイメージ何だね」

「それだけじゃ無いわよ？」

「？」

どう言う事だい？」

「さつきも言ったけど創る者〓白

壊すもの〓黒なの」

「……つまり

僕が貰った能力始まりの能力と終焉の能力も関係してるわけだね」

「そう言う事よ」

白と黒を混ぜたら灰色ぽいもんね……」

「それで？」

僕の能力を完璧に扱う為にどうすれば良いんだい？」

「簡単だよ

君には今からアルところに行って貰う

そこで100000万年居るだけで良い

その中で何をしようと構わない

……ああそれから時間の事は気にしないでね現世の世界の時間は止めてるからね」

「へえ……

なら心おきなく好きにさせて貰うよ」

「そう……

なら後ろの扉に入って行って」

アテムがそう言うといきなり後ろから扉が出てくる

「じゃあ

行ってくるよ」

「行つてらっしゃい」

アランは戸惑わずに扉を開けて中に入っていた……

「あれ？」

俺……空気？」

等とゼウスが呟いたり呟かなかつたり……

i n 扉の中

扉に入ったら入ってきた扉が自動にしまった……
自動なら行きも自動で開けてよね……

そう考えているとあらゆる痛みが走った

「っがは！！！！」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛いイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイ
タイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ
タイイタイイタイイタイ

そして次にこの世の物とはいえない思えない熱さが出てくる

「ッグ！！！！」

熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い
熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い
熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い
イアツイアツイアツイアツイアツイアツイアツイアツイアツイアツイアツ
イアツイアツイアツイアツイアツイアツイアツイアツイアツイアツイアツ
イアツイ

次はこの世の物とは思えない寒さがはしる

寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い
寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い

気分転換でゼウスに訪ねる

「っな!？」

お…お前それは言わない約束だろうが!？」

「はあ……あなた最高神だから男って考え古いわよ……変化までして……そんなの解きなさい」

私がそう言つとゼウスの体が光みるみる小さく成っていく

「た…確かに古いかも知れないけど……」

「はあ自覚してるなら辞めなさいよ……」

それにあなた……アランに惚れたでしょ？」

「な…なな何言ってるの／＼／＼!?!?!」

「知ってるんだからあなたが何時もアランの事を見ながら」「ご主人様……／＼／＼」って言いながらオナ「それ以上はダメ……」

やっぱり好きなのね」

「うう……」

そうだよ……好きだよ

アランが転生してから今まで興味方位で見てたらどんどん好きに成ったよ……」

「他の神がミスしてアランの世界に転生者を送ったのを自分がしたようにしてアランに会ったり

アランにお仕置きされたりしてる時頬赤かったものね（変化のした

で……）」

「う……うう／＼／／／」

こんなやりとりをしていると扉が開いた（扉の中の時間は一秒で10000万年であるからもう出て来ても可笑しくありません）
扉から出て来たのはボロボロな黒い翼を生やしてボロボロな黒い剣を持ち目が黒と白に成っているアランだった

「ゾクツ……！！！」

な……なななに？

アラン君を見ただけで自分が殺される感じがした……

「？」

ああ……君ゼウスかい？」

アランはゼウス（女）を見つめながらいう

ああ……ゼウス変化解してる状態だもんね

因みにアランに見つめられているので当然……

「／／／／／」

真っ赤だった

「取りあえずあの扉で1000000万年耐えたよ？
次は何をすれば良いんだい？」

剣を空間？に仕舞いこんで眼も白黒から何時もの青色に変わっていた

「っえ？……ああ

そ…そうね……なら天使召還でもしましょうか」

「？

天使……召還？」

首を傾げながら

「ああ……知らなかったわね

天使召還とは上級神から許されるんだけどね……自分の相棒？パートナーいえ
使い魔？……みたいなのを召還するのよ」

「何故天使召還って言うんだい？」

「今まで召還されたのが天使だったからよ」

「へえ……

面白そうだね……どうすれば良いんだい？」

「まずは六芒星をイメージして」

「……………」

アランは目を閉じ耳に集中するようにした

「次は指で六芒星を書いて」

アランは言われた通りに空気に六芒星を描く

するとアランの眼前に半分黒と半分白の六芒星が出て来た
それにビックリしながら説明を続けるアテム

「最後に自分が思いついた呪文を言って頂戴」

s i d o アラン

アテムに言われて天使召還？って言うのを今はしている所だよ
それにしてもゼウスが女だったのは驚いたね
……次からかみ殺す時は手加減した方が良いかな？

アランは普通の際は子供や女性には優しいですが自分の信念を貫
く為には容赦はしません

「最後に自分が思いついた呪文を言って頂戴」

そう言われ自分の心に聞こえる言葉を口にだす

「我始まりと終焉なり

我死を司る神なり

私の呼ぶ声がしたら駆け寄れ

私の叫ぶ声がしたら駆けつけろ

汝の体は我が矛に……汝の魂は我が盾に……」

そこまで言ったら六芒星が強く光アランもゆっくり眼をあける

「私の命に従い現れよ！！！！」

ピカッ！！！！！！

最後の言葉を言った瞬間六芒星から今までの光より更に眩しく輝いた
流石のアラン達でも眩しいので目を閉じた

光が止むと目を開けた

そして六芒星があった場所には真っ黒なアランと違って綺麗な真っ
黒な翼と対面的な真っ白な翼を持った女性（少女？）がいた

「ルシファー

主の命に従い召還されました」

「ラファエル

主の命に従い召還されました」

上が黒い翼の持ち主で下が白い翼の持ち主である

「我が命

主と共に……」

2人はアランに片膝をついて誓うように言う

「今……契約が成された」

自然と動く口にビックリするアラン

契約が完了したらルシファーとラファエルは立ち上がり

「ルッシー……」

良かったね……！……また一緒に居られるよ……！……」

「なんでラファエルが居るのよ……！……っちょ……抱きつかないで……
……！……！……」

あ……主……助けて……」

「ルツシー！！！！」

先程の威厳が全く無くなった2人にどうすれば良いのか分からない
アランは取りあえずラファエル？つと言う天使を落ち着かせる事に
した

「ねえ

僕の話聞い「ルツシールツシー！！！！」「だ…だから抱きつかない
いでつて！！！！」……僕のはな「だつてだつて！！！！嬉しいだもん
！！ルツシーは私と一緒に嬉しくない？」「嬉しくない……わけな
いじゃない……」「やった「ねえいい加減話聞いてくれないなら召
還破棄してかみ殺すよ……？」

神としての能力を発動するアラン

さっきも言いましたが普段は女子供には優しいですがムカついた
り自分の信念を貫く時には容赦しません

数分後……

「君達……僕に召還されたんだよね……？」

「「はい……」」

ルシファールとラファエルに正座をさせて説教？教育？をしているア
ラン

「なのに

なんで召還者の前でいきなりなれ合っんだい？

「先ずは僕に自分の名前と能力等を教えるのが先じゃないかい？
それに主である僕の言葉を遮るなんて……君達本当に使い魔なのか
い？」

「そ…それはラファエルが……」

「わ…私だけのせいにしてよ……！！！！！」

「な……何よ！！」

始まりは「うるさいよ？ 2人共黙ろうね？」

「は……はい！はい！はい！」

暴れ出しそうな2人を殺気をだして抑えた後……
数分後……

「反省したかい？」

2人に問うアラン

「はい……」

元氣のない2人

「はあ」

そんな2人を見てため息を吐くアラン

「反省したならもう良いよ……
 だけど次からは気をつけてね？」

少し笑いながら2人の頭を撫でながら言う
そんなアランを見て……

「主さまあ／＼／＼」

顔を赤らめながらアランを見る

（私達の主……

格好良すぎます／＼／

絶対惚れてしまいます／＼／）

因みにゼウスとアテムは……

（格好良いよ～～～

アラン／＼／／）

（や…やばいわね

ゼウスだけじゃなくて……私まで惚れるなんて／＼／／）

被害を受けてた

「じゃあ

君達は僕が呼んだら来てね

呼ばない時は僕の空間で好きにしている構わないよ」

「はい……」

頭から手を離して言うとは故か元気が無い2人

（（主様と離れ離れ……））

「？」

「じゃあ僕は行くよアテムにゼウス」

「っえ？」

「あ…うんまたね」

「う…うん」

「また来てねアラン／／／」

「来ても良いけど男の体だったら会いに来ないよ？」

「っえ？」

「な…なら辞めるよ」

「その方が良いよ君アテムと一緒に可愛いんだからね」

「「か…可愛い／／／」」

「「ツム」」

「神2人は顔を赤らめ天使2人は不機嫌になる」

「それじゃあね」

「……また会おうね可愛い天使ちゃん」

最後の最後に天使2人の耳元そう言って現世？現実に戻った
因みにその後数時間は神2人と天使2人は顔を赤らめていたとかい
なかつたとか……

死の神アラン（後書き）

「はい

今回まさかのゼウスが女だった

……書いてた時に「あれ？なんでゼウス男にしたのかな？…うわあ
くくミスった…いや？これは良く二次元である「実は女だった」
でいけるか？」っ的な事があり急遽女にしました！！

……ああ因みに天使召還の時に使用した呪文はある漫画二つの呪文
をアレンジした感じです

それでは次回もお会いしましょう！！！！」

「それにしても……アラン君どうしたんだろ？
つえ？まだ寝てるの？」

任務！！波の国編（前書き）

「はい！！！！！」

漸く波の国編まで来ました！！！！！」

「ねえ？

編って事は……」

「はい！！！！そうです！！！！」

今までと違って一話完結ではないです！！！！！！！！」

「……大丈夫なの？」

「……多分」

「……………」

「と……取りあえずスタート！！！！！！」

任務！！波の国編

最終試験？鈴取り？から二週間たった

因みにアテムに会ったのは一週間半前の事だよ

今僕達第七班と第零班は火影様の部屋にいる

何をしてるかって？

理由は目の前にあるよ

「ああ！！

私の可愛いトラちゃん！！死ぬほど心配したのよ！！！！」

この甲高い声をだしている人は今し方終わった任務の依頼者でこの火の国の大名の妻マダム・しじみ……依頼は迷子（逃げ出した）ペットを見つけて連れてくることで……今は迷子になったペットとの再会に熱い抱擁を交わしているけどね……

ニヤアアアア！！！！

右耳にピンクのリボンを着けた猫【トラ】は御主人様の抱擁に涙を流し悲鳴のような鳴き声を上げていた……ごめんね？忍の世界では冷徹な考えも必要なんだよ……

「ご苦労じゃったな

さて第七班と第零班の次の任務は……

ん……老中様の子どものお守に、畑仕事の手伝い、忍具の手入れと、それから……」

はあ……分かっていたけど……下忍の任務はつまらないね……まあもうそろそろ飽きてきたしね……駄目でも聞いてみるかな？

「ねえ……」

それ以外の任務って無いのかい？」

「そうだよ!!!」

もうそろそろ私も忍者らしい任務をしたいよ!!!!!!」

ナルトも僕の言葉に続いて言う

火影様は僕とナルトの言葉を聞いて困ったような顔をしている
周りを見てみるとイルカ先生は止めようとカカシ先生は来たか……
みたいな顔をサクラはめんどくさそうな顔をサスケとクウロは一理
あるみたいな顔をしていた

（もうそろそろ駄々をこねるとは思ってたけど………）

（……彼奴等にしたら良いことを言うな）

（なにめんどくさい事を言ってるのよ!!!!!!）

（私もそろそろ草ムキとか以外の任務を受けたい!!!!!!）

アランの推測は当たっていた

「ナルト、アランお前はまだ新米なんだ
ちゃんと下済みを積まないといけないの
サクラ、サスケお前たちも聞いてなさいよ
そもそも……」

確かにね……下忍の任務はそうなんだけど……それでも忍者なんだ
から……もうそろそろ気の入る任務をしたいよ

最近転生者とばかり闘ったり修行したりとそんなのばっかだったからね

「イルカ先生

僕ももう弱くないよもっともっと強くりたいんだよ

この気持ちに嘘はないし半端な気持ちで言ってる訳じゃでもないよ」

僕の言葉にため息を吐きながら「仕方ない奴だな」っと少し笑いながら言うイルカ先生

「うっむ」

「火影様

こいつの思いは真剣なモノです

生半可な気持ちで言ってる訳じゃないですよ

それにそろそろこいつらにも上の任務を受けさせようと思ってましたしね」

カカシ先生が火影様にそう言った

……カカシ先生も偶には良いことを言うね

「カカシ……お主がそう言うならば考えてみようかの……」

「ありがとうございます

火影様」

三代目は一杯ある紙を見る

「そっじゃのう……ならこれでも受けて貰うかの

お主達に受けて貰う依頼難易度はCランク……ある人物の護衛じゃ」

護衛…ね

Cランクでももの足りなさそうだけど子どものお守や畑仕事の手伝い、忍具の手入れとかよりはマシだね

「護衛？それって結構偉い人だったり!!」

……Cランク任務の護衛で偉い人の訳無いじゃないか……はあ

「そう慌てるでない今から紹介する………
入って来て貰えますかな？」

火影様の言葉を聞いて部屋に入って来たのは片手に酒瓶を持った老人だった

「なんだあ？超ガキばつかじゃね〜かよ
特にその銀髪お前それ本当に忍者かあ!？」

銀髪……僕の事かい？

……へえなかなか勇気のある老人だね……

「君……そんなに死にたいのかい？」

ゴゴゴゴ!!!!!!

「ねえ……アラン

間違っても依頼者を殺さないでよね？」

「分かっているよ？カカシ

僕がそんな幼稚な事をするわけ無いじゃない」

「ならその殺気を沈めてよね」

「……分かったよ」

「わしは橋作りの超名人タズナというもんじゃ

わしが国に帰って橋を完成させるまでの間命を賭けて超護衛しても
らうー!!」

うん…こんな事なら畑仕事の手伝いの方が良かったかもね……

「直ぐに出発するそうだから荷造りが終わり次第任務開始だよ」

こうして僕たちは波の国へと向かう事になった

途中暇だけど……なにしようかな？

集合時間に30分も遅れて来た力カシにサクラが痴を言うのも今では見慣れた光景だね

そして里と外を隔てる『あ』『ん』と書かれた門を開けて僕は初めてとなる（本体での）里外への一步を踏み出した

移動中……

移動中暇なので久しぶりにチャクラコントロールの修行をしている
アランだよ

「ねえ

タズナさんタズナさんの国って【波の国】でしょ？」

何を思ったのかサクラが読めない空気を無理に読もうとしてタズナ

に話しかけた

「……それがどうした？」

不機嫌な声を出すタズナ

サクラ……僕はサクラをジト目で見るがサクラは気付かずにタズナに向けていた顔をカカシに向ける

タズナの機嫌を悪くしたのに気付いたのかカカシを話に巻き込んだ

「ねえカカシ先生………その国にも忍者っているの？」

「いや波の国に忍者はいないよ

だけど大抵の他の国には文化や風習こそ違うが隠れ里が存在し忍者がいる

その中でも【木の葉】【霧】【雲】【砂】【岩】は忍び大国とも呼ばれている

つで里の長が【影】の名を語れるのもその五力国だけでね

その火影、水影、雷影、風影、土影のいわゆる五影は全世界各国何万の忍者の頂点に君臨する忍者たちなんだよ」

その火影の四代目って絶対ナルトの父親だよね？

面影あるし昔の写真の髪の毛の色や眼の色なんかも一緒だったからね
そんな事を考えてふとほかの4人を見るナルトとサスケは「やつぱ
火影って凄いんだ……」みたいな感じで改めて火影の凄さを実感し
ていてクウロは興味が無いらしくサクラは「へえ火影様ってスゴイ
んだあゝ！！」と感嘆していた
顔と言葉が一致してないけど……

「君達火影様のこと疑っていたでしょ？」

……僕は疑ってないよ？

現に火影様は闘いたい人物の1人だからね

因みにバレたサクラは肩をビクツと震わせていた

「ま、安心しなさい！！

Ｃランクの任務で忍者対決なんてするわけないよ」

「じゃあ外国の忍者と接触する危険はないんだ
はあ良かった」

「もちろんだよ
アハハハ」

タズナの表情がカカシとサクラの談笑を聞いて変わったね……なに
があるね……この任務

周りを見てみたらサスケ、クウロ、ナルト、カカシも気付いたみたい
だけどナルトは微妙しか気付かず疑問を捨ててサスケとクウロは
気のせいかな？つと首を傾げていた
カカシは目を細めてタズナを見ていた

……これが下忍と上忍の違い……

ピチャピチャピチャピチャピチャピチャピチャ

……早速来たようだね

整備された土の道に水溜まりがあることは別に疑問に思わないだろ
うね……普段なら

だけど……ここ数日雨なんて降っていない……しかも今は任務……
それも護衛任務だよ……

そして

水溜まりからちよつと行つたところで水溜まりから大きな鉤爪を付けた変な二人組が現れた……

動き辛く無いのかな？

場に似合わない事を考えていると一番後ろにいたカカシがそいつらの最初の的に成っていた

「なに！？」

カカシが態と負けた……流石上忍だね

これで誰が標的かと僕達の実力……2つの目的が達成できる

まあこんな奴2人なんかじゃ僕の敵にも障害にも成らない……

「ただの的だよ……」

アランは忍具入れからクナイを2本持ち2人に向かって走りだし近づいた時クナイを2本相手の首過ぎにクナイを当て……

「雷遁・雷移しの術」

雷遁・雷移しとは相手に触れる又は武器で触れた場合に使える相手に静電気をおこして戦闘不能にできる

「……カカシ

もつ出て来て良いんじゃないの？」

「……何時から気づいていたの？」

「さあ？」

何時からだと思う?」

「はあ

まあ良いわ一応合格ね

…… 1人しか分からなかったけどね」

僕以外の人物はいきなり過ぎて反応出来なかったらしく暫く固まっていたよ

数分後……

「先生さつきと話が違っじゃない!!
忍者との接触はないって言ってたの私覚えてるんだから!!!!」

全く…… 五月蠅いね
任務にトラブルはつき物何時何時何が起こるか分からない…… 例えCランク任務でもね……

「それは私も聞きたいわ
タズナさん」

「!!!

な…何じゃ?」

カカシはタズナの目をジッと見て……

「ちょっとお話があります」

嘘はつけない…… いやつかせない
ついた瞬間…… どうなるか分かるからね

数分後……

はぁ…… カカシ長いね

何度も何度もチャクラをあっちこっちに集中させる修行も飽きてきたね

…… あ

右足が23%、左足に8%、右手に12%、左手に17%、胴体に28%、顔に12%と…… はぁ漸く来たようだね

「こいつらは霧隠れの中忍つてとこか……」

いかなる犠牲を払っても戦い続けることで知られる忍だよ」

サクラ、ナルト、サスケ、クウロは真剣にカカシの言葉を聞いている
僕？僕も一応聞いてるよ？…… つぁ右手に1%行き過ぎた……

「何故

俺達の動きを見切れた？」

……… ん？

なに言ってるの？クウロ

嘘だよな？

「数日雨も降っていない今日みたいな晴れの日に水溜まりなんて無いでしょ？普通」

4人はっあ！！って顔を…… ってナルトにサスケも分からなかったんだね…… はぁ大丈夫かな？この班……

「あんたそれ知ってて何でガキにやらせた？」

タズナの疑問も当たり前だね……僕達がやられる「護衛されている自分の命だからね

忍なら絶対やらない事だしね

……でもねそれをしてもらわなきゃいけない事があるんだよ

「私はその気になればこいつくらい瞬殺できます
ですが知る必要があったのですよ

この敵のターゲットが誰であるのかをね」

そう……あんな事までして知らなくちゃいけないのはこの事……
C
ランク任務に他里の忍が出てくる筈がないからね……普通は……ね

「我々はあなたが忍に狙われているなんて話は聞いていません
依頼内容はギャングや盗賊などただの武装集団からの護衛だった筈
です

忍者が襲ってくるとなるとBランク以上の任務です
依頼は橋を作るまでの支援・護衛という名目だった筈です
敵が忍者であるならば、迷わず高額なBランク任務に設定された筈
何か訳ありみたいですが依頼で嘘をつかれると困ります
これだと我々の任務外ってことになりますね」

「僕達忍者にとって一番大事なのは情報……一つでも情報と違う部
分があつたら……最悪命にも関わるからね……」

「……先生さんよ話したいことがある
依頼の内容についてじゃ」

僕の言葉を聞いた後タズナは力カシに話だした
……真実をね

「あんたの言う通りおそらくこの仕事はあんたらの任務外じゃろう
実はわしは超恐ろしい男に命を狙われている」

「超恐ろしい男……ですか

……誰です？」

「あんたらも名前くらいは聞いたことがあるじゃろう
海運会社の大富豪……ガトーという男だ……」

……一応僕も影分身で波の国や様々な国に行ったけど……聞いた事
ないね

「あのガトーカンパニーの……」

世界有数の大金持ちと言われる……」

……そんなに凄いの？

ん？ガトー？？ガトー……ガトー……ガトー……ああ！！思い出し
たよ

確か僕が四歳の時の影分身でガトーカンパニーって集団の半分を殺
した事があつたね……ああ弱すぎて忘れてたよ……

「そう……表向きは海運会社として活動しとるが裏ではギャング
や忍を使い麻薬や禁制品の密売……果ては企業や国の乗っ取りとい
った悪どい商売を生業としている男じゃ

一年ほど前じゃ……そんな奴が波の国に目をつけたのは財力と暴
力をタテに入り込んできた奴はあつという間に島の全ての海上交通・
運搬を牛耳ってしまったのじゃ……！！島国国家の要である交通を
独占し今や富の全てを独占するガトー………そんなガトーが唯一
恐れているのがかねてから建設中のあの橋の完成なのじゃ……！！」

へえ……そんなに凄い集団だったんだね
知らなかったよ……

「……………なるほど

つで橋を作ってるおじさんが邪魔になったってわけね
っ！ーじゃあその忍者たちはガトーの手の者ってこと！？」

……君頭良いつて嘘でしょ？話聞いて襲ってきたその2人がガトー
カンパニー？だっけ？からの刺客じゃなかったらなんなんだい？話
聞いてた？

「……………波の国は超貧しい国での……………大名ですら金を持ってない。
勿論わしらにもそんな金はない。高額なBランク以上の依頼をする
ような……………な」

そうなんだ……
色んな国があるんだね

「すみませんが
この任務はなか「ちよつと待ってよ」っ！ーアラン？」

「タズナ……………悪いけど呼び捨てで呼ばせて貰うよ？
あんたが嘘をついた事は悪だよ
僕達木の葉の里の忍者に対する侮辱だよ？それを分かっててしたの
かい？」

「……………ああ」

「……………そう

ならこの任務……………僕は受けるよ」

「っえ?!」

タズナがビククリして俯いていた顔を上げる

「アラン!?」

「タズナ……………あんたは悪……………でもね自分の守りたい者のために悪に成ったあんたを少なくとも僕は絶賛するよ……………それに僕任務を途中で放り出して逃げるような忍者には成りたくないんだよ……………逃げたらもう二度と……………僕の信念を貫けないからね」

「な……なによ!!」

信念のために死ぬわけあんた!!…馬鹿じゃないの!!…!!…私は絶対いかなからね!!…!!」

サクラが僕に向かって叫んだ

「別に良いよ

さっきも言っただけどこの任務を受けるのは木の葉でもこの第七班と第零班でもないよ……………僕青葉アランが個人的に受けるだけだよ

……………それに」

ニヤツと笑って……………

「僕は死ぬつもりはないよ?」

任務！！波の国編（後書き）

「やあ読者のみんな！！

毎回毎回NARUTO〜転生と始まりと終焉〜を見てくれてありがとう！！！！

それから白が出てくると思った読者残念！！！！

……今回もあとがきにアラン君が居ないから寂しいけど頑張ります！！！！！！

今回はアランの信念を書きました

他の小説じゃあ絶対に無いような感じを書きたいと思っていたらこんな形に……でも信念を貫くアランの姿に僕も痺れた！！！！

信念を貫く主人公って格好いいですね！！！！

……それではまた次回お会いしましょう！！！！！！」

任務!!波の国編2(前書き)

「今回こそは桃地さん達が出ると思いますよ!!!!!!」

「思っただけかい？」

「いや……出るよ!!!!絶対でるよ!!!!!!」

任務！！波の国編2

あれから波の国にタズナと向かってるんだけど……

「ねえ

なんで君達も来てるんだい？」

「君だけで行かせれないでしょ？」

「「アランが行くなら私も行くよ！！！」」

「別に良いでしょ！！！！！」

「フン……」

……クウロ「フン……」って答えに成ってないよ……？

「まあ別に構わないけど僕の邪魔だけはしないでよね」

数分後……

「ヒツヒツフーヒツヒツフー」

今僕はクウロと一緒に視界を遮るくらい濃い霧が発生している大きな川を小船に乗って渡っている最中だよ

周りを見てもみるけどホントに何にも見えないね

……まあ僕には関係無いんだけどね……

因みにヒツヒツフーとは舟漕ぐ時に発する言葉なんだって……

妊婦じゃないけどね……はあ
最近ため息が増えたような気がするよ……

取りあえず陸に着いたよ

クウロが隣で「ハアハア」言ってるのが凄く憂鬱だけどね……僕は
って？僕は大丈夫だよ体力的にも精神的にもね

……ん？僕は誰と話しているんだろ？

「護衛頼むぞ！！」

ガハハハハ！！！！」

はあ……帰って寝たいよ

歩いていると僕の感知……円に知らないチャクラが掛かった

円とはハンターハンターで出てくる技です

カカシに言った方が良いのかな？

いや……まだ敵とは限ってないね……

「それにしても遠いですね

まだ町は遠いんですかタズナさん？」

「もう少し行けば見えてくるじやろう

町に着いたらわしの家で休んでいけばいい！！

疲れが取れなかったら、一晩でも二晩でも休んで行っていざ！！

！！

ガハハハハ」

……僕は速攻で任務を終わらせて帰って寝たい気分だ……！！！！

!!

「皆伏せろ!!!!!!」

「「「「「!!!!!!」」」」」

ナルト、サスケ、クウロ、カカシは僕の言葉に従って伏せた
タズナは僕が頭を掴んで無理やり伏させた

ビュンビュン

そんな音を出しながら大きな塊が飛んできて木に刺さった
そして大きな刀の上に忍者?の男が立っていた

「へえ」

これはこれは霧隠れの上忍桃地再不斬君じゃない」

カカシは軽口を言いながら立ち上がる

軽口を言ってるけど……凄く警戒してるね

……それだけヤバイ相手なんだね

サクラ、ナルト、サスケ、クウロは相手の殺気に当てられて震えている

……僕も震える経験をしたなあ……3歳半位の時にね……確か相手
は蛇人間だったかな?

まあ今はもう馴れたけどね

「お前等下つてなさい

こいつはさっきの奴らとは桁が違う……こいつが相手だと私もこの
ままじゃちょっとキツイかな……?」

カカシが隠している方の額宛を掴む

「写輪眼のカカシか……

悪いがお前に用はない

そのじじいを渡してもらおうか」

「お前達タズナさんを囲って守ってなさい

それからアランお前がさつきからウズウズしているのは分かっているがこればかりはお前にはまだ早い

ここは私に任せておけ」

「……仕方ないね

今回だけは譲ってあげるよ」

「再不斬

まずは私と戦え」

「……渡す気はないようだな

だが噂の写輪眼を見れるなら幸運だと思っておくか……」

相手はニヤツと殺気を出しながら言うからサクラが失禁しそうだよ

……

そしてカカシが額宛の上にズラして左眼を開ける

……へえカカシって写輪眼使えるんだね……

そして後ろではクウロがサクラにサスケがナルトに写輪眼を説明している

……サスケにクウロ君達仲悪すぎでしょ

ほらサクラとナルトが場違いに苦笑いしてるじゃない……

「お話はこれくらいでいいか
俺はさっさとそのじじいを殺らなくちゃなんねえからよ」

相手は木に刺さった剣を抜いて木から飛び降りる

川の上に飛び降りると瞬時に印を結び【霧隠れの術】を使って視界
が見えなく成った

……まあ僕には関係ないけどね……

「あいつがまず最初に狙うのは私だろう
だが桃地再不斬

こいつは霧隠れの暗部で無音殺人術の達人として知られた男だよ
気がついたらあの世だったなんてことになりかねない……私も写輪
眼を全て上手く使いこなせるわけじゃない……！！
お前たちも気を抜くな……！！！！」

いや……必ずも力カシを狙って来るってわけが無いね……

『八か所だ……』

……馬鹿なの？

無音殺人術なら喋ったら駄目じゃない
なに？下忍だからって舐めてるのかい？

忍者なら【無情になれ、殺す時は躊躇するな、相手が誰でも油断は
するな】だよ……

『咽頭・脊柱・頸動脈に鎖骨下動脈・腎臓・心臓
……さて、どの急所がいい？くくくく』

殺人宣言かい？

律儀だね……何も言わずに来たら一瞬で殺せたかも知れないのにね

……

「クウロ

安心しろお前達は私が死んでも守ってやるから」

……死んだら守れないのにね

それよりクウロの名前を出すって……シヨタかい？カカシ

シリアスな空気が崩れた瞬間だった……

それからカカシはクウロに気はありませんから

「私の仲間は絶対に殺させやしないから」

はあ……相手も何律儀に待つんだろう？

案外忍者って馬鹿なのかい？

はあ……本当帰って寝たいよ……

『それは

どうかな………』

カカシが斜めに斬り裂かれる

……流石は上忍……

「終わりだ

カカシ……なにっ！！！！」

あの一瞬で水分身をするとはね……

斬られたカカシはバシャツという音を出して水になって辺りに飛び散る

それを見た桃地は動きを止めて自分の首に突き付けられたクナイを横目で見る

「水分身の術だと……まさか霧隠れの術の時には既にコピーしてたつてのか……!!」

「動くな……これで終わりだよ」

「さっすがカカシ先生……!!」

私先生ならやってくれるって信じてた……!!」

あからさまな嘘だね……

それからカカシ……警戒無さ過ぎそんだと……

「ククク

終わりだと?

分かってねえなカカシ猿真似如きじゃあこの俺様は倒せない

絶対にな……!!

しかしやるじゃねえか

分身の方にいかにもらしい台詞を喋らせることで俺の注意を完全にそっちに引きつけ本体はその藪の中に隠れて俺の動きを窺っていたって寸法か……」

桃地がカカシの事を絶賛するが僕なら隠れてる方も分身にするね……

「けどな……俺もそう甘かねえんだよ……!!」

カカシと一緒に水に成って消えた本体はカカシの後ろに回って切り

かかるが……

ドゴンっ！……！！

「っな！……！！」

「君……僕の事忘れてないかい？」

僕が先に蹴り飛ばした

「カカシは休んでなよ
此処は僕がやらせて貰う」

カカシの前に出てそう言う

「な……なに馬鹿な事言ってるのあんた！……！！私達にあんな化け物
に勝て「僕を君程度と一緒にしないでよね」っ！……！！」

僕はサクラに向かって殺気を飛ばす
信念も何もない君なんかに言われたくないよ……

「さて……行くよ？」

僕は右手の親指を噛み左手に横に線を引き印を結んだ

「口寄せ……白月」

左手から煙が立ち煙が晴れると白い竿に入った刀が現れる

「抜刀術……白瞬！……！！」

一気に桃地に近づき瞬速の速さで刀身を抜く

キンっ！！！！！！

「っ！！！！！！」

「へえ……」

白瞬を防ぐんだね……なら一刀流……速さの型……白速……！！！！！！」

刀をまた瞬速の速さで振るっ

「ッゲ……！！！！！！」

刀を避けようとするが掠り傷が頬に出来る

「まだまだ

一刀流……攻撃の型……白龍！！！！！！」

避けた桃地の首に向かって突きを放つ

キン！！！！！！

「ガハッ！！！！！！」

剣で防いだ桃地だがあまりの衝撃で剣を飛ばされる

「終わりだ……」

「ハアハア

な…何モンだデメエ」

「お前の死神さ……一刀流……連続の型……はく」

ザクザク！！！！

アランが攻撃を仕掛けようとしたら桃地の首に細い何かが刺さる

「フフッ

本当に死んじゃった」

どうやら霧隠れの暗部らしく桃地を回収しに来たらしい

一応カカシが桃地の生死を確認して暗部が桃地を連れて行く……前に僕が桃地に触れた

異常……目印【ペイント】発動……発動完了……

僕が目印【ペイント】を桃地にかけていたら近づいてきた暗部が口を開いて……

「？

何です？」

僕に質問してきたよ

「ん？ああ

何でもないよ……気にしないで良いよ」

「そうですか

それでは僕はこれで……」

そう言っただけで桃地を担いでどこかに行った

僕達が桃地を担いで去っていくのを見ていると……

バタッ

後ろで突然カカシが倒れた

「だ……大丈夫ですか！……！」

サクラがカカシに駆け寄り大丈夫かを聞いた

「ああ……うん

大丈夫よ……ただ写輪眼の使いすぎで倒れただけだから」……これ
がうちは一族が使うのとうちは一族以外が使う違い……か
はあ……仕方ないね

僕はカカシに近づき持ち上げる

「キャア！……！」

「カカシは僕が連れて行くから速く行くよ」

「つちよ……ちよつと！……！」

「五月蠅いよ

歩けない人は黙っててね」

「うつ……あ……ああ／＼／／」

何故か顔を赤くするカカシ……何故？
それから睨んでくるサスケにナルト

……何かしたかい？僕

s i d o カカシ

同僚の皆も言ってたけど

アランってやっぱり格好いいわね

……って何を考えているんだ私は！！！！／／／／
でもやっぱり格好いいなあ／／／／

カカシをも虜にするアランであつた

s i d o ナルト

なんでアランってあんなにフラグたてるだつてばね……しかも鈍感だし

私の気持ちも分らないってばね

こつなつたら直接言つた方がいいのかな？

……（想像中）

む…むむ無理だつてばね！！！！

って何時の間にか口調を可笑しく成つてた！！！！！！

でも昔アランにこの話方をつい言つたら「？可愛いよ？」って言つてくれたから私的には気に入ってるてばね……

って何言ってるてばね私／／／／

s i d o サスケ

アラン……またなのね

しかも教……いえアカデミー時代から教師も虜にしてたわね……
でも任務を続行する時のアランや戦ってる時のアラン……格好良か

つたなあゝゝ…… / / / /

駄目だ思い出したら顔が赤くなってきた / / / /

s i d o アラン

？

何故かナルト、サスケ、カカシが何か険しく成ったり顔を赤くしたりしている……何かあったのかな？

当の本人は全く気づかないと言う……全く鈍感なアランだった

ん？何かムカつく声が聞こえたような？気のせいかな……？

恋愛以外は鋭いアラン

……なんで恋愛は鈍いんだろ？主人公だからかな？
はあ全く難儀な主人公だよ……

やっぱりムカつく声が聞こえるよね……？

誰だい話しているのは……でも気配は無いしやっぱり気のせいだね

任務！！波の国編2（後書き）

「ほらね

出たでしょ？」

「それより

最後の何だい？」

「つえ？

……ああ…あれは時間稼ぎならぬ文字稼ぎかな……ってアラン！！
！！」

「そんな事だと思ったよ……君に地獄を見せてあげるよ」

「ギャアアア！！久しぶりのこんな流れ……！！！！！！」

「こんな作者の小説だけどこれからよろしくね？」

任務！！波の国編3（前書き）

久々のNARUTO〜転生と始まりと終焉〜更新しました！！！！！！
グダグダ過ぎますので温かい目で見て下さい

任務！！波の国編3

あれから力カシを抱えてタズナの家にやってきた……

「もしかしたら……」

桃地は生きてるかもしれない……」

力カシが突然発した言葉にサクラ、サスケ、ナルト、クウロは「っえ……？」って顔をした

それから力カシがああ暗部が使っていたクナイの確か……千本だったかな？を説明した

そしてなんやかんやあつて修行する事に……

っえ……？なんやかんやつて何だつて……？

なんやかんやはなんやかんやだよ

30分探○でもそう言つてたよ？

うん……？30分○偵つて何だろうね……？

まあ……良いや……

ああ……修行内容は木登りだよ……手ではなく足でのね……

今力カシが木登り修行の意味とやり方を説明している

……ナルト……チャクラの事ぐらい覚えところよ……

「じゃあ

やってみようか」

サクラ、サスケ、ナルト、クウロ、僕は足にチャクラを込めて木に登り（走り？）始めた

一番始めに落ちたのはナルト次に落ちたのはサスケとクウロ

サクラはチャクラコントロール‘だけ’は良いのか木の上で座っている

僕……？片足でてっぺんまで登ったよ？

当たり前じゃないか

僕は………と前からチャクラコントロールの修行をしてるんだよ？

上手く無かったら泣いてるよ

（サスケ、ナルト、クウロは予想どうり……

サクラもチャクラコントロールは上手だから予想どうりね………ただ
どアランにはビックリしたわね………

出来るとは思ってたけど………予想以上ね）

「あれ？

名門のうちは一族………しかも今年ナンバー2のうちはの天才と言われてるうちはクウロ君は女の子に負けるのかな？」

「……くそっ」

（先生………！！！！

何よけい事言ってクウロ君を苛めるのよ………！！！！）

「それに………！！

クウロ君はナンバー2じゃなくてナンバー1よ………！！

そこにいるアランが勝てたのは偶々…………ってかクウロ君が手加減したからよ………！！

ピクッ………

「「何言ってるのよ（てばね）………！！

アランが一番に決まってるじゃない（てばね）………！！」」

はあ……

カカシの挑発に乗るのか…… まあ確かにあの弱者にそう言われるのは苛立つけどね……

アランは相手の力量によって呼び名が変わります
下からゴミ、クズ、ヘタラ、弱者、草食動物、馬鹿、阿呆、肉食動物、強者の順です

因みに上の呼び名を使うときは使う相手に苛立つ時に使います
それ以外は基本呼び捨てです

「ハイハイ

落ちて着く落ちて着く……」

…… カカシ…… 君が挑発するからだよ……

まあこいつ等も過激に反応したのも悪かったんだけどね……

「取りあえず

アランとサクラは自由にしといて良いわ

ナルト、クウロ、サスケは引き続き木登り修行をしてなさい」

カカシはそう言うてからタズナの家に戻っていった

僕は影分身を作って（一体）この場に残してナルト達から離れる

s i d oアラン（影分身）

本体が離れていくのを見て姿が見えなくなった所で視線をナルト達に向ける……

ナルトはチャクラ量が多くで上手く扱えないようだね…… サスケもチャクラ量が多いけどナルトより少ないしナルトよりチャクラコントロールが上手いから少しずつ上達してきた

クウロはつて……？

興味ないよ

そんな事を考えていたらクウロがサクラにコツを聞いていた
それを見たサスケとナルトは僕の方にやってきた

「ねえ

アランコツとかってないの？」

「ん？

……まああるかな？」

「「な…なら教えて！……！」」

ん……

まあ暇つぶしにはなるかな？

「分かったよ

教えてあげる」

「「や……やったああ……！」」

喜ぶのは出来てからにしなよ……

s i d o アラン（本体）

さて…と

漸くあいつらから離れられたな……

先ずは……異常発動……目印【ペイント】発動……よし上手くいったね……次に腑罪証明【アライブブロック】発動……！

異常説明

目印【ペイント】

発動方法は相手に触れて頭の中で目印【ペイント】発動と言う事
後から目印【ペイント】発動と言った場合触れた相手の位置が分かる
複数居た場合は思い浮かべた者の位置が分かる

ふう…

偶々創っていた目印【ペイント】が役にたつとはね……人生何があるか分からないものだね……

「……………」

君は……………」

うん？

ああ……………」やっぱり

「君はそこに倒れてる……………」

いや桃地とはぐるだったんだね……………」

「……………」何時気づいたのですか？」

「何時？」

そうだね……………」疑問を持ったのは初めっからだよ」

「……………」なぜ？」

自慢ではないけどなかなか上手く暗部のフリができたとおもったんですけど……………」

「確かに上手かったよ……………」

一つを除いたらね……………」

「一つ？」

「何ですか？」

「数だよ数」

「数？」

「桃地ザブザ……」

カカシの話を聞いた限りなら最低でも三人は居るはず……なのに来たのは暗部１人……流石に桃地相手に１人で行かすはずがないよ」

「……もしかしたら

人員が居なかったかも知れないし別々行動をしたかも知れませんか？」

「確かに……それは有るかも知れないな
だから一旦逃がした……印をつけてね……」

「泳がしたんですね？」

そう……俺の推理は所詮空論

確かな証拠がない

例え桃地を逃がさずに異議を唱えたとしても今のようにかわされるのみ

無理やりという選択もあったけどもし僕の推理が間違っていて本物の暗部なら戦争が起きる……

だから逃がした‘フリ’をした

逃がした後に目印【ペイント】で居場所をつかむために
ちゃんと霧の国に向かっていたなら本物

霧の国に向かっているなら偽物……

「凄いね君

そんな年で……でも1人で来たのが……ミスだったね!!!!」

相手は一気に俺に近づいて攻撃してきたが……

「木遁・木縛り」

先に印を結び木で相手を捕らえる

「まあ

そんなにいきりたつな

別に殺しに来た訳じゃないよ」

そうだ

僕は別に桃地を殺しにきたわけでもまして偽物を殺しに来たわけでもない

「じゃあ……

なにしに……??」

「君達

ガトー……だったけ?

に雇われてるんでしょう?」

「……ええ」

「だったら……

君達を僕が雇う」

「……っえ？」

「対価は命と自由……まあ自由と言っても木の葉の中つてのと僕の意志によるけど……不自由ない自由ぐらいはあるよ
あとは……生活に困らないお金と生活場所を与えるよ」

「……内容は？」

「内容は戦闘……
もつと言えば僕が戦って欲しい時に戦って貰っただけだよ」

「……分かりました
良いでしょう……だけどザブザさんはどうするつもりですか？」

「どうするつもりもなにも……雇っただけど？」

何を言ってるんだい？

「い……いえ」

ザブザさんは色んな意味で有名ですから……」

ああ

そういう事……

「大丈夫だよ

僕の忍術でみんなが犯罪者桃地ザブザとは気づかないようにするからね」

まあ……認識妨害何だけどね……なんなら異常を作れば良いし

大嘘つき【オールフィクション】で無かった事にすれば良いしね

「……なんで

こんなに良くしてくれるんですか？」

「まあ

戦力があるが30%」

まあ……木の葉は平和だからね……良い意味でも悪い意味でもね……

「残りの70%は？」

「？」

友達だからだよ？」

「っえ……??」

「うん？」

まさか忘れたのかい？

白」

「っえ？

あ…アラン……なの？」

そう

彼……いや彼女とは知り合い……まあ影分身でだけどね

昔霧の国に行ったときに友達になったんだよ

まあ……目印【ペイント】使うまで気づかなかったけどね

白にも目印【ペイント】を昔つけていた

「あ…アラン君！……！」

契約成立したと同時に木を解いた
そしたら白が急に抱きついてきた

「????？」

どうしたんだい??」

「アラン君……アラン君
会いたかったよ……」

白にあつた時に落としてます
落としたかはナルトの時と一緒にです
つく……羨ましい……！！！！

「なんだこれ……」

桃地さんは目を覚ましてそう言ってたとか言ってなかったとか……
……

任務！！波の国編3（後書き）

最近

五つの炎とこのNARUTO（転生と始まりと終焉）以外の小説を2作品書こうと思うのですが二つのうちの一つのキャラの容姿を悩んでいます

だからアンケートをしたいと思います！！！！
下の8つから好きなものを選んで下さい！！！！

？一護（無月習得時）

？百哉

？市丸銀

？浦原喜助

？ウルキオラ

？グリムジョー

？日番谷

？自分で考える！！！！

因みに百哉と日番谷は過去（仮面編）か現在（死神代行消失篇）かを選んでいただくとありがたいです

あれ？百哉はかわりあったっけ……？まあいつか

ああそれからうちの小説にアランを書きたいと言っ方は言って下さい
何時でもアランを貸し出します！！！！！！

任務！！波の国編4（前書き）

今回はタグに書いてある残酷な描写を実行したいと思います！！！！！！
それから今回はアラン君のピンチでもあります！！！！！！

任務！！波の国編 4

「つまり

てめえが俺達を雇ったって事が……？」

「うん

そんな所だね」

「てめえ

正気か？」

「なにがだい？」

「はあ……

だがら俺達を雇うと言うことは俺達を匿うと言う事だぞ？
そんな危険な橋を自分から渡るなんて……って事だよ」

「ああ……

そんな事」

「お前……

そんな事って……結構重大事じゃねえか」

確かに重大事だね……

一般的にはね

この一般的はNARUTO世界の一般的です

「だけど……

君達を雇った方が楽しそうじゃないか
危険？構わないよ

僕は僕のしたいようにするだけ……それだけだよ」

「俺達は……人殺しだぞ？それでもか？」

桃地は殺気をだしながらアランに言う

白は黙って成り行きを見守ってる

「はぁ……」

桃地お前は馬鹿なのかい？」

「なに？」

いきなり馬鹿と言われてイラッとする桃地
そんな桃地を無視して話を続けるアラン

「忍の世界で殺しなんて日常茶飯事じゃないか
今の所木の葉は殺しがない……温い里になったけど……それに……」

そこまで言って口を閉じるアラン

「それに……何ですか？
アラン君」

流石に気になった白がアランに聞く
アランはゆっくり口を開き

「僕の方が君達より沢山殺してるよ」

「っっ！！！！！」

殺気をだしながら言ったアラン
そんなアランの口元は……笑っていた
そんなアランに恐怖を抱いた桃地

「桃地……」

君の問は間違ってるよ

あの言い方……人も殺した事のない人間に言う言葉だよ
ああ……因みに初めて人を殺したのは……二歳の時だよ」

皆さん覚えてるだろうか？

アランの修行方を……何人もの影分身を“一緒に空間”で修行する
……と思ってみましたか……？

それは違いますよ……アランの修行方は影分身をだして変化の術で
木の葉の里から出てその後時空間忍術で様々な時代に行って修行を
していたんだよ

「「……………」」

突然のアランの言葉に声を忘れるくらい啞然している2人
アランはため息をつき「……仕方ないね」って言ったと思ったら……

「これぐらいで良いかな？

桃地“ちゃん”」

「っな……」

その言い方お前まさか……」

「ククッ

久しぶりだね」

急に桃地の言い方を変えた

それに啞然としていた桃地が目を開いた

アランはそんな桃地を無視して口寄せの術の応用技を使い家にある
仮面を持って桃地に見せた

「アラク……お前……アラク……なのか？」

「ああ

アラクだよ」

「!!!!!!

……そうか……久しぶりだな」

「ああ

久しぶりだね」

数時間後……

「でも

まさかアラン君とザブザさんが知り合いだったなんて……」

「ああ

僕も最初気づかなかつたよ

まさかあの時の“餓鬼”がここまで成長するなんてね」

「止めてくれねえか？」

その呼び方

しかも今ではお前の方が餓鬼だろうが」

「僕は実力の所を言ってるんだよ？」

それに年齢も（前世と影分身の年齢を足すと）君より上だよ」

「んなわけねえだろ……………」

桃地は呆れながらアラク……………いやアランに言う

「まあ

年齢の所は別にどうでも良いけど実力の方は本心で言ってるよ？

君は餓鬼……………いや“弱者”だよ」

「……………」

桃地はアランの言葉に反応してアランを睨みつけるがアランはどこ吹く風つと言う風に無視をする

白はどうしたらいいのか分からずそわそわしてる

「君は昔より弱いよ」

「どう言う意味だ……………？」

アラク……………いやアラン」

「どう言う意味も……………言葉のまんまだよ
昔教えたよね？どんな相手にも油断しない
例え子供でも……………ね」

「っ……………」

アランの言葉を聞いた瞬間ピタリッと止まった桃地

「言ったよね？」

覚えてないって言わせないよ？

今回僕たちが来たときに気配を消して殺せば良かった、カカシと喋る前に殺せば良かった、気配消した時何も言わずに殺せば良かった、カカシを狙わずにナズナを初めっから殺せば良かった

君は油断したんだよね？

相手は下忍……上忍はいるけど子供3人にじいさん1人だ…殺すのも簡単だって思ったんだよね？

しかも額宛から見て木の葉……あんな温い里のしかも下忍が3人もいる……でも君は【負けた】

その生温い木の葉の下忍の僕にね

……まあ君が本気で来ようと僕は勝てたけどね」

「……………」

桃地はアランの言葉を聞いても何も言わずにいた
白も唯単にアランを見ていた（見惚れていた）

「確かに……」

俺は油断していたのかもな……」

「まあ

分かればいいよ

何時までも同じ話題を言うほどネチツこくないしね僕は……そんな事より白と桃地をこれから木の葉に連れて行こうと思うんだけど構わないよね？」

アランは一応確認として桃地と白に訪ねた

「ああ
構わねえよ」

「僕も構いません」

「分かったよ

まあ安心しなよ……一瞬だから
アリバイブロック
腑罪証明発動」

アランは2人の体に触れて（白と桃地の肩）そう言った瞬間3人が
消えた

……

「とう……ん？」

「「どうしたんだ（ですか？）」「」

アリバイブロック
腑罪証明を使用して来た場所は……先程と同じ場所だった

アリバイブロック
（腑罪証明が発動してない……？）
アリバイブロック
いや……腑罪証明はちゃんと発動した……なら何が……？）

「分からねーっ顔してやがるな
“アラン”」

アランが考え事をしていると急に上空から声がかかる
アランは上空に目を向けると……真っ赤な目と真っ青な青い髪をし

た少年？がいた

「誰だい…？」

君……」

アランは少し威圧的に訪ねた

「ツクク

怖いなあ…やはり“噂”道理だぜ

阿濡美須王汰那斗簾神「アヌビスおうタナトスがみ」……いや転生者殺してほうが良いか？」

「君……転生者かい？」

威圧……いや凄まじい殺気を青髪の少年？に飛ばすアラン
相手も相応な殺気をアランに返す
そんな中アランの殺気に当てたれて動けない白と桃地

（な……！！！！

なんだ！！！！

俺が……この俺がビビってるだど！？

昔より強く成ったって言うのに……！！！！

クソッ！！！！）

（な……なんですか？

この殺気は……

今まで様々な敵……それでこそ強敵と言われる人と戦い（殺し合い）
をしましたが……それが子供の戯れ……いえ赤子の戯れみたいに感
じる……！！！！）

「へえ

なかなかやるね……

でも……勝つのは僕だよ？」

指に（人差し指）つけてる指輪に炎（死ぬ気の炎）を灯してボックスに注入したアラン
だけど……

「！？」

ボックスは開かなかった

「ククッ

なんで開かない？って顔をしているな

理由は簡単だよ

俺の2つのうちの能力……キャンセル却下の能力だ」

絶句しているアランに顔を歪めて笑いながら自身の能力を話し出す

「キャンセル却下……？」

「そうだ

相手の能力を封じる能力だ」

「そう……

でもね？僕は体術にも自身があるよ！！！！！！」

アランはそう言いながら瞬歩で一気に近づき殴りかかるが……

バシッ

「！！！！！！」

簡単に腕を捕まれる

「ックク

俺の2つ目の能力……ノイコール平等

相手の力量と同じに成れる能力だ

但し相手なら数人でも良い……つまり君ら三人＋俺が今の俺の力量
って訳だ……

ックク……どうする転生者殺し？」

「……………」

アランは何も言わずにもう一度瞬歩で近づき殴るが今度は逆にカウ
ンターで攻撃（殴り）られて吹き飛ばされる
吹き飛ばされたまま木にぶつかって煙がたつ

「へえ……確かに桃地、白、そして僕の力量が入ってるばいね」

煙が晴れたその場所には口から血を吐き……先程まで無かったボロ
ボロの黒い翼と右目が黒く左目が白く成ったアランがいた

「それが……本気モードか？」

「本気……？」

確かに……そうかもね！！！！！！」

先程より更に早く成ったアランは一気に近づきまた殴りかかるが……

「まあでも
意味ないけどね」

「ツグ……！！！」

「またもカウンターで殴られた
だけど今回はギリギリ耐えてもう一度殴りかかるアラン」

「無駄だぜ」

「グハッ！！！！」

「次は蹴りで蹴り飛ばされるアラン」

「ノイコール平等は相手が成長…… 又は封印された力を解き放した場合その分
追加されるんだぜ？」

「アラン（アラン君）！！！！！」

「ハアハアハアハアハアハア」

「血を出して息を切らしながら立ち上がるアラン
ボロボロな翼が片翼になり左目が青い目に戻っている」

「ん……？」

「なんだあ…… もう本気モードは終いか？…… まあ良いか……
もう飽きたし…… 終わりにするぜ？」

「今度は相手が一気にアランに近づき空中に蹴り飛ばす
空中に浮いたアランと同時に相手もジャンプして更に蹴りを入れて」

どんどん上に蹴りを入れ雲の上ぐらい来た所で今までより一番大きく飛んでアランより上に行って高く上げた足を一気に振り下ろした

「終わりだ！！！！転生者殺し！！！！！！
地獄空中蹴り！！！！！！」

急速に落ちてる中殆どない思考で状況を読んでるアラン

（負ける……？

僕が……？負けるのか……

そんなのを認めるのか？

認めるて僕の悪等せいきが間違っている……

そんなの認めるわけない！！！！！）

ドンッ

漸く地上に落ちたアラン（煙がたつてる）

それから数秒後相手も地に足を着ける

「っっ！！！！！！」

桃地と白は息を呑み

相手を何時もより高い殺気をだす

「ククッ

漸く倒れた……いや死んだな

ククッおいおいそんなに睨むなよお二人さん

それにしても……やはり転生者殺しは伊達では無いな……1人消えただけで此処まで力が下がるとは……」

おどけたように桃地と白に言ってから関心したようにアランに言った

「まあ……」

そいつは死んだが「誰が……死んだって？」っな……！！！！」

煙の中から声が聞こえそちらをみる相手

其処には珍しくボロボロに成っていてバチバチ音が成っているアランがいた

（ば……馬鹿な！！！！）

あれでも死なねえのか！！！！

いやそれより俺からあいつ分の力量が“消えてる”だと……！！！！
！！！！）

「吃驚してるかい？」

君も僕に能力を教えてくれたようだからね……
特別に教えてあげるよ」

煙が完全に晴れて完璧に見えるように成った

その場に立っている……黄色髪と目をしたアランがいた

「これは

忍術・纏いだよ」

「ま……い？」

「雷、水、風、火、土等の性質変化を自身の体内に溜めて爆発させる事によってそれぞれの性質を体に宿す……因みに僕があんな高いところ落とされてピンピンしてる理由は……纏い土を使ったからだよ
纏い土は防御力を上げてくれるんだよ

つで今使ってるのは纏い雷」

「纏いかなんか知らねーが何故俺の平等ノイコールが発動してねえんだ……！！いやそもそも何故却下キャンセルが発動してねえんだよ……！！！！！！」

アランの説明を途中で覆い被さるように疑問に思った事をアランに問いかける

「……はあ説明は最後まで聞きなよ……
まあ……その理由は簡単だよ……先ずは平等ノイコールが効かない訳は平等は相手の【力量】だけしか無理なんだよ……

纏いは確かに力などを上げるけど自身の【力量】出はないんだよ
ついでに言えば僕の分の力量が落ちてるわけは僕が自身の【力量】を殆ど封印したからだよ

それで次の却下【キャンセル】が効かない理由は……君が一番知ってるだろう？」

「っ……！！！！」

アランの言葉を聞き吃驚する相手

「却下【キャンセル】は相手の能力を発動させるんじゃないよ
相手の能力が空気に触れて発動する時にその出来事を【却下】させるんだよ

だから僕の腑罪証明アリバイブロックは消えた後に戻ってきて死ぬ気の炎の時は死ぬ
気を灯す事は出来たのに武器をだす事はできなかった

纏いは“体内”で発動する力……つまり空気に触れてない
だから君の却下【キャンセル】は効かないんだよ」

アランがすべてを言い終わった瞬間ゆっくり相手に近づく

「ねえ

雷の纏いの時の性質は何だと思う？

一つは速度だよ

だけど雷の纏いの性質には2つの能力があるんだよ
なら2つ目は……？」

其処まで言っていきなり消え……

「答えは……鋭さだよ」

相手の背中ですういった

相手の胸にはぽっくり穴が開きその場所にあるはずの心臓がない

「余りにも鋭いから……心臓なんかも殺さずに取ることが出来るだよ……」

「た…頼む

殺さないでくれ……わ…悪かったから……」

アランの右手にある自分の心臓を見てアランに頼みだした

「ん？

良いよ」

「ほ…本当か！！！！！」

（やはり人間だな……

ククッ心臓を奪い返した瞬間殺してやる）

任務！！波の国編4（後書き）

はじめてアランが負けかけましたね！！！！
いやぁ！！！！チートにし過ぎたけど上を考えれば案外いた感じで
す！！！！

さて今回の残酷な描写は勿論アランが心臓を潰した所等へんですね
まあ分かった方も居るかと思いますがハ○ターハ○ターの○ルアの
戦闘を参考に書きました！！！！

さてそろそろ波の国編に終わりが近づいてきました！！！！
最近更新が遅いですけど呆れずに見てやって下さい！！！！
それからアンケート結果で桃地は男性のままでって事で！！！！
アンケートに協力してくれた方ありがとうございます！！！！

任務！！波の国編5（前書き）

今回はアランの前世の話です

別に見なくても大丈夫な気がします……多分前世の話は今回だけだと思いますがね

任務！！波の国編5

sido白

アラン君と謎の人物が戦っていた……

……正直に言うとアラン君と謎の人物は強かった……5影レベル……

……いやもしかしたらそれを超えるレベルの戦い

殺気だけで大気が揺れる……僕は立つてるのがやっとだった

そして漸く長いようで長くない戦いが終わった

「す……凄い」

漸く殺気が無くなり喋られるように成った僕は……それ以外の言葉
が出なかった

まるで時がとまったかのようにただただ呆然とするだけ……でも時は
動き出す

バタツという音と共に……

sido桃地

時がとまったかのようにだった……今まで俺は彼奴^{アラン}を目標に頑張っ
た……殺して殺してまた殺して……その途中で首切り包丁を手に入
れた……そして俺は彼奴^{アラン}と同等……いやそれ以上に成れたと思っ
ていた……そうだ思っていたんだ……だけど現実違った……彼奴^{アラン}は
昔よりも遥かに強かった

シヨックはあった妬みもあった……だけど同時に嬉しかった……憧
れた奴は……今も昔も変わりなく強かった事が……

俺達は彼奴^{アラン}の戦いをみてまるで時がとまったかのようにいた……け
ど時は動き出した……彼奴^{アラン}が倒れたと同時に……

s i d o アラン

此処は……何処だ

アランは様々な色になる空間にいた

僕は……何をしていただ？

久しぶりに桃地と白に出会って……雇って……そして……転生者と……戦った

転生者は正直に言うところまでの敵で一番強かったし……久しぶりに死を覚悟された……でも僕は勝った……じゃあ此処は……何処だ？？僕は死んだわけではない……様々な色の空間が突然グニヤリと歪み新たな空間……いや道場になっていた

「■■■■！！」

そんなんじゃない駄目よ！！！！」

「は……はい」

道場には長い黒い髪をしている女の人と短い髪をした少年がいた
アランは少年を見て絶句した

ぼ……く？

そう短い髪をしている少年は……前世のアランだった

そして空間はまたグニヤリと歪んだ場所は先程と一緒にだがそこに長い髪の少女がいた

!!!!!!

紅夜【くよ】……

「紅夜!!!!!!」

あなたは天才だわ!!!!!!」

長い髪の女（アランと紅夜の母親）は紅夜に近づきそう言う
昔のアラン……夜半音はその場面を見て悔しそうに……それでも嬉
しそうに見ていた……

またまた空間が歪み新しい場面になる

そこには高校生ぐらいに成った夜半音と紅夜と男がいた
ただ夜半音は倒れていた

男と紅夜は暫く話して男が道場を出た瞬間夜半音は何事も無く立つ

「あれで紅夜は彼奴とつき合えるのか？」

「うん!!!!!!」

これで■■君とつき合える!!!!!!お母様が約束してくださったもの
!!!!!!」

少女は嬉しそうに夜半音にそう言った

夜半音はそれを聞いてどこか無理しながら少し笑って道場から出て
行った

道場には歪んだ笑みをした紅夜がいた

またまた空間がグニヤリと歪み次に出てきたのは夜半音と夜半音の
母親と紅夜がいた

母親は夜半音に刀を向けていた

「な……何故……ですか
母様……？」

「なぜ？」

それはあなたが一番分かっているでしょ
才能の無いあなたに最後のチャンスとして ■ ■ と戦わしたのに負けるなんて……だからあなたを私の手によって殺します」

「……紅夜の彼氏を利用したのですか？」

「？」

何を言っているんですか？

■ ■ が紅夜の彼氏に成れるわけありませんよ
紅夜も好きではありませんしね」

夜半音はそれを聞いてゆっくり紅夜をみた
紅夜は歪んだ笑みを浮かべて頷いた

「そう……ですか」

母様……あなたが私程度に手を汚す必要はありませんよ
私の命は私が……」

「……そうですか」

それを聞いた母親は刀をゆっくり鞘に直して夜半音に渡す
それをみた紅夜の顔が歪む

何故なら紅夜は知っていたのだ

夜半音の実力を……だから刀を渡した瞬間私を襲うと思って身構えた

その予感は当たり夜半音は刀を持った瞬間信じられないスピードで母親を気絶させて紅夜に近づいた……そして……斬った自分の腹を……それを絶句した顔で見た紅夜

「ゴホッ……ハアハア……分かってたよ

紅夜……君は嘘をつくとき必ず右手で左手をさする癖があるからな……」

笑いながら紅夜に言う夜半音

「な……なら……なぜ」

「ふふ……」

妹の頼みを……初めての頼みを断る兄がどこに居るか……少なくとも俺には無理だった」

「……馬鹿……ですね」

「分かってる……」

俺は……兄馬鹿だ……」

「……ごめんなさい」

紅夜は泣きながら夜半音に言った

「駄目だ

許さない」

「っ……!……!」

夜半音は笑顔からいきなり真顔で言った

それを聞いた紅夜は悲しそうな顔した

そんな彼女を見て再び笑いながら口を開く夜半音

「だから……お詫びとして生きる」

「……っえ？」

夜半音の言葉を聞いて絶句した紅夜

夜半音はゆっくり手をあげて頭を撫でた

「生きて生きて……好きな奴をみつけるなり

好きな事をみつけるなりしろ

世の中は辛い事が沢山ある

嬉しい事なんてほんの少ししかない……死んだ方がましだと思つ時
がある……でも……な

辛い事が後に成つて笑える……ああんな事もあつたなあ……つて
だから……そう言えるように生きる……

それが……兄馬鹿の妹に願う馬鹿な願い事だ」

「う……うん

約束……するよ

絶対……その馬鹿な夢……叶える」

「……ありがとう」

夜半音は笑いながら目を閉じた

それと同時に空間が歪み始めの様々な色がある空間にいた

「……そう

あれが僕が死んだ理由……ふふ
まさか僕が兄馬鹿だったなんてね……
紅夜……僕も馬鹿な夢を叶えるよ」

空間がピシッと割れた
割れ目から光がさす

「……ふう

目覚めの時かな？

さて……頑張って行こうかな」

そう……笑いながら言うアラン

任務！！波の国編5（後書き）

さあて……波の国編って書いてるのに全く波の国編が進んでない……
なんて感想はいりませんから
私自身が一番分かってますからね

まあそれはそうとして……優氣凛々さんの作品授天力エネルの戦士が世界を廻る・作るぜ！！最強の”絆”！！にアラン君が出演しました
！！！！！！

皆様も見てみては……？（まあ……ヴィータ好きは止めた方が良くも知れませんが……）

朧さんの作品遊戯王 S a t i s f a c t i o n a s k f o r
もかなり面白いです

まあ全部面白いんですがね

まああとはレイもヒロインに加われば………っと話がずれましたな

ではまた次回お会いしましょう！！！！

波の国編6（前書き）

「はい

久しぶりに前書きで話しました

今回もアラン君は居ないけど変わりにアテムさんが来たよ」

「久しぶりね
みんな」

「皆さん覚えていますか？

天照のアテムさんですよ

さて早速なんですがアテムさん

優氣凛々様の作品ユウタ君から伝言があります」

「ユウタ？

ああ……エリリイを落としたあの可愛い坊や

なんて言ってたの？」

「えっと

『いつもありがとう!!』

なんかあんちくしょうはニブチンだけど色々頑張れ!!!!』」つと

「……確かに彼はにぶちンだけど……べ…別に私は好きじゃないわ
よ？」

気になるだけよ／／／／」

「本当に？」

「本当よ／／／／」

「本当に本当？」

「本当に本当よ／＼／＼」

「ならアランの『好きだよ』と囁いてるテープはいらないか……」

「……………」

ほ……欲しい……………」

「あれ？」

好きじゃないんじゃないの？」

「つつ……うう……／＼／＼／／／／」

好きよ……………」

「っえ……？」

なんて……？」

「好きよ大好き／＼／／」

「そう初めから素直に成ってたら良いんだよ
はいテープ」

カチッ

『好きだよ』

「アラン……………／／／／」

っん……………」

「さて……と

アテムがテープを何度も再生して【18禁】なことをしたたので
前書きはこの辺で……では楽しんできて下さい」

波の国編 6

s i d o アラン（分身体）

あれからサスケとナルトにアドバイスをしていたらいつの間にか夜に成っていた……二人共木の天辺まで登れた……っえ？クウロは？知らないよ興味ないしね

まあ二人共ボロボロに成ってたから背負ってあげてどうにか帰ってきた

クウロは……まあ自力で帰ったらしいb y 作者

ん…？

今声がしたような……？

気のせいかな？？

え？今何してるか？ご飯食べてるよ

……ねえクウロ？

食べるのは良いけど……吐くのは辞めてくれない？

食べる気が無くなるから

ほらサクラも引いてるよ？

それに食べながら僕を睨むのも止めてよね

やらないからね？

つとほのぼの？としてるとあのじいさんの孫娘の……たしかフシミが立ち上がり……

「どうしてそこまで頑張るんだよ……！！！！」

どんなに努力しても結局ガトーに殺されるんだよ……？

なのに……なんでそんなに頑張れるんだよ……!!」

「五月蠅いよ(てばね)……」

君みたいな泣き虫は隅っこで泣いてなよ」

「っちょ……2人共言い過ぎ……」

ナルトとサスケは黙ったまま外に行った

クウロは……吐きすぎてダウン

サクラはオロオロ

……本当使えないね

フシミはベランダ?で落ち込んでいる

カカシはフシミに近づこうとしたけど……アランが右手でカカシを止めた

「ここは僕に任せてよ」

ツフと笑いながら言うアランに赤面して止まってしまうカカシ
そんな事も知らずにフシミに近づいて隣に座るアラン

「……分からないよ

なんで……無駄な努力なんか……」

「フシミには2人の努力が無駄に見えるかい?」

アランはフシミの疑問に質問で返した

フシミはアランの質問に対して無言……そんな状態にアランは一息

ため息を吐き……

「少し……話を聞いてくれる？」

「……………」

アランがそう言うとコクンと頷くフシミ

「今から話すのはある少女2人の話……
まずは1人目……金髪少女の話だよ
彼女は生まれた頃から……1人だった」

「……………」

アランの言葉に目を見開くフシミ

「周りからは何故か化け物と呼ばれ……嫌われていた
でも……彼女は諦めなかった……
皆に認めて貰おうと……彼女は今でも頑張ってる」

「……………」

「次は黒髪の少女の話……」

アランの話を黙って聞くフシミ……アランは淡々と話を続ける

「彼女は1人ではなかった……途中までは」

「？」

アランの話に首を傾げる

「殺されたんだよ」

それを聞いて青ざめる

「彼女は復讐を誓った……父を……母をころした奴を殺す……と
でもある少年が言った事によって……復讐を諦めた……その代わり
新たな夢を見つけそれを叶えるために今も努力をしている」

アランの話は終わったようで一息つき……

「僕は……そんな彼女達の……いや……努力をしてる人に……“無
駄”な努力なんて無いと思うよ……君には無かったかい？」

「……………」

「フフっ……………」

まあ……無いなら良いけどね……

でも……もしあったなら……もう一度努力したら？
一度の失敗で諦めないで……ね」

フシミの頭を一度撫でて家の中にはいった

sidoアラン（本体）

「……………っん？

ふぁ……………」

目を覚ました場所は小屋みたいな場所だった

「アラン君……!!」

「っわ!!!!」

な……なんだい？

……ん？白？

「良かった……良かった……」

「ごめんね……」

心配させて」

「うつん……」

良いんだよ……生きていてくれるだけで……」

数分後……

「ねえ

白？」

「なんですか？」

「何時まで抱きついてる気だい？」

「っえ？……あつ……ご……ごめんなさい!!!!／／／／」

アランに言われ自分が抱きついている事に気づいて一気に離れる白

「君も女の子なんだから抱きつくのは好きな人にしなよ？僕だから

良かったけど違ったら勘違いするよ?」

「アラン君なら勘違いしてもいいのに……」

「なにか言ったかい?」

「う……ううん」

「なにも言っていないよ!!!!!!」

「?」

「そう……なら良いけど」

アランは見事な鈍感っぷりを発揮していた

「……そう言う場所は相変わらずだな……」

「?」

「何がだい? 桃地」

「「はあ」」

桃地と白は同時にため息を吐いた

「訳の分からない2人だね……」

まあそんな事より速く移動しようか

僕もそろそろ戻りたい(影分身と変わりたい)しね」

「ああ

そうだな」

桃地と白はアランの肩に手を載せた

アリバイブロック
「腑罪証明発動」

こうしてアランと白と桃地は消えた

数分後……

させ……と

桃地と白を僕の家の近くに買った家に連れて行って影分身と変わった所何だけど……色々あったみたいだね……それにしても……吐きすぎてダウンって……本当に使えないねクウロは……
まあ……居たからって何が出来た？って話なんだけどね……
さてとまあ……今から何をしようかな？

『アラン様』

ん？この声はたしか……

「ルシファアか？」

『はい

そうです』

「？

何処にいるんだ？」

周りを見て言うアラン

『これは念話と言うもので天使や悪魔や神などが使う魔法？みたい

なものです』

「僕も出来るのかい？」

『はい』

心の中で思った事に神力……アラン様ならチャクラでしょうか？を集中させてみてください』

.....

『こんな感じか？』

『はい！！』

完璧です！！！！さすがアラン様！！！！！！』

『其処まで褒めなくても良いよ
それで……何かあったのかい？』

『っえ？』

あっ！！！！！！そうでした！！！！！！
今アラン様に会いたいわって方が居るんですが……』

『僕にかい？』

『はい』

『まあ……別に構わないけど……
どうやって其方に行ったら良いんだい？』

『寝てる時に前回行ったアラン様の空間を思い描いてくだされば

此方にこれます』

『それだけで良いのかい？』

『はい』

『なら今からそっちに行くよ』

『はい！！！』

楽しみに待ってます！！！！！！』

ルシファーとの念話が終わり自分の（借りてる）布団に入り目を瞑って自分の空間……灰色の空間を思い描いた瞬間眠気がきて一気に寝た……

波の国編6（後書き）

…… 中途半端だな

そして久しぶりに登場のルシファー

それと新しいキャラの予感…… アランに会いたいと言ってる人物は誰なのか……………

それから今日からキャラ人気を集めたいと思います

見事第一位に選ばれたキャラの話を載せたいと思うのでドシドシ応募下さい

アランが一位の場合は二位との話を書きます

1人3票までいけます

あとついでにアランが使うオリジナル忍術、異常、荷負担、スキルも募集します

あと最後にイナリ君のアンケートにお答え七夜士郎様パンチ様ありがとうございます

パンチ様が考えて下さった名前もありがたく使わせていただきますではまた次回お会いしましょう！！！！！！

アラン＆ユウタ まさかのコラボ！！！！（前書き）

「はい

今回は優氣凛々様の作品授天力エネルの戦士が世界を廻る・作るぜ！！最強の”絆”！！-から御神ユウタ君が来てくれました」

「よう

アラン久しぶりそして魁斗はじめましてだな
今回はこの作品の読者を頂にきたぞ」

「つえ……？

いまなんか幻聴が………」

「ユウタ無駄だよ

この作品そんなに人気無いから
そんなのするなら他の人気がある作品に言った方が良いよ」

「……冗談で言ったんだが……それにアランお前辛口だな………」

「本当の事だよ」

「もう……やだこの子………」

「大変だな魁斗も………」

「じゃあ

読者の君達楽しんできてよ」

アラン＆ユウタ　まさかのコラボ！！！！！！

ある草原にアランは立っていた

「もうそろそろかな？」

そう言った瞬間空間がパツクリ開いて1人の美少じ……ゴホン……
ではなく美少年が居た

「久しぶりだね

ユウタ」

アラン振り向きながら美少年の……ユウタに言った

因みにユウタってのは優氣凛々さんの作品の主人公だよ

「ああ

久しぶりだなアラン

それで？今回はどんなようでよんだんだ？」

「まあ何時もなら僕の暇つぶしに戦ってて言うんだけどね……今回は転生者潰しを手伝って貰おうと思ってね」

「……お前でも勝てない相手なのか？」

「そんな訳ないよ」

ユウタはアランが手伝いを頼んできたのに驚いたがもしかしたらアランでも勝てない相手なのか？っと思ひアランに聞いた

「僕一応最高神だよ？」

曲がりなりにもね……」

そんな僕が負けるのは余程の事が無いと無いよ」

「余程の事があつたら負けるんだ」

「当たり前だよ

僕も生き物だからね

因みに僕に勝ちたかつたらゼウスとアテムをつれてきたら本気の七割は出せるんじゃない？」

「………それほぼ最強じゃねえか」

アランの言葉に呆れながら言うユウタ

「まあ幻想殺しみたいな能力があればなかなか苦戦はするよ
まあ………身体能力も異常なんだけどね」

「………もう良いから俺をよんだ理由を教えてくれ」

「ん………？」

ああそんな話をしていたね」

「忘れてるんじゃないよ………!!!!」

アランの言葉にツツコムユウタ………あれ？こんなんグダグダで良いのかな？ユウタのキャラってこんなん良いのかな？つと不安がる
作者

「良いんだよ

君の力量ではこんなもんだよ」

「地の字に言うなよ！！！！
つて！！！！また話が逸れた！！！！！！」

「まあ

無駄な話は此处までにして……………」

「………… 自覚があつたんだな」

もう疲れたような顔をするユウタ

「ユウタをよんだのは………… まあユウタの修行に役立てて貰おうと思っただけだよ」

「………… っえ？」

「ユウタもこれから転生者と………… まあ今も屑と戦ってるけど………… それ以外の転生者とも戦うかも知れないわけでしょ？なら転生者との戦いに馴れて貰おうと思っただけ………… ちょうど異世界に10万1人ぐらいの転生者が居るらしいんだよ」

最後まで聞いたユウタの顔がピシヤリと止まった

「………… まあ
アラン」

「？」

なに??？」

「多すぎだろ！！！！」

「大杉？だれだい？」

「大杉じゃなねえよ！！多すぎの方だ！！！！じゃなくて……途中までは良い……いやマジで涙が出そうだったよ？でもさぁ……10万人って多すぎじゃないかなあ？」

「違うよユウタ

10万1人だよ」

ユウタは口調を優しい？方に変えてアランに言った
アランはアランでユウタの間違いを言った

「そこは良いだろ！！！！」

10万人って言うのと10万1人って言うのとどう違うんだよ！！！！！！」

「1が増えてるよ」

「良いんだよ！！！！」

この場合は良いんだよ！！！！！！」

なんかまた話が逸れそうなので……作者の特権のキングクリムゾン発動！！！！！！

「まあ

理由はさっき言った通り君に転生者との戦いに馴れて貰うためだよ
毎度毎度負けて貰っては困るし僕も暇じゃないから何時でも行ける訳じゃないからね」

「……何気に酷いこと言ってるねえか？
ってか俺負けてねえ」

「……負けてたよ」

ユウタの言葉に呆れた目をして言うアラン

「負けてないつと認めない限りは負けてねえんだよ！！！！！！
それに次は勝からいいんだよ！！！！！！」

「……いまの言葉（次はって所）負けたって認めてるよ……」

「い…良いから！！！！！！
速く行くぞ！！！！！！」

「はあ………全く
でも………速く行くと言う部分には賛成だよ
無駄に時間使ったからね………じゃあユウタ僕の肩を掴んで」

「おう！！！！」

アランはため息を吐きながらも速く転生者狩りに行くと言う案？
に賛成してユウタに肩を掴むように言った
ユウタはアランの言葉に頷いて肩を掴んだ

アリバイブロック
「腑罪証明発動………行き先は………リリカルなのは世界！！！！！！」
「っえ………？
いまなん」

ビシュン！！！！！！！！

「っ……………！！！！」

おい！！アラン人の……………」

ユウタは人の話を聞けつと文句を言おうとしてアランを見たがアランを見た瞬間啞然とした

……………何故か？それは……………」

「何故小さく成ってるんだアラン！！！！」

ユウタより少し低いぐらいまで縮んでるアラン

……………説明中

「つまりアランが使用したアリバイプロック腑罪証明で二人同時に異世界に跳んだ為アランが縮んだって事か？」

「まあ

簡単に言えばそうだね」

「でも……………アランってこうして見れば女が「なんか言ったかい？」
いえ……………なにも」

いつの間にか持ってたトンファーをユウタの首に当てて殺気をだしながらいったアラン

そんなアランに冷や汗を流しながら答えるユウタ

それを聞いてトンファーを首から外してまるで何も無かったかのよう
うにトンファーがどこかに言った

トンファアが出たり消えたりした理由は奇術師【マジシャン】と
暗器術師【ブラックマスター】の能力のおかげです
詳しくははたけカカシVS青葉アランを見て下さい

「つと……」

そうだった……さっき移動した時にリリカル“なのは”世界って言
ってたよな？

もしかして……」

「違うよ

君が居たりリリカル世界ではなく……全く違う第二のリリカルなのは
世界って言えばいいかな？
だから君がいる世界とは違うよ」

「……そうか」

「つと……漸く見つけたよ」

アランがユウタの疑問に答えていると突然何かを見つけたつと言
い出すアラン

「何を見つけたんだ？」

訳のわからないユウタはアランに聞いた
アランは呆れたような目をユウタに向けた

「僕達は転生者狩りに来たんだよ？
見つけたって言ったら転生者が集まってる場所に決まってるでしょ」

「？」

なぜ転生者が集まってるんだ？」

「ああ

まだ言ってなかったね今回は転生者達が集まった軍団……たしか……スクール……そんな名前だったね

目的は屑（咲哉）と似ていて可愛い女の子を奴隷にするだったよ」

「……なに？」

それを速く言えよ！！！！速く行かねえともう捕まってる子が「安心しなよスクールが活動したのは三時間前……つまりまだ本格的な活動はまだなんだよ」そ……そうかなら安心だな」

「まあ……何時活動するか分からないから速めに言った方が良いのは確かだからね
また移動するから肩を掴んでくれるかな？」

「ああ」

ユウタがアランの肩に触れた瞬間また2人は消えた

……

「あともうちよつとだ……あともうちよつとでなのはたちを……」

「……グヘヘヘ」「……」

ある場所にイケメンなのに近寄りたくない雰囲気を出してる男達がいた

その場に突然美少女……美少年の2人が現れた

すいませんマジすいません謝るから命だけは……

「……特別だよ（だぞ）」

さて……まあメタな事は置いて……突然現れた2人に吃驚していた男達だが1人が口を開いた

「ん？」

なんだ？君たち？俺達に犯されに来たのか？？」

「……マジかい？！こんな美少女なら大歓迎だ！！！！！！」

1人の男の言葉を聞いて周りの男達が盛り上がった

「よかったねユウタ
モテモテだよ」

「何言ってるんだよ
アランお前がだろ」

「ユウタは女顔なんだからユウタに決まってるよ」

「今のお前も女顔だろ……」

「……かみ殺す（灰にしてやる）！！！！！！」

いきなり口論を始めたと思ったらさつき出して（アランはユウタにユウタはアランに）戦おうとした瞬間また男が出てきて

「まあ

2人共落ち着け」

「……………」

2人を宥めようとするが2人共その男を見ていない
見ていないにも関わらず話を進める男

「2人共可愛いからちゃんと2人共犯してあげるから…………喧嘩はし
たら駄目だぞ」

「そうだぜ

俺達はお前等2人を可愛いがってやるから」

他の男達も色々言っていたらアランとユウタ下を俯き話をする

「ねえ…………ユウタ」

「なんだアラン」

「君をかみ殺すのは後にするよ」

「奇遇だな…………俺もお前を灰にするのは後にするぜ」

バツと顔を上げて…………

「先ずは君達（お前等）をかみ殺して（灰にして）あげるよ（して
やる）……………」

男達にさつきを出した

そしてアランは異常の奇術師と暗器術師を発動してトンファーを取

り出しユウタ……

「サンライト

set up!!!!!!」

「yes my master!!!
version, “K” set up!!!!!!」

ユウタの手に刀が握られた

「疾風迅雷!!!!!!」

ユウタは目にも止まらない速さで転生者達を狩る

「へえ……やるねユウタ」

「つくそ!!」

そっちの化け物じゃなくこっちの奴を先にや」

「君……遅いよ」

アランはいつの間にか変わってた黒い刀で転生者を狩る

「アラン!!!!」

お前に俺の新しい力を見せてやる!!!!!!」

「へえ……」

それは楽しみだね」

戦いながら話をする2人

そして突然止まったユウタ

「身体能力強化“王臨”^{のうりん}！……！！
^{れんおうがいこう}錬王凱哮！！！！！！」

ユウタの髪の毛が漆黒に染まった瞬間今までより更に速く更に強力な攻撃を شدした

「へえ……身体強化……これは僕も負けてられないね………」

「スキだらけだ！！！！！！」

「……うおおおお！！！！！！！！！！」

「僕も少し本気を出そうか……我が名は阿濡美須王汰那斗簾神……我が力の一部を見るがいい」

何時もの黒い翼は出てないが黒い目と白い目
そしてユウタと似ている黒い髪になった
違うとしたらユウタの髪は闇を連想させる
アランの髪は“死”の闇を連想させる色だ
そしてアランの周りを囲んでいた男達が倒れたと同時にアランも動いた

数分後……その場にはアランとユウタがいた
ユウタの髪がゆっくりと元の色に戻りアランの目と髪も元に戻った
戻ったと同時にユウタが大の字でその場に倒れた

「どうだい？」

初めての転生者狩り」

「疲れた……ってかお前はなぜ倒れない？また大嘘つき（オールフィクション）か？」

ユウタがアランが倒れない理由は大嘘つき（オールフィクション）のおかげかを聞いた

「違うよ

今回は使ってないよ」

「ならなぜ倒れないんだ？」

「馴れだよ」

「馴れ？」

「一応これ位の数を倒すのは結構してたからね
これぐらい戦ったぐらいじゃ疲れないよ」

「はあ……お前に何時になったら勝てるやら……お前から神の力を授かったら少しは近づくか？」

ユウタがアランの強さに吃驚しながらもアランから神としての力を貰ったらどうなるかを聞いた

「やめた方が良いよ」

「？」

「なんで？」

「僕はなんの神が知ってるかい？」

「死の神だったよな？」

「その通りだよ

神つてのは1人ではなく沢山いる
癒やしの神って言うてもエリリイ以外にもいる……まあエリリイが
癒やしの神の中では上位だけだね」

「へえ」

アランの話に真剣に聞くユウタ

「でもね

死の神は数が少なく殆どが下級神レベルなんだよ」

「なぜだ？」

「死の神が上に行くためには…様々な死を経験し体現しそして理解
しないとイケない」

「!!!!!!」

…じゃあアランは」

「僕は裏技を使っただよ」

「裏技？」

「未来、過去、現在の神界、地獄、魔界、天空、下界の全てのしを
体現できる生き地獄と呼ばれる扉の中に100000年間耐えた

……だから僕は死を経験し体現しそして理解した」

「……………」

アランの話に啞然とするユウタ

「だから

僕が君に力を渡すと君の体と心が“死”ぬ
だから無理なんだよ」

こうしてアランの話が終わった

「さて……

どうやらお別れのようなね」

アランはユウタの方を見ながら言った

ユウタも自身の体を見るとどんどん薄く成ってるのがわかる

「な……なんだ

これは……………」

「安心しなよ

唯単に君の世界に帰るだけだよ」

「そう……か」

「なに寂しそうな顔をしてるんだい？」

「……………してねえよ」

「ふふ……………まあどっちでも良いんだけどね……………」

またね…… ■ ■ 「

「 ! ! ! ! ! ! ! !

いま……… 」

この瞬間ユウタは消えた………

s i d o ユウタ

全く…… あいつときたら………

「 ユウタ あ

おかえりなさいですう」

ユウタが声をした方をみるとエリリイがいた
ユウタは少し微笑んだ

「 ああ……… ただいま
エリリイ」

また会おうな……… 親友

アラン＆ユウタ まさかのコラボ！！！！（後書き）

「はぁ……もうお別れ……か」

「寂しくなるな……って言う場面なんだろうけど……僕にとっては
慰めてくれる人が居なくなる……って言った方が良さだろうな……
……」

「まぁ……なんだ
頑張れ……」

「ありがとうユウタ君……」

「ユウタ
はいこれ」

「？
なんだこれ？」

「軽く作ったケーキだよ」

「軽くじゃないよな！！
なんだよこの大きさ！！！！
軽くてこんなのつくれねえよ！！！！」

「ああ……アラン君家事とかも完璧だからそれぐらいのケーキなら
軽く作るよ……しかも軽くプロを越えてるし」

「……完璧人間って訳か」

「まあ

ユウタ君また来てよいつでも歓迎するし」

「暇になったらまたそっちに行くよ」

「ああ

ありがとうな魁斗

そして待ってるぞ親友！！！！！」

そう言っただけ消えたユウタ

「はあ……寂しくなるな」

「そうだね

だけど何時までも悲しんでは入れないよ」

「うん

分かってるよ……

ではまた次回お会いしましょう！！！！！」

「またね」

誤字がありましたので修正させて頂きました

波の国編7（前書き）

今回のお話では物語は進みません
っえ？何時に成ったら進むんだっただって？
僕が一番知りたいです……

波の国編 7

S i d o アラン

さて……どうやら僕の空間（これから死空【しくう】と書きます）
にきたようだね……

「ルシファー？

居るかい？？」

「アラン様……！！！」

アランが大声？をあげた瞬間パツクリと空間は開き其処から黒い翼
を持つ少女……ルシファーが現れた

「やあ

久しぶりだね

元気にしてたかい？」

「はい！！！！！」

アラン様も元気にしてましたか？」

「うん？僕かい？

僕は……まあまあかな？

まあそんな事より確か……僕に会いたい奴が居るんだよね？」

「あつ……そうでした」

アランの言葉に思い出したと言う顔をするルシファー

アランはため息をだして「忘れちゃ駄目だよ」って言った

「すみません……」

「ふう……まあ今度から気をつけてよね」

アランは少し微笑みながらルシファーを頭を撫でて言った

「は……はい／＼／＼」

（やっぱり……）

アラン様格好いいです！……神の中でもNo.1です！……！／＼／＼）

「ん……？」

顔赤いけど大丈夫かい？」

アランはルシファーの顔に自分の顔を近づけて言った（あと少し前屈みに成ったらキスしてしまうぐらい近い）

「／＼／＼」

だ……だいひょうびゆでえしゆ／＼／＼」

アランの顔が近くにあるためさらに顔を赤らめて「大丈夫です」っ
と言うルシファー

まあ……全く言えてないけど……

「ふふ……噛みすぎだよ」

「／＼／＼」（プシユー）

更にたたみかけるように微笑むアラン
それにノックアウトして頭から煙が出るルシファー

「ねえ？」

……駄目だね完璧に返事がない……はあしょうがないね……ルシファーが意識を取り戻すのを待つとするかな……でもなんで意識がとんだんだろ？」

何処までも鈍感な主人公アランだった

……

「っは！！！！！」

「漸く意識を戻したね」

数分後に漸く意識を取り戻したルシファーは周りを見てアランが居ることを確認した瞬間に何があったかを思い出して慌てて頭を下げて……

「ご……ごめんなさい！！！」

せっかくアラン様がきてくださったの……ふえ？」

涙が出そうになる程誤っていた途中に頭に何かが乗った感触がして頭をみるとアランの手があった

「良いよ

可愛い使い魔？の失敗にいちいち怒らないから……まああまりにも酷かったら怒るけどね」

アランそう微笑みながら言う

「あ…アランさまあ／＼／＼」

「それで「……っあ」はあ……また後で撫でてあげるからそんな悲しそうな顔をしないで「は…はい……／＼／＼」さて…話を戻すけど……僕に会いたいって言うてる人？はどこに居るんだい？」

アランが話を戻すためにルシファアの頭から手をどけた瞬間に寂しそうな声と共に悲しそうな顔をしたルシファアを見てため息を吐きながらまた後でと言いそれを聞き恥ずかしく小さな声で答えるルシファア

そして漸く話を戻したアラン

「えっと……魔界です」

「魔界？」

魔界とは妖怪や怪物などが居る場所だと思ってください

「はい！……！」

「それで？魔界にはどうやって行けば良いんだい？」

「アラン様は最高神なので頭の中で魔界に『行きたい』と思って転移を使えば行けます！……！」

魔界や天界などは基本その界に住むものの以外はいけませんが天使は魔界には行けず妖怪などは天界にはいけません

それと同じで神も魔界や天界にはいきません
但し例外に大天使、魔王は1日数時間行ける
神の場合は悪神、善神以上は行き来できて最高神は何時間、何日でもいれる

ちなみに魔王、大天使でも神界には滅多にはいけない（最高神1人の許可または善神、悪神以上の神の許可が5個いる）

「じゃあ

行こうか？ルシファ―」

「はい！！！！！」

数分後……………

（魔界）

ここが……………魔界

っん……………普通だね

魔界…………… と言ったら黒いとか赤いとかなんか下が馬で上が人とか
巨大な男がいるとか考えた人！！！！

甘い…………… 甘いよ…………… 砂糖に湯をいれた中に更に砂糖を入れるぐらい
甘いよ

此処での魔界至って普通なんだ！！！！！！

まあ…………… 武器とか売ってるが…………… それ以外は至って普通なんだよ

「…………… まあ別にどうでも良いんだけどね……………」

「？」

どうしました？アラン様」

「ん？」

「……いや何でもないよ

それで？会いたい人？はどこに居るんだい？」

「もうちよつとした所にあるお城にいます」

「そう

なら速く行こうか」

………

「ここ……かい？」

でっかいお城の前にアランはいま居る

「はい」

「じゃあ早速入ろうか」

「っあ……」

待って下さい！！！！！」

先々行くアランを追いかけるルシファー

そしてでっかい扉の前で止まるアラン

「ルシファー

如何にもここに入れてみたいな雰囲気なんだけど……もしかして？」

「はい

この扉の奥に今回会いたいと言った方がいます」

「なら入るしか無いね」

アランはでっかい扉を片手で開けて中に入る

中には片手で開けたアランを見て絶句してる少女がいた

「だ…誰が少女じゃ!!!!」

「?

いきなり何を言ってるんだい?君」

「む?

済まぬ何かいま聞こえた気がしたんじゃよ」

少女……ではなく少女はアランに向き直り謝った

「別に構わないよ

それより君が僕と会いたって言った人?なのかな?」

「うむ

人ではないが……会いたって言ったのは私じゃな」

「へえ……それでなんのようだい?」

「私は……お主のファンなのじゃ!!!!」

シリアスっぽい空気が一瞬で崩れた瞬間だった

「僕の……ファン？
僕アイドルとかじゃないよ？」

「魔界、天界じゃあの
神はアイドル？みたいなものなんじゃ
だいたい神は容姿はようからのう
そうなるのじゃ

最近出てきた……ユウタ？って奴とお主は大人気じゃよ
まあ私は……ではなく魔界ではお主がダントツ一位じゃがのう」

天界ではユウタとアランどちらもって奴が多いとか……

「……知りたくない事を知った気分だよ
それで？ファンなのは分かったけど……それだけじゃないよね？」

「うむ

当たり前じゃよ

最近ユウタって奴のファンNo.1の癒やしの大胆娘が騎士団つと
言うものを神界で作ったらしいのじゃ
じゃからのう……アランにも作って貰いたいんじゃない？」

何故だろうね……癒やしの大胆娘……心あたりが凄くあるよ
まあ……そんな事より……ユウタが軍団？を作ったとはね……知ら
なかったよ

「でも作って何か良いこともあるのかい？」

「アランの……守りたいと言う信念に憧れて入ってくるものがある
だからお主の信念をそやつ達に教え……そしてお主にはお主の信念
の為にそやつ達は動く

……どうじゃ？作ってくれぬか？」

……信念……ね

「良いよ
作ってあげる」

「！！！！」

本当かの！！！！！！」

「うん

僕はこんな時には嘘は言わないよ」

「それじゃあ

早速なんじゃが…団の名前を決めて欲しいのじゃ」

「？騎士団とかで良いじゃないの？」

「駄目じゃ

それはユウタが作った団と重なるからのう」

「……そんなものなんだね」

アランはため息を吐き違う団の名前を考える

「……ならプロテツジエレファミリー……ならどうだい？」

「……プロテツジエレファミリー……なぜその名前に？」

「考えてたら浮かんだんだよ」

「……そうか……ならプロテツジエレファミリーで決定じゃ……！！
早速知り合いの神や大天使や天照、ゼウスに話してくるのじゃ……！！」

「ねえ

ちよつと待つて」

「な……なんじゃ？」

私は今から速く言いに言いに言きたいのじゃが……」

「まだ君の名前聞いてなかったからね……」

僕は青葉アラン……君の名前は？」

「私の名前は……」

ベルゼ……この名前よりベルゼブブつと言った方が分かるかの？」

「へえ

君が魔王なんだよ……」

まあそんな事より……これからよろしくねベルゼ」

アランは微笑みながらベルゼに言った

「こ……こちらこそよろしくなのじゃ／／／／

そ……それじゃあ私は伝えに行くから帰っても良い／／／／」

「そう

なら帰らせて貰うよ」

そう言つてアランは魔王城？から出て行った

s i d o ベルゼ

アラン……やっぱり格好良かったのう／＼／
それにしても……プロテツジエ……イタリア語で守る……ふふさ
すが私がファンに成るぐらいの男じゃの……
さあてと……大体の奴はアランのファンじゃから支援はしてくれる
じゃろ

天照とゼウスも惚れてるようじゃしな……まあ例え最高神じゃとしても負けぬがのう

オマケ

「私最後らへん空気………」

「ルツシーはまだマシじゃない

私なんてアラン様にも会ってないだから………」

「そう言えば……ラファエルは何してたの？」

「天界で天使としての仕事をしなきゃ駄目って言ったじゃないの！！
忘れるなんて酷いよルツシー」

忘れられた天使２人だった

「「酷い言い方だね（だな）！！！！！」」

因みにルシファールとラファエルがアランの事を主ではなくアラン
と呼ぶように成った理由はアランと呼びたいが呼び捨ては駄目

……さんもちろんくんも勿論駄目……なら様で……みたいな感じ
でそうならしい
因みにアランはちゃんは無理だがそれ以外はどれでも良いらしい

波の国編7（後書き）

プロテツジエレファミリー……考えてた案だったんですがどこ出
そうか迷ってた時に優氣凛々様が似てるような感じを出していた
ので乗っかる感じでいきました
優氣凛々様………すいませんでした………！！！！！！

波の国編8（前書き）

「突然飛び出てだだだだゝゝゝん!!!!!!」

「五月蠅いよ……」

「最近アランが冷たい……」

「？」

「最近じゃなくて最初からだよ？」

「無自覚じゃなくて自覚して冷たくしてたの!!!!!!
つてか最初から!!!!!!」

「五月蠅い作者はほつといて良いからね
楽しんで来てよ」

「つちよ!!!!!!」

「まだ話は終わって「かみ殺すよ……?」「すいませんでした!!!!!!」
!!!!!!」

波の国編 8

さて……目が覚めたのは良いんだけど……なにあれ？フシミとフシミの母親……それと謎の男……
しかもフシミの母親は縛られてるし……何がやら分らないけど取りあえずあの男達をかみ殺せば良いのかな？

アランが飛び出そうとしたとき……

「か……母さんを離せ！……！」

フシミが男達にしがみついた

「餓鬼！……離しやがれ！……！」

「フシミ！……離しなさい！……！あたも殺されるわ！……！」

「イヤだ！……！」

母さんが殺されるのをただただ見てるだけなんて……イヤなんだよ……もう諦めるなんてしたくないんだよ！……！」

「……フシミ」

「餓鬼が……調子に乗るんじゃない！……！」

男がフシミに刀を振り降ろそうとした瞬間……刀と男が吹き飛ばされた

s i d o フシミ

今日お爺ちゃんとおの銀髪の人と金髪の人以外が橋に行った
その後金髪の人^{ナルト}が橋に向かった

その数分後にいきなり男の人達が入ってきて僕を人質に母さんを縄で縛った

そして1人の男が母さんに刀を向けた

その瞬間僕を掴んでいた男の力が緩んだ

僕は咄嗟に男の腕から逃れて母さんに刀を向けた男にしがみついた

「餓鬼！！！！離しやがれ！！！！」

「フシミ！！！！離しなさい！！！！あたも殺されるわ！！！！」

母さんにそう言われた時頭に「もう良いだろ僕は必死に母さんを助けようとしたんだ母さんもああいつてるんだし」っと浮かんだでも銀髪の人の話が頭に浮かんだ

僕は何時も努力をしたか？死ぬほどに……皆に誇れるような努力をしたか？何時も何時も言い訳をしてなかったか？

……イヤだ……イヤだ！！！！また言い訳をするのだけはイヤだ！！！！！！

「イヤだ！！！！」

母さんが殺されるのをただただ見てるだけなんて……イヤなんだよ……もう諦めるなんてしたくないんだよ！！！！！！

「……フシミ」

母さんが泣きそうな顔をするがそれでも僕は離さない

「餓鬼が……調子に乗るんじゃないやねえ！！！！！！」

男が僕にめがけて刀を振り降ろそうとする
咄嗟に僕は目を瞑った……

何時までも痛みが来ない……僕は勇気をだして目を開けると……

「ヒーローは遅れてやってくるんだってばね」

「君達……かみ殺される準備は良いかい？」

金髪のお姉ちゃんと銀髪のお兄ちゃんがいた

2人はまるで……まるで小さい頃に憧れていたヒーローに僕は見えた
まあ銀髪のお兄ちゃんはヒーローより王子様に見えたんだけどね／
／／

s i d o 無し

「ナルト……」

残りの5人も速くかたずけるよ」

「うん！……！」

ドンドンドン

ナルトが1人アランが2人を一気に倒した

「調子に……乗るなあ……！！！！！！！！」

「オラア！！！！！！！！」

残りの2人の男がアランとナルトがぶっ飛ばした

「「遅いよ（つてばね）」」

.....

男達を倒した2人はフシミの母親の縄を解いた

「じゃあ

行こうかナルト」

「うん」

「行っちゃうの……?」

フシミが泣きそうな顔をしてナルトとアランを見つめる

「今のフシミなら大丈夫だってばね!!」

「大丈夫だよ

僕達は必ず勝つからね

……だからフシミは僕達を信じて待っててね」

ナルトは笑いながらアランはフシミの頭を撫でてそう言った

「うん!!!!!!」

フシミは2人に笑顔でそう答えた

フシミの答えを聞いて2人は森?の中に入っていった

.....

s i d o アラン

さて.....

今橋に向かつてる所何だけど..... 白に似てるチャクラがあるね.....
でも白は今木の葉に居るわけで..... まあ着いたら分かるね

s i d o カカシ

私とクロウとサスケとサクラは朝タズナさんに着いて橋に向かった
昨日は修行で疲れたのかナルトは起きず珍しくアラン君も起きなかつた.....
けど私の班は2人抜けてもスリーマンセル..... だから今回は2人に休んで貰う事にした
アラン君が抜けるのは痛いんだけどね.....

そんな感じで漸く橋に着いた私達..... だけど突然霧が出てきた
!!!!!!!!!! やはり生きてたわね桃地.....

「残念だが桃地が相手ではねえよ」

「!？」

あなたは..... 刀狩りの菊池.....」

刀狩りの菊池..... 刀一本を持ち様々相手と戦い刀を持ったものと戦った時だけ武器を壊す..... 桃地と同等かそれ以上に危険な男だね.....

オリキャラです

N A R U T O にそんなキャラ居ません

「あん？」

俺の事知ってるんだなあ……

まあ俺もあんたの事知ってるぜえ……千の術を扱う女……写輪眼の
力カシって言った方が良いかあ？」

「……そんな事はどうでも良いわ……それよりなんで桃地じゃなく
てあなたが居るわけ？」

「まあ説明しなくても良いんだがなあ……

まあ特別におしえてやる……桃地達が依頼破棄してなあ……変わり
に俺に依頼してきたんだわ……分かったかあ？力カシ」

桃地が依頼破棄？

……でも今はそっちじゃなくて……

キン！！！！！

その時2人の少年がサスケとクロウにクナイで攻撃した……が2人
共反応してクナイで受け止めて蹴りを繰り出した

相手の2人は菊池の所まで吹き飛ばされたが瞬時に立て直した

「……へえ

瞬と進のスピードと渡り合うとは……なかなか優秀な奴だなあ」

「当たり前よ

この二人は木の葉のうちの生き残りで女子でNo.1のうちはサ
スケと男子No.2のうちはクウロ……こっちの春野サクラは女子、
男子でもトップクラスの頭脳を持つてる……そして」

その時菊池の前に銀髪の少年が瞬の前に金髪の少女がいた

「木の葉No.1のドタバタ忍者うずまきナルト
下忍にして実力は未知数のNo.1忍者……青葉アラン
この5人が私の自慢の部下……第7班よ！！！！」

波の国編8（後書き）

「今回クウロ以外のオリキャラ菊池、瞬、進が現れました！！！！！！
まあ桃地とか居なくなっただからでたキャラ……つまり後釜なんだけ
どね

瞬と信2人を出したのはアランとクロウ……オリ主とオリキャラが
いるからっと言う理由です

っと……どうやら時間のようですね……

では皆さんまた次回もお会いしましょう！！！！！！」

波の国編！！！！9（前書き）

「はあい！！」

2日？ぶりの魁斗だよぉ！！！！」

「久しぶりだね

それより魁斗？なぜ更新が遅れたんだい？」

「い……いや

つい寝てしまつてね……」

「……相変わらず駄作者だね」

「これだけで駄作者なの！！！！」

死神の剣製、五つの炎を楽しみに待っている読者様へ
最近全く更新してませんが途中で終わりにはしません
あの2作品はこの小説を書いてて行き詰まった時に書く用について事
で投稿したので亀更新だけです

波の国編!!!!9

s i d o アラン

漸くたどり着いたのは良いんだけど……誰だいあの三人？
ん？2人はサスケとクロウに攻撃して反撃されたね？
じゃああの三人は敵って事だね？

s i d o ナルト

アランと一緒に橋に向かつてる途中なんだけど……アラン速すぎない？（ナルトを気遣って全然本気で走ってない）

そして漸く橋に着くって所で桃地ではない三人組がカカシ先生達と対峙していた

っあ！！相手の2人がサスケとクロウに攻撃して逆に吹っ飛ばされたってばね！！！！

s i d o 菊池

瞬と進のスピードに着いてきたのにはびっくりしたがあ……まああいつらにはあれがあるから大丈夫だろお

それより……カカシをどうにかしねえとなあ……

まあ見た感じ桃地の野郎と戦ったせいか疲れてるようだし直ぐに倒せるだ……！！！！！！

菊池がカカシを観察していると突然ナルトが出てきて菊池を蹴り飛ばそうとしたが菊池はナルト気づき後ろに飛んで交わした……が着地する場所にアランが現れて周り蹴りを繰り返すとしたが瞬が間に

たちアランの蹴りを受け止めた……瞬間アランの体が水になり上空から菊池にかかと落としをしようとしたが次は進が蹴りで相殺しようとしたが白い煙がでてアランが消え次に菊池の背中に現れて三人が重なるように蹴りを入れた

「……がはっ！……！！」

菊池はアランにぶっ飛ばされ瞬と進は菊池を受ける感じで一緒に吹っ飛ばされた

「す……凄い……」

誰が言ったのか……そう呟いた

（水分身に影分身……初めの蹴りと2回目の蹴りは瞬という少年と進という少年が受けに……または相殺しに来るためのもの……そして三人が避けられないように成った瞬間に菊池を背後から蹴り2人も巻き添えにした……下忍とは思えない計算の高い攻撃……

流石……三代目火影が未来の火影候補と言うほどね……しかもカリスマ性もあるからね……特に女性に……）

カカシはアランの戦いを冷静に分析していた

s i d o 菊池

な……なんなんだあこいつぁ……！！！！

瞬と進の防御を簡単に出し抜いて俺に攻撃してきた……ただもんじやねえなあ……

s i d o 瞬

なんですか？この少年は……見た限り僕より年下……でも実力は僕以上……厄介ですね……
でも菊池さんの邪魔に成るなら……例え実力が上でもあなたを殺します

s i d o 進

な……なんなんだ
こいつ……俺の防御を……ック……悔しいが俺より実力が上のようだ……だが……それでも俺は……俺達は止まらない！！
菊池さんの為に……！！！！

s i d o アラン

白と似た感覚……これは……匂い？
違う……もしかして……

「アラン！！！！」
こいつの相手は私がする！！！！」

「サスケ
私も手伝うつてばね！！！！」

「なら……
あんたの相手は俺がする」

サスケとナルトが瞬に攻撃してクウロが進に攻撃した
サスケとナルト……二人掛かりならどうにかなるけど……クウロ1

人だと……もしも僕の予感が当たれば……十中八九死ぬね
ここは……

「ナルトとサスケはそのまま良いとして……カカシ先生はクウロ
の手助けサクラはタズナさんの護衛をして」

「で……でも」

カカシは菊池を見てもう一度アランを見た

「あの男は僕が相手にするよ
それよりカカシ先生は速く行って……でないとクウロが死ぬよ？」

「クウロ君が死ぬわけ無いわよ！！クウロ君はあんたなんかよ」五
月蠅いよ……」っ！！！！」

サクラがアランに講義しようとしたがアランの殺気に負けて言葉を
失った

「カカシ……速く行くんだよ」

「はぁ……分かったわ
菊池はあなたに任せるわ」

カカシは一回ため息を吐いた後アランにこの場を任せてクウロを追
った

「誰が行かすって言ったあ？」

そこに菊池が横は入りしてカカシに刀で攻撃しようとした……が

キーン！！！！

「誰が攻撃して良いって言ったかな？」

アランがクナイで刀を防いだ

「ツチ……」

やっぱり厄介だなあ……

餓鬼……名前は？」

「人に名前を尋ねる時は自分からって習わなかったかい？餓鬼」

「ククツ……ハハハハハ！！！！」

俺を餓鬼呼ばわりかあ……良い度胸してるじゃねえか三下あ！！！！
！！！！

「君ほどじゃないよ
弱者君」

挑発に挑発を重ねたやり取りが終わり菊池は刀を構えアランはクナイを仕舞いトンファー（ちよつと頑丈な普通のトンファー）をだして構えた

そして……両者が同時に動いた

s i d o ナルト

「そこっ！！！！！！」

「つく……！！！！！！」

サスケの攻撃を防御した瞬

「今だよ！！ナルト！！！！」

「わかってるってばね！！！！」

「しまっ……！！」

今頃気づいても遅いってばね

瞬の後ろにあった木に変化していたナルトが変化を解いたと同時に瞬を殴った

殴られた瞬はサスケの方に飛ばされた

サスケは瞬を周り蹴りを入れたが……瞬の体が水に成った

「……………！！！！」

これは……」

「水分身ですよ」

いつの間にかサスケの後ろにいた瞬

「水遁！！！！」

千針！！！！」

「！！！！！！」

水分身で出来た水が針のようになりサスケを襲ったが間一髪の所で避けるサスケ

だが…… まだまだ襲ってくる水の針

水の針はサスケだけではなくナルトも襲いだした
そしてナルトとサスケが背中合わせに立った

「捕らえました！！！！」

氷遁！！！！氷結界！！！！」

ナルトとサスケを囲むように氷が出来た

s i d o カカシ

アラン君に言われて来たけど……

「つく……！！！！」

敵の彼……速いわね

あのクウロでさえ追いつけなく成ってる

「どうしたどうした！！！！」

お前の實力はこんなもんかあ！！！！！！」

進がクウロにクナイを当てようとした時

キイン

「あら？」

あなた私を忘れてるわよ」

カカシが間に立ってクナイを止める

「カカシ……！！！！」

邪魔するな！！！！奴は俺の獲物だ！！！！」

「はぁ……残念だけど今のあなたじゃあ彼には勝てないわ」

クウロがカカシに殺気を出して退くように言うがカカシは呆れた様子でクウロに正論をいった

「……っ！！」

なんだと……」

「部下を見殺しなんてできないからね
今回は諦めて貰うわよ」

「……ツチ

分かった……」

クウロは渋々カカシの命令？に従った

「話は終わったか？」

「ええ

でもあなた優しいのね
わざわざ待っててくれるなんて」

「三下の話し合いぐらい待つのが俺達流だ（菊池と進だけです……）」
「

「そう……

でも……三下だと思ってた相手が実は自分以上の場合があるわよ」

カカシは殺気を出しながら進を睨んだ

「へえ……」

あんたは俺より強いって言うのか？」

「さあ？

どうかしら」

「……ふん！！

なら俺に見せてみなあんたの力をな！！！！！！」

キン！！！！

両者同時に動いてクナイで攻防を شدした

s i d o アラン

「俺の名前は木原菊池だあ……俺あ名乗ったぞあ……てめえも名乗りやがれ三下あ」

「青葉アランだよ
弱者君」

刀とトンファーで競り合ってたのを両者が後ろに飛んで一度離れた
……がまた相手に近づいて

キンキンキンキンキンキンキン！！！！！！

何度も何度も刀とトンファーをぶつける

「何時までその態度をとってられるかなあ……三下あ……!!!!」

「君こそ何時までその口を開いてられるんだい？
弱者君」

こうして初のCランク任務の最終決戦が始まった

波の国編！！！！！9（後書き）

なかなか……進まない今日この頃……何時に成ったら波の国編終わるのやら……

今回の後書きは此処までにしときます
ではまた次回お会いしましょう！！！！！！

波の国編!!!!10（前書き）

グダグダです

めっちゃグダグダですので気をつけて下さい

では！！始まり始まり！！！！！！

波の国編！！！！10

キンキンキンキンキン

いまだ競り合っているアランと菊池

「つく……！！！！」

水遁・水龍弾の術！！！！」

菊池が離れた瞬間に刀を一瞬で仕舞った後素早く印を結んで術名を叫んだ瞬間水の龍が現れて（橋の下にある水から）アランに襲いかかる

「ちょうど良いし…… “ あれ ” 試してみようか……」

アランが持つてるトンファーにオレンジ色の炎が纏った

「死ぬ気の零地点突破・初代エディション…… i n t o n ファー」
ファースト

アランは迫ってきてる水の龍にトンファーを当てた……瞬間水の龍が凍っていった

「な……なに！！！！」

あいつら以外にも氷遁使いが……！！！！」

「やっぱりね……通りで白と似た感じがしたわけだよ……まあどっちでも良かったんだけどね……じゃあラウンド2……行くつか？」

s i d o カカシ

つく……

やっぱり速いわね……

それに負け惜しみみたいに聞こえるけど写輪眼を使った為なのか……
…体に披露が残ってるわね

「へえ……」

あっちの餓鬼よりは楽しめそうだな」

「ふふ

その余裕……何時まで続くかしら？」

相手の挑発？を軽く受け流してるが内心何時までこの状態で戦える
かつと焦っていた

s i d o クウロ

何も出来ないのか……？

クウロは力カシと進の戦いを見ていた

また……何も出来ないのか……？

能裏に蘇る記憶

帰った時に両親を……兄弟を殺されていた忌々しい記憶

あいつを殺せないで……今殺されるのか？

……死にたくねえ……死にたくねえ……死にたくねえ……死に
たくねえ~~~~~!!!!!!

その瞬間今まで速かった力カシと進の動きが……遅くなった

s i d oナルト

やばいってばね……

ナルトとサスケは氷の中にいた

「火遁・豪華球の術！！！！！」

サスケが火遁で氷を溶かそうとしたが全く溶けなかった

「無駄ですよ

この氷を溶かそうと思うならもっと火力がいりますよ」

「ック……」

「でも……この氷の中ではあんたも攻撃できないってばね！！！！！」

「ふふふ……

出来ますよ……こうすれば……」

そう言った瞬間瞬が氷の中にシュッと入っていった

「「！！！！！！！」」

「僕の本気のスピードに……着いてくれますか？」

氷の中に居た瞬が今までよりも速く攻撃してきた

s i d o サスケ

は…速い…!!!!!!

追いつけない…!! いや!! 見ることも出来ない!!!!!!

「がはっ!!!!!!」

ナルト…!!!!!!

ツク… 本当にやばいわね… このまま防戦一方… いえ… 防御すら出来ないわね… ここで終わりなの?

姉さんを殴らず終わり? 仲間と遊んだりしないで終わり? うちは一族を復興しないまま終わり? アランに… アランに告白しないまま終わり? … 終われない!!!!!! 私はまだ… こんな所では終われない!!!!!!

つえ…?

相手の動きが… 遅く見える… これなら!!!!!!

s i d o ナルト

真っ暗な… 真っ暗な暗闇… …まるで海底みたいに沈んでいくようにナルトは下に… 下に行く

終わるってばね…

諦めてしまふの?

所詮ここまでってただだったんだってばね

仲間は… どうするんだい?

でも……無理なんだってばね

お主はそれで良いのかのう？

………嫌だ！！！！！

本当は死にたくないってばね！！！！！！仲間達と遊んだり馬鹿みたいに笑ったり……アランともまだまだ一緒にいたいってばね！！！！！！

初めは女の人の声次に男の人の声最後に女の人の声を聞いたナルトは本音を叫んだ

ふふ

それでこそ俺の（私の）娘だ（ってばね）

つえ……？

小娘……いやナルト儂もまたアランと話したいからのう……力かしてやる

その瞬間暗闇が光で覆われた一瞬……一瞬だけ九本の尻尾を持った私と赤い髪を持った女の人と金髪の男の人が見えた

s i d o ????

行っただかのう……

「しかし……びっくりしたよ

君が素直にナルトに力をかしたことは……しかも僕達に気づいて

も消さないなんてね」

「別に良いだろうそんな事……」

檻のまえに先ほどの金髪の男性と九本の尻尾を持った女性と赤髪の女性が話をしてる

「九尾？」

そんなにアラン君つてのは格好いいのかい？」

「っな……！！！！」

アランなど関係ないじゃろう！！！！！！」

「ならカツコ良くないの？」

「そ……そんな事など無い

あやつはお主なんかより数倍……いや数千倍格好いいのじゃ／／／／

「ふふふ（ははは）

まさかあなた（九尾）にこんな顔をさせるとはね」

赤髪の女性と金髪の男性が九尾を見て笑い出した

「む……むう……儂の事は良いのじゃ……それより“四代目”と“クシナ”よ……あれで良かったのかの？ 久しぶりの……いや初めての親子の対面じゃろう？」

「「良いんだよ（ってばね）」

もう……何時でも会えるからね（んだってばね）」

「……………そうか」

「それよりアラン君の話をもっと聞かせてよ」

「そうだってばね！……！」

九尾がこんなにはれるなんて……………気になるってばね！……！！！」

「ええい！！！！！」

五月蠅いのじゃ！！！！儂の事は良いのじゃ！！！！！」

s i d o 四代目

九尾を丸め込みました少年……………ナルトを元気にしてくれた少年……………ア

ラン君

君には感謝してもしきれないね

「でも九尾とナルトは簡単にはあげないよ！！！！！」

「ミナト

駄目よナルトの邪魔したら」

「なぜ儂まで入つとるのじゃ！！！！！」

s i d o クシナ

ナルトと再開と九尾の意外な顔を見て口調が変？に成ってしまったわね……………でもナルトも私と一緒にぽかったわね……………まあそれより九尾に私達の事がバレた時はドキッとしたけど……………ここまで丸くなつてたとはね

青葉アラン……………エミとライト君の息子……………ふふ2人には色々恩義が

あつたけど……まさか息子にまで恩ができるとはね……
まあ今はナルトと九尾の恋を邪魔しようとしたミナトを懲らしめる
つてばね

s i d o アラン

ん……？

誰かのチャクラが大きく……このチャクラは……九尾？……つて事はナルトだね……チャクラは安定してるから九尾がチャクラを貸したのかな？

まあそれならあっちは大丈夫だね

「余所見なんてしてる余裕があるのかぁ三下あ！！！！」

「君程度余所見していても勝てるよ」

相変わらずトンファーと刀でやり合ってる2人

時たまに菊池が水道の忍術を使いアランが死ぬ気の零地点突破・初^{ファ}
代エディション^{リスト}イントンファーで凍らせるっという様に成っていた

s i d o カカシ

このチャクラは……！！！！……ナルト！！！！！！

ツチ！！！！……急がないと駄目かしら？

カカシが進と戦ってる時にでっかいチャクラを感じて写輪眼を発動しようとした時……

「カカシ！！！！！！」

「退け！！！！！！」

「……………」

クロウの声がしてカカシは横に退けた瞬間……

「火遁・豪華球の術……………」

火の弾が進に襲いかかる

ただど進は凄いスピードでよけた……がクロウも進に負けず……いやそれ以上のスピードで進に迫り蹴った

「……………」

あの目は……“写輪眼”

クロウの目は赤くなり2つの勾玉が浮かんでいた

s i d o サスケ

これが……これが写輪眼……これならあいつの動きも捕らえられる……………」

サスケの目にもクロウと同じ2つの勾玉が浮かんでいた

「っな……………」

「捕まえた……………」

サスケは凄いスピードで動く瞬の腕を掴んで投げ飛ばした……が瞬は危なっかしいがきちんと着地した……瞬間赤いチャクラを纏ったナルトが凄いスピードで瞬に近づき殴った

そして氷の結界にぶつかって氷の結界が壊れた

s i d o アラン

「！！！！！」

瞬！！！！！！」

「余所見してる暇があるのかい？」

「ツチ…………！！！！！」

「終わりだよ…………
雷遁・雷皇牙」

トンファーに雷が覆った
そのまま2つトンファーで菊池に向かって…………攻撃した

s i d o クロウ

「これで…………終わりだあ！！！！！！！」

俺は敵に向かいクナイで攻撃しようとした…………が

「！！！！！」

わりいが…………まだ死ねねえみたいだ」

そう言つて奴は俺の腕を掴んでカカシの方に飛ばしやがった

s i d o ナルト

吹っ飛ばした相手はゆっくり立ち上がり

「僕の……負けですね
ほら……留めを刺しなさい」

「「え……？」」

「？」

何をビクビクしてるのですか？
まさか僕を生かす気ですか？」

「「……………」」

私……私達はお互いに黙った

「ふふ

優しいですね……ねえ？あなた達には大切な人は居ますか？」

「「……………」」コクッ

私とサスケは何も喋らず頷いた

「なら……大切なものを守る時には……相手を“殺す”というのも
必要です

それが……今です」

彼の言葉に……私とサスケはクナイを取り出して彼の命を……取り
にいった

「……………」

だけど彼は私達の手を取りクナイを止めた

「すみません

まだ死ぬ事は出来ないみたいです

すみません」

彼はそう言っつて凄いスピードでどこかに行った

私達は彼を追うことが……出来なかった

s i d o アラン

「雷皇牙！……！」

当たった……確かな感触……だけど菊池は死んでいない……死んだのは……進と瞬だった

「……！！……！」

菊池とアランは有り得ないという顔をした

「ゴホッ……菊池さん……あなたは……僕のすべてでした……」

「菊池さん……俺を……俺達を救っていただき……ありがとうござい
いました」

2人は笑顔を浮かべて……死んだ

「……クク

どうやらラウンド3のようだ……なあ！……！」

菊池は刀を振り2人ごとアランを斬ろうとしたがアランが凄いいスピ
ードで離れて2人を地に下ろした

「……もう無理だね」

アラン2人を綺麗に並べて菊池の元に戻った

「あんな奴らあ構うとはあ……やっぱり三下だなあお前え」

「無理をしなくても良いよ……」

アランは菊池の涙を見てそう言った

「無理なんて……してねえよ三下あ……!!!!」

「安心しなよ……あの2人と一緒に……天国に連れて行って上げる
よ……千鳥……」

アランは手に雷をためて……それを……菊池の心臓部分に刺した

「ゴホッ……三下あ

最後に……あいつらの顔をみせてくれねえかあ？」

「……ああ」

アランは菊池をせよって2人の中心に寝かした

「ああ……瞬に進……てめえらなに死んでんだよ……死ぬんだっ
たら俺より後に死ねってんだあ……馬鹿やろうが……」

てめえらと同じ場所に行けねえ俺の事も考えやがれ……」

「菊池……大丈夫だよ

君はこの子達と同じ場所に行くよ……僕が保証してあげる」

「そう……かよお

三下ぁ……テメエの言葉……信じてやる」

こうして菊池ゆっくり目を閉じた……

波の国編！！！！10（後書き）

次回でとうとう波の国編終了です

っえ……？あとなに残ってたかつて？

ほら……まだガトーいるじゃん？

ではまた次回お会いしましょう！！！！！！！！

波の国編!!!!11

S i d o アラン

終わった……ね

ゾロゾロゾロゾロ

アランが菊池から離れたその時大きな船がやってきて船の中から小太りなおっさんが出てきた

「うち……高い金で雇ってやったのに……こんな糞餓鬼共に負けるなんて……」

「が……ガトー……!!!!!!」

ガトー……？

ああ……黒幕の事すっかり忘れてたよ

「おい進？」

あんた確か俺の腕え……折ってくれたっけな？」

近くにあつた進の顔を思いっきり蹴った

「「「「「!!!!!!」」」」」

「瞬？てめえも確か俺の首にクナイを当てたよな？」

次に近くにあつた瞬の顔を蹴った

「最後に……菊池く」

高い金で雇ってやったのによ……やっぱりガラクタは何処までい
つても……ガラクタなんだよ!!!!!!!!!!!!!!」

最後に菊池の顔を思いつきり蹴った

「な……何をしてるんだ……!!!!!!」

ナルトが文句を言おうとした瞬間……今までに感じた事のない殺気
が出てそちらを見る……殺気を出してるのは……アランだった

s i d oナルト

あ……アラン……？

『あれは……完全にきれとるのう』

つえ……？

今……声が……？

『なんじゃ？』

まだ儂の正体が分からぬのか？』

だ……だれ？

『お主に封印されとる九尾じゃよ』

若干呆れたように言う九尾

『そんな事より……今から始まるぞ……青葉アランの……戦争が』

アラン……

s i d o サスケ

アラン……完璧に怒ってるね……

多分……今からだと思う……アランの“実力”の一部が見れるのは……
でも……アラン……怪我だけはしないでね……

s i d o カカシ

これが……これが下忍に成り立ての者の殺気か……？
私でさえ足が震えるって言うのに……情けないわね……担当上忍なのに……帰ったら修行ね……でも今は……アランが怪我をしないことを祈りましょう

s i d o クウロ

く……そ……！！！！

アランの奴まだ実力を隠していたのか……！！！！！！

クソクソクソクソ……！！！！

負けねえ……！！絶対負けねえ……！！……だから……こんな所で死ねなよ……アラン

s i d o サクラ

な……なんなのこの殺気？

これは……クウロが出してるの？

何処から刀を取り出して鞘から取り出した
取り出された刀は……何処までも輝いていて刃こぼれ1つ無い刀
だった

s i d o 無し

鞘から刀を取り出したアランはゆっくりと顔を上げた……何時もの
ように何処までも輝いてる髪……そして何時もとは違う……包み
こむような青い目ではなく……血のように赤い紅い朱い……真つ赤
な目に変わっていた

死眼……発動

この世には魔眼と言うものが存在する
写輪眼や白眼……ギアスなど様々ある

全てにある共通点は強力だつという事だ

一つでもあれば一国を落とせる程に……その中でも直死の魔眼……

あらゆるものの死を見る事が出来る……魔眼の中でも有名なもので

……魔眼の中で最凶の魔眼だ

なんせ……やろうと思えば神でさえ殺せるんだから

死眼とは直死の魔眼と似ていてものの死を見る事が出来る……が死

眼は寿命などはわからない……変わりに“死んでない”ものなら例

え死期が来ていても例え理解出来なくても……殺す事が出来る

「行くよ……」

アラン一気に相手に近づきものの死……つまり死の線を切っていた
腕、足、武器……様々な死の線を……相手もただやられるだけでは
なく……目前にいる化け物に……後ろから横から……困んでも攻
撃するが……全て避けられ腕又は足を切られる

そして……真っ直ぐ……ひたすら真っ直ぐ来たアランは直ぐにガトーの目前に来た

「わ…悪かった！…！」

俺が悪かった！…！！…！」

ガトーはアランに対して凄く汗をだしながら謝ったがアランは止まらない

「あ…あれだ！…！」

俺を殺さないでくれたら……何でもやる！…！！金か？部下か？ほら言って見ろ！…！！…！」

その時アランが止まった

「何でも……かい？」

「……「あ…アラン？？」」「……」

「あ…ああ

何でもやる」

「そう……」

アランが止まった事に安心したガトー

止まった事に吃驚して声を出すカカシ、クウロ、サクラ、ナルト、サスケの5人

アランは気にせガトーに近づき……

「なら……君の命を……貰うよ」

「っえ……？」

ザシユツ

ガトーの死の線を切った

ガトーが最後に見た景色には……死神が見えたらしい

s i d o アラン

あの後ナルト達と集まって村？まで帰って数日たって漸く橋が出来たその間にあった事はフシミがナルトとサスケに懷いてお姉ちゃんと呼んでいたよ……一応僕にも懷いてるんだけどお兄ちゃんとは呼ばれない

ほかにも偶にフシミ、ナルト、サスケがにらみ合ったりと様々な事があったが……桃地や菊池みたいな奴は出てこなかった

そして橋……ナルト大橋が出来た

初めはアラン大橋とどっちにするか迷ったらしいが僕が拒否つたためナルト大橋になった

ナルト、サスケ、フシミは必死に涙を堪えていたね……そして橋を渡りきった時にその文字は見えた……

なあ？知ってるか？

波の国に新しく橋が出来たみたいだぜ？

あん？名前？ああ……確か2つあったな……ナルト大橋と……たしか……

“アラン大橋”

木の葉の里に帰ってきた！！！（前書き）

波の国編が終わった……と言っことは……皆さん分かりますよね？

木の葉の里に帰ってきた!!!

s i d o アラン

波の国から漸く木の葉に帰ってきてご意見番の爺さん婆さんに任務の報告をした（実はB、Aランク並みだった事は伏せて）後各自家に帰って行った

僕も一度家に戻って白と数分会話をした後散歩に出かけた

今はその散歩の途中なんだけど……

「木の葉丸を離せつてばね!!!!!!」

「嬢ちゃん？」

俺は餓鬼が大っ嫌いななんじゃん……特に駄の成ってない餓鬼ってのはな」

ナルト、サクラ、サスケと爺さん（火影）の孫の木の葉丸と男の子と女の子と木の葉じゃない忍……額宛からして砂かな？……と言いかい？をしていた

どうやら木の葉丸があの子にぶつかってそれにキレた？男が木の葉丸の腕を掴んだそこにナルトが現れたって所かな？

と……そろそろ介入するかな……

s i d o 無し

ナルトが飛び出そうとした時……ナルトの横から銀色の線が横切って相手の男の前に止まった

止まった銀色は素早く相手の男の手首を（木の葉丸を掴んでる方の）

掴んで握った

「痛っ……！！！！！」

痛さに木の葉丸を掴んでいた力が抜けた瞬間重力で落ちる木の葉丸を抱えてナルトの方まできた

……まあ皆さん分かってると思いますが銀色の奴ってのはアランの事です

「あんまり他国で暴れないでくれない？」

「餓鬼っ……！！！！！」

もう容赦しないじゃん！！！！！」

「まさか……カラスを使うのかい！？」

男が後ろに背寄ってるものを下ろした

後ろ隣にいる女の人が吃驚したように男に言う

（あれは……落ちた時の音……人1人分ぐらいの大きさ……そして“カラス”という言葉……多分……いや十中八九傀儡人形だね）

アランは冷静に相手を観察して答えを出した

そして何時ものようにトンファーを出した

因みにナルト、サスケは赤面し木の葉丸の友達の子は見られていて男の子は憧れ的に見ていた

サクラは1人何かを考えていた

「へえ

俺とやるうってか……良いじゃん……やってや「止める……カンク

口ウ」！！！！……我愛羅」

いきなり木の上に居た小さな女の子が相手の男に殺気をだして睨みつけた

「が…我愛羅……これは俺がわる「止めろって言った筈だ」……分かったじゃん」(ツチ)

そのやりとりを見てたアランは何時もとは違って服の中にトンファ―を隠した

(((へえ……あのトンファ―ってあそこに入れてるんだ)))

若干三名が難解を解いたような顔をした

そしてアランは何事も無かったように散歩に戻ろうとすると木の上から降りてきていた女の子(我愛羅)がこちらに殺気を出してきた

「……何だい？」

「お前……名前は？」

「人に名前を聞く場合は自分から名のりなよ」

「……我愛羅」

「青葉アランだよ

……っで？金髪の君は？」

「っえ……？」

私……か？」

アランは我愛羅とカンクロウの名前は（二人が言ったため）分かっていたが金髪の女の子の名前はまだ聞いてなかったため興味方位で聞いた

「っふふ

君以外に誰が居るんだい？」

「くくくく／／／／」

ナルト、サスケ、木の葉丸の友達の子、金髪の女の子が顔を真っ赤にした

「て……テマリだ」

「そう」

アランはそれを聞いて漸く散歩に戻ろうとしたが……

「って……俺の事を忘れてるじゃん！！！！」

その言葉に振り返り

「はあ……君は？」

「カンクロウ！！」

次あった時は倒してやるじゃん！！！！」

アランは面倒くさそうに訪ねた……がカンクロウは気づかないのか名乗った後満足そうにしていた

「じゃあ

僕は行くよ」

アランは三度目の正直でサスケとナルトにそう言った後歩き出した

「あ…うん

待たねアラン」

s i d oアラン

漸く散歩に戻れたよ……はあ

「あ……あああアラン君！！！！」

突然後ろからアランの名前を呼ぶ声がして後ろを見ると黒い髪に白い目をした美少女が居た

「ヒナタ？

どうしたんだい？」

そう

皆さん大好きヒナタさんだ

s i d o無し

またかつて？

しょうがないじゃんこれの方が楽なんだから

さて……話は戻して……ヒナタがアランに声をかけたアラン振り返るどうかしたのかを聞くアラン

「い……いいやね
た…偶々アラン君の姿が見えて……その…あの……ごめんね？め
迷惑だったよね……」

どんととシュンつとしだしたヒナタ

「ふふふ

迷惑じゃないよ」

そんなヒナタを見て笑いをこらえながら言うアラン

「は…はう…／／／／」

笑ったアランを見て顔を真っ赤にするヒナタ

「うん？

ヒナタ顔赤いけど……風邪かい？」

もげろ……って思った方は何人いるかな（笑）
つと……話が脱線しそうになった……

「ふ…ふえ？／／／／

だ…だいひょうぶ…っう…噛んじった／／／／」

「……子猫」

「え……？」

何か言ったアラン君？」

「ん？」

ああ…何でもないよ」

一瞬噛んだ時のヒナタの頭に耳が見えてお持ち帰りしそうになった
アラン（危ない意味では純粹に猫、犬などの動物が大好きだからです
因みに作者は猫派です）

まあアランだから理性が飛んでお持ち帰りをする事はありません
撫ではするけど……（特にキバが多いらしい）

「それで

ヒナタは何しに此処まで来たんだい？」

話を進め出すアラン

「えつと……ね

今までキバちゃん達と修行しててね……今帰りなんだ」

ヒナタも落ち着いたのか流暢に話だす

まあ……若干顔が赤いけど……

「そうだったんだ……なら家まで送ろうか？」

「っえ……？」

い…良いよ！！…迷惑だし！！アラン君も用事があったんでしょ？」

「ん？」

散歩だったからね別に迷惑じゃないよ

それに丁度ヒナタの家の前通る予定だったからね
それとも僕と歩くのは嫌かい？」

「うう……／＼／＼／
な…ならお願いします／＼／」

「ふふ
お願いされました…かな？」

こうしてアランの散歩はヒナタを送っていくに一時変わった

「あ…あの…！！！」

「なに？」

「に…任務どうでした？
Ｃランク任務に行ったって……」

「ああ……うん
まあまあ楽しめたよ？」

「そう……ですか」

「ヒナタはどうなんだい？任務は上手く行ってる？」

「わ…私は……キバちゃんやシノちゃんに迷惑ばっかかけてます…
…」

「ツクク」

数分歩いた後急に（沈黙に耐えれず？）任務の話をしだすヒナタ
アラン（第七班（今は第零班は第七班扱いなのでアランも第七班扱

いです）がCランク任務を受けたのを知っているので大丈夫だったのかを聞いた

アランは久々の死合で楽しめたらしく楽しめたよと伝えた後ヒナタにも任務はどうつと聞いた

ヒナタは顔を沈めてあまり上手く行っていないと言った……って多くない？ねえ？地の字多くない？

つちよ……魁斗？この台本の地の字多いよ

つえ……？そんな事は良いからはやく本編に戻れ……？

そんな事では……つえ？地の字読む奴ぐらい代わりは幾らでも居る？

……沈んだヒナタを見て急に笑い

出したアラン

つえ……？権力に負けたなって？そうですが何か？

「？」

訳が分からないっという顔をしたヒナタ

「嫌ね

前キバとシノに会ったんだけどね

君の事褒めてたから……大丈夫だよ二人は君が迷惑ばっかしかけてるなんて思っていないよ

それよりも感謝をしてるぐらいだったよ」

「う……嘘です」

「僕は嘘は言わないよ」

「な……なら

キバちゃんとシノちゃんは私に気を使って……」

「二人はそんなに器用じゃないよ」

「ならなら……」

アランの言葉を否定しようとするがアランは受けつけないで逆に否定する言葉を否定した

「ヒナタ

そんなに自分を過小評価しなくても良いんじゃないかな？
君は凄いつて周りが認めてるんだから……まあ僕も認めてる中の一人なんだけどね」

アランはヒナタの頭を撫でながら優しい口調でそう言った

「あ……ありがとう……アラン君」

少し涙目で言うヒナタ

「ふふ

礼なんて入らないよ
じゃあ行こうか」

「う……うん……！！！」

再び歩き出した2人

また沈黙が続くが今のヒナタには心地よく感じたらしい

s i d o ヒナタ

「じゃあね

ヒナタ」

「う…うん

ま…またねアラン君」

そう言った後アラン君は少し笑った後どこかに行った

「ヒナタ？

今帰ったの？」

家から声がしてそちらを見たら……

「っあ……

ネジ姉さん来てたの？」

ネジ姉さんは私の従姉妹で私なんかよりも才能がある人……ある日から関係が良くなかったけど……少しづつ仲良くなって今では何でも相談する仲になった

初めは様づけで呼ばれてたけど頼んで（涙目&上目線）で呼び捨てに変わった

「ええ

叔父様に稽古をつけて貰ってたの
それよりお帰りなさいヒナタ」

ネジ姉さんは笑って私にそう言った

「ただいま」

私は笑顔でそう言いました
数分ネジ姉さんと話をしました

そしてふと思った事をネジ姉さんに言いました

「あ…あの

ネジ姉さん……お願いがあるのですが……」

「なに？」

私に出来ることならやるわよ？」

「わ…私に……稽古をつけてください!!!!!!」

私がそう言つとネジ姉さんは吃驚した顔をした後笑つて

「私の稽古は厳しいわよ？」

つと言つてくれた

「は…はい!!!!!!」

お願いします!!!!!!」

「でも…稽古の前に服を着替えないとね
泥だらけだし……」

「は…はい／／／／」

ネジ姉さんに言われて気づきました

私……キバちゃん達と修行して服が泥だらけだった事を……そして
……アラン君に泥だらけの服を着たまま話したこと……うう……
失敗しました

案外ドジなヒナタだった

s i d o アラン

ヒナタと別れた後ぐらいからかな……誰かにつけられてるね……この気配はあの人なんだけど……なんであの人が？

砂の忍が居た事と何か関係があるのかな？

まあ……でもつけられるのはあまり好きくないから……少し遊ぼうかな

誰も好きじゃないよ

つと魁斗なら言うのかな？

っん？メタな話は止める？

分かったよ

さて……と人が居ない所まできたし……そろそろやろうか……

ビュシユン

その場でいきなり消えたアラン

「き……キャアアア……！！！」

s i d o 無し

そして女の悲鳴？いや喜びも入った声が聞こえた……

女の悲鳴が聞こえた場所にはイルカ先生が居たらしい……このあと

イルカ先生は語った……「Mに……目覚めちゃった……あ……アラン

……せ……責任……とつてね／／／／」

はあ……何があっただんだあ……！！！！！！

因みにアランは幻覚を見せたらしい……どんな幻覚かは各自の想像にお任せしよう

s i d o アラン

あれから散歩が終わり数日した時にナルトとサスケから聞いた話によると中忍試験をやるらしい

カカシがそれを教えた時に僕は散歩をしていた日だったらしく家に居なかったから後から教える事にしたらしいよ

そして中忍試験開始時は……明日らしい……もうちょっと早く教えようよ……

木の葉の里に帰ってきた!!!（後書き）

カンクローは作者が流石に無理かなあつと言う事で男のままです
つまり長女、長男、次女つという兄弟です

それにしても……カンクローしゃべり方は難しい……はあ
最後にアンケートです

我愛羅の容赦は

？ゼロ魔のタバサ

？エヴァのレイ

？ニードレスのディスク

どれが良いですか？

現れた青春のゲジマユ……では無く……（前書き）

アンケートはまだまだ続いています！……！！
では本編スタート！！！！！！

現れた青春のゲジマユ……では無く……

中忍……下忍と違って部隊の隊長になって部下のフォローや指示を
だすものの事

下忍と違い責任重大なため下忍から中忍に成れるものを見極めるた
めに“中忍試験”と言うものがある

中忍試験では知、力、技を試される

つと……ちよつと今回の出だしなに？今までと違うじゃん……つえ
？こんなのも偶には良いんじゃないかって？っていうか話を脱線さ
せるな？クビにするぞ？

つとクビもかかってるため話を戻そうか……

今回の中忍試験は砂と新しく出てきた音との交流の為3つの里の下
忍、担当上忍が木の葉にやってきた

つとこれでいいですね？つえ？また話が脱線してる……？まあまあ……
……落ち着いて下さいよ……では本編の始まり始まり……

s i d o アラン

ん？

なんだろうね……今凄くグダグダなやりとりがあつた気がするよ……
つえ？そんな事より今どこにいるかって？……今は中忍試験のある
アカデミー
集合場所の301の教室に向かつてる途中だよ

つて……僕は誰に説明してるんだろうね？

「アラン？

ぼーっとして……どうかしたの？」

「ん？」

「考え事してただけだよサスケ」

「どうかしたの？」

「何でもないよ」

ナルト」

つと三人（クウロとサクラはサクラが一方的にクウロに話しかけてクウロはうざそうにしている）と話していたら301と書かれた教室の前で騒ぎ……ではなく喧嘩をしている一行がいた
はあ……ここ二階だよ？

全く……これで中忍に成るつもりかい？

サクラが「止めた方が良くない？」って言ってきたよ……自分が行くって選択は無いのね……はあ

「あんなのはほつといたら良いんだよ」

此処からが中忍試験なんだから一々知り合いじゃない奴の事までは面倒見切れないよ……まあ行くってなら止めないけどね」

「うつ……」

僕の言葉に何も言えなくなったのか今まで騒がしかったのが嘘のように黙った

「へえ……嬢ちゃん達その程度で中忍試験受ける気？
止めときなその程度じゃあ無理だ」

その声と共に小さな女の子が僕に飛んできた

突然だったので流石の僕も避けれず受け身で受け止めようとしたが
予想以上の重さでそのまま僕ごと吹き飛ばされた……

なにか一緒にいた女の子が「リー！！！！」って叫んでるね……

「はぁ……だから言っただろ？お前程度が中忍に成れる訳ねえんだよ
中忍って言ったらな部隊の隊長レベルだぜ？

任務失敗も部下の死亡も……全てが隊長の責任になる……
それが“中忍”と言うもなんだよ！！！！」

s i d o 無し

「それが“中忍”と言うもなんだよ！！！！」

その言葉と同時にサスケが動いた

一瞬のうちに相手に近かづいて蹴りにかかる（アランが吹っ飛ばされたのにキレて）が相手も気づいてサスケに殴りかかる

だが……その間に先ほどの女の子が入って……サスケの蹴りを左手の手首で相手の手を手のひらで受け止めた

「！！！！！！！！」

「ふう……」

「ねえ

リー約束が違うわよ？

目立って警戒されたく無いって言ったのはあなたよ？」

ん？あれは……

「ネジ？」

「え？」

「アラン??」

「っえ……！！！！」

「ネジの知り合い!？」

「え……？」

「う…うん」

「居るとは思ってたけど……まさか此処で出会うとはね……」

「あ…あああの……！！！！」

「あ…あなたのお名前は……！！！！！！」

「はあ……まえにも言ったんだけど……名前を聞く前は自分からだよ?」

「わ…わわ私はロック・リーって言います……！！！！」

「僕は青葉アランだよ」

「アラン…アランアランアラン……はい……！覚えました！
！！！！」

「ふふ」

「面白い子だね」

「ちょっと……2人共私の事忘れてないわよね？」

リーとネジの間からお団子頭の女の子が現れた……

「君は……」

「私の名前はテンテンよ
よろしくねアラン君」

「こちらこそ

じゃあ僕達は先に行くよ
またね？ネジ、リー、テンテン」

アラン三人に別れを言ってから先ほどの男の横を通り過ぎた時……

「サスケが先に攻撃して無かったら僕がするところだったよ……
命拾いしたね……名も知らない中忍さん」

「！！！！！！」

s i d o名も知らない中忍（いやマジで知らない）

な……なんて殺気だ……あれが四代目以上の天才忍者青葉アラン……
今回の中忍試験……あいつはあがってくるな……いや下忍なんかに
やり合える奴なんかいないだろ……
全く恐ろしい餓鬼を産んだな……あの2人は……

s i d oリー

青葉アラン……彼が下忍にして中忍以上以上の実力者……天才忍者

の青葉アランですか……僕が吹っ飛ばされた時咄嗟に構えた……もしも私が重りをつけてなければ……支えられていた……でもそれ以上に……凄く格好いいと言う噂も本当だったんですね／／／

s i d o テンテン

彼が今年のルーキーの青葉アラン……

去年の……まあ私達のルーキー君もなかなか格好良かったけど……完璧に彼の方が上ね……不覚にも私が惚れてしまったからね／／／／一目惚れってあるものね／／／

s i d o ネジ

また2人……敵が増えたわね……ツク……こうなるのが予想出来たから教えなかったのに……でも私の方がアランの事知ってるから有利かな？

でもここはヒナタと一緒に同盟を組んだ方が良さかしら……？

s i d o アラン

なんだい？

同盟って……あれ？また何を言ってるんだろう？

「待て！……！」

「ん……？」

後ろから突然声が聞こえそっちを見てみると……赤髪黒眼のイケメン君がいた……気配からして転生者ではないね（イケメンだから疑

った)……

「お前が青葉アランだな!!!!!!」

「誰だい君？」

「俺は……黒垣サカヤだ!!!!!!」

黒垣サカヤ……全く知らないね……

「っで……僕に何の用だい？」

まさか呼び止めただけ……って訳では無いよね？」

「お前に……決闘を申し込む!!!!!!」

s i d o 無し

まさかの此処で俺の仕事っすか!!!!!!はあ……

黒垣はアランに指を指してそう宣言した

「悪いけど……僕が受ける理由が無いよ」

「お前に無くても俺にはあるんだよ!!!!!!俺は去年お前と一緒にルーキーだった(テンテンが言ってた奴)……そしてモテモテだった(もげろ……)俺は好きな女の子と付き合った(リア純が……)でも彼女は男に絡まれた時にお前に助けられてお前に惚れたからって理由で俺は振られたんだあ!!!!!!(ザマア(笑))」
その恨み……今晴らさせてもらおう!!!!!!」

凄いスピードでアランに近づいた黒垣

……だが相手はアランだ

相手はアランだ

大事な事だから二度言ったぞ

分かるよな？どんなに天才でも所詮チートには勝てない……そして
アランはチートの中のチート……つまり

「五月蠅いよ」

「ガハッ！！！！……バタッ」

（（（分かってた）））

殴り一発で終わりだって事だ

哀れなり……天才黒垣（笑）

まあ4人は分かってたらしいけど……

現れた青春のゲジマユ……では無く……（後書き）

今回は前回のアンケートに加えて新たなアンケート……ってか募集です

リーの服装を考えてくれる方を募集したいと思います……！！！！
因みにリーの容姿は5の2のナツミです
ではお待ちしてます……！！！！

特別編 親（前書き）

連続投稿！！！！

だけど特別編だけどね！！！！！！

それに凄くグダグダだけどね！！！！！！

特別編 親

初めまして青葉アランの父親の青葉ライトと言います
今回は僕と僕の妻青葉エミの話と火影様の話です

~~~~~

sidolait

3ヶ月前に僕の……いや僕達の息子青葉アランが産まれた  
産まれた時は嬉しかったな〜

「アナタ

ご飯よ〜」

「うん今行くよ」

僕は妻のエミの声のした方——リビング——に向かった

「今日はパンと目玉焼きだね  
美味しそうだよ」

「フフッありがと」

「あれ？アランは？」

「眠そうだったから先に食べさせて今は眠ってるわよ」

「へえ」

そんな話をしていた時玄関を叩く音が聞こえた

ドンドンドンドン……！

「はあ……い……」

あら？ルイ君じゃないどうしたの？」

「はあはあ

きゅ……九尾……はあはあ狐が……はあはあ……里を……この里を襲ってるんです」

ガタッ

それを聞いた僕は勢いよく立ち上がり

「クシナとミナトは？！」

クシナのお腹に九尾が居ることを知っている僕はルイに大丈夫なのかを聞いた

「四代……はあはあ目火影様は今……はあはあどこに居るかはわかりません……！」

三代目……はあはあ火影様はあなた達に里の皆を避難させてくれて……！」

「……そうか

分かった僕は里の皆を避難させる

だけどエミはアランと一緒に避な「馬鹿言わないの」「エミ……」

「私も行くわよ」

「だ…だけど！！アランは！！！」

「大丈夫よ……私達は必ずアランのもとに帰ってくるわよ……ね？」

「……ああ」

「じゃあルイ君

アランをお願い」

「……分かりました」

その後エミと一緒にアランを抱きしめた

抱きしめた時に僕達の大切な息子に愛してると言った

これは誓い…愛してるアランのもとに帰ってくると言う誓いだ  
だから……だから待っていてくれアラン

「あなた

こっちは全員避難出来たわよ！！！」

「そうか！！」

こっちも避難でき……危ない！！！！！」

避難できたよって言うおとした僕の目にある男が目に入った

その男はエミに近づいてクナイを刺そうとした

僕はエミに駆け寄り後ろにいた男を蹴り飛ばす

「君は誰だい？」

「俺かい？俺は君達の……死神だ！！！！！」

彼はどこから出したのか分からないが鎌を持って僕に攻めてきた

「土遁・土龍壁【どとん・どりゅうせき】」

僕は高速で印を結び目前に土の壁を作る

相手の鎌が土の壁に当たったと同時に印を結び……

「土遁・土石流【どとん・どせきりゅう】……！」

土の壁が崩れ相手に崩れた土の塊が落ちていき相手が見えなく成った

「ふう

僕の勝ちだ」

「流石木の葉の鉄壁だな  
けどまだ終わらない」

相手は鎌で岩を砕いて出てくる

「エミ……！」

僕は素早くエミに声をかける

「分かってるわ……！」

「土遁・土龍上……！」

「水道・水流膜……！」

「合体忍術……！」

災遁・土水衝！！！」僕の術で地面にあった岩が空に浮かんでエミの術で空に水が浮かぶ

次にエミと全く同時に印を結び全く同時に印を完成させたすると空に浮かんでいた水が岩を包むように水の中に入れた

「これが……木の葉の青葉一族の究極忍術……合体忍術か！！！！」  
エミが出した水が回転して僕の岩を鋭くしたあと相手に向かっていく

「だが

俺はそれを超える！！！」

風遁・風斬り！！装着忍術！！対象は……鎌だ！！！」

相手は風遁・風斬りをだしてそれを自分が持っている鎌に纏う

因みに風遁・風斬りは鎌鼬の鼬が居ないバージョンだと考えてください

「「っな……！！！！！」」

そ…装着忍術……だって……？  
そんな術聞いたことが無い……

「うおりゃあ！！！！！！！」

ドカンッ！！！！！！

「ック……………」

鎌と水で覆った岩がぶつかった

「はあはあはあ……流石木の葉の切り札……って事か……まさか俺の鎌が……」

ボロボロ

「壊れちまうとはな……」

「はあはあはあ……良く言うよ……僕達の術を破ってそのまま僕達を鎌で斬った癖に」

「そうよ……まさか術を破られてそのまま攻撃するなんて思わなかったわ」

「馬鹿やろうが」

それを言うなら相打ち覚悟で両方からクナイで攻撃するお前等の方もだろ」

お互い傷だらけのまま喋る

「まあ……最後に言っとくが……俺の後ろに立ってる仮面野郎には気をつけな……一緒にいた俺が言うんだ……」

「なぜ……僕達にそんな事を……」

「ククツ……なあに」

死人の気まぐれさ……」

バタッ

相手が倒れたあと数秒してエミと僕も倒れた

「はは……お互い手酷くやられたね……」

「ふふ……そうね」

「速く帰ってアランに会いたいなあ」

「あら

まずはご飯をあげないといけませんね」

「ご飯をあげたあとは遊ぼうか……」

「駄目よ

赤ちゃんはご飯の後は眠るのが仕事なんだから」

「なら

大きくなったら……遊んであげようか……」

「……あなた……もう分かってるでしょ？」

「……………」

工ミの問いかけに僕は沈黙した

「私達の命は……」

「分かってるよ……」

ああ……忍に成ってから死ぬのを覚悟してたのに……なんで……  
なんでこんなに涙がでるのかな？」

「私も……覚悟してた筈なのに……」

「エミ！……ライト！……！」

三代目……猿飛先生の声がした

「大丈夫か！……！」

何時もの穏やかな感じではなく慌てている

「先生……お願いがあるんです」

「喋るでない！……！」

今医療忍者をよんで「先生……私達の命はもう持ちません……だから私達の……願いを聞いて下さい」……分かった……話してみなさい……」

「僕達には……アランっと言う子供がいます」

「でも私達には親戚というものは存在しません」

「だからアランには寂しい思いをさせてしまう……」

「だから……」

「アランを……育てて下さい……」

最後まで言った後猿飛先生は無言でいたが数秒して口を開いた

「分かった……」

ワシが責任を持って育てる」

「「ありがとうございます

猿飛先生……僕達（私達）の可愛い息子……アランの事をお願いします」

S i d o 猿飛

エミとライトはそう笑いながら言っただの世にいった……

ミナトといいお主達といい……教え子が先に行くなんて……馬鹿生徒じゃ……

これにて九尾事件が終わった

大量の犠牲を出して……

（現在（Cランク任務に行った後））

クシナ、ミナト、エミ、ライト……見ておるか？

お主達の娘と息子は……立派に育ったぞ

「「「「ありがとうございます……猿飛先生」」」」

「っ！……！

……ふう……ワシも年かのう……懐かしい幻聴が聞こえたわい」

三代目は笑いながら椅子に座った

## 特別編 親（後書き）

リーの服装&我愛等の容姿のアンケートはまだ募集中です  
どんどん送って下さい！！！！！！  
ではまた次回お会いしましょう！！！！！！

一次試験……の前に……（前書き）

アンケートの中間発表！！！！！！

？ゼロ魔のタバサ

？票

？エヴァのレイ

？票

？ニードレスのディスク

無票

次にリーの服装の募集はばんちさんの案でセキレイの結の衣装にしました！！！！！！

ではまたあとがきにてお会いしましょう！！！！！！

一次試験……の前に……

前回のあらすじ……

中忍試験の集合場所のアカデミー301の教室に向かつてる途中なにか騒ぎをたててる集団と出くわしたアラン達

初めは無視しようとしたがなんやかんやで巻き込まれなんやかんやで天才（笑）と戦いなんやかんやで今に至る

つえ……？最後らへん適当？しかもなにドゴンール風にしてるんだ？つて？？

……なんやかんやでこうなっただよツツコムなよ……ではなんやかんやで本編スタート……！！！！

s i d o アラン

前回に引き続き今回もグダグダだね……

つと……また僕は誰に言ってるんだろう？

まあ……良いや

今は黒垣だったけ？彼を倒して301に向かおうと進みだそうとしてる途中だよ

「ちょっと待って下さい……！！！」

……またかい？

僕達はなにか嫌われる事をしたのかな？

そう思いながら後ろを振り向いたら白い着物みたいな服に赤いスカートを履いた元気の良さそうな……つて……

「リー……また君かい？」

s i d o 無し

まさかの此処での出番だぜ！！！！！！

さて……と

ため息が出そうになるアラン

「い……いいいえ！！！！」

今回はアランに用事があつたわけではなく……さ……サスケさん！！  
！！あなたに勝負を申し込みます！！！！！！」

「っえ……？」

私？」

アランに慌てて弁解？をした後サスケに指を指して勝負を申し込んだ  
当の本人……つまりサスケはまさか自分に振られるとは思ってなかつた  
ようで吃驚していた

「な……なんで私に……」

「あなたの噂は知っています  
うちは一族の生き残りで天才くノ一……でも私はあなたより強い  
だから今はつきりさせます……努力で天才に勝てるって事を……」

ピクッ

（努力で天才を……

昔の僕も……いや今でも僕は天才を超えようとしているね……っふ  
ふロック・リー……なかなか面白い子だね）

（天才……確かにサスケは天才だってばね……今の私では勝てない

……でもそれでも何時かは……)

アランは昔に思い出しナルトは胸の中に火を灯した

「……良いよ  
受けてあげる」

「っちょ……！！！！  
サスケ速くいかな「直ぐに終わらせるから大丈夫」………っ」

サクラが速く行こうと言おうとしたが言葉を挟んで速く終わらせる  
と言ったサスケ  
そんなサスケを見て何も言えなくなったサクラ

「……では！！！！  
行きます！！！！」

サスケが準備出来たのと同時にそう言っただいた  
“下忍”にしては速い動きで近づいてきた

「木の葉……旋風！！！！」

いつの間にかサスケに周り蹴りを決めていたリー（サスケ、ナルト、  
サクラ、クウロにはそう見えた）

（な……なに……いまの！！！！  
幻覚……それとも何かの忍術？  
………ならまだ未完成だけど………“あれ”………やってみようかな？）

サスケが立ち上がって目を瞑った……

数秒してから目を開いたと同時に口を動かし……

「写輪眼！……！！！」

そう言った

目は赤くなり中心に黒い勾玉が2つ浮かんでいる

（……！！！！）

……此奴も写輪眼を開眼してたのかっ……！！！！）

（あれってば……あの時の……）

（噓……！！！！）

カカシ先生と一緒にの……しかも両目！！！！）

（写輪眼……へえサスケいつの間に開眼したんだろ？）

クウロが悔しそうにしナルトは波の国の時を思い出しサクラはただ  
感心？してアランは何時開眼したのかを疑問に思ってた

（相手の……リーの術が何かを見極める気だね……でも……あまり  
意味は成さないね）

アランは疑問を捨てて直ぐに分析してそう解釈？した

「それが……うちは一族に伝わる写輪眼ですか……でも無駄ですよ」

再び動き出したリー

（忍術……？違う……幻術でもない……なら……ま……まさか……！！！！  
！）

「私が使ってるのは忍術も幻術でも無い……ただの体術です」

「う…嘘」

あれが……ただの体術？」

絶句しているサスケにそう言うリー

そしてリーの言葉に吃驚したサクラ、ナルト、クウロ

そしてアランは……

（体術……確かに忍術や幻術に比べれば地味だし実践に使えるまでに時間がかかる……でも体術を極めた奴には……例え忍術、幻術が使えても負ける場合がある

特に忍者には体術が必要だよ……ただの体術……されど体術……って誰かも言ってたしね）

つとこんな事を考えていた

それから……言っただの誰だよ！！！！つと言わせて貰おうか

「サスケさん！！！！」

写輪眼を見せて貰ったお礼に私の本気を見せてあげます！！！！」

今までのスピードよりも更に速く移動してサスケの懐に入ってサスケを上を蹴り上げる

（あれは……

影舞葉……それに……体にある“リミッター”をはずしてる……禁術八門遁甲……流石にやばいね……一門だけとはいえ今のサスケじゃあかわせない……）

s i d o サスケ

つく……！！！！！！

全く見えなかった！！！！！！

「今から見せるのは私の必殺技です

これで……私は天才を超える！！！！！！」

「っ！！！！！！」

私の体にいつの間にかリーの手にあった包帯が巻かれていく

s i d o 無し

サスケを包帯で巻いた後両手に力を入れようとした時……どこからともなく風車みたいなクナイ（あれってなんて言うんだろうね？ B Y 作者）がリーの服に刺さりそのまま壁にぶつかった

リーが離れた事により包帯が緩みサスケは無事に着地した

「このクナイ……もしかして……」

ボンっ！！！！！！

いきなり煙が上がリそちらを冷や汗だしながら見るリー……さてさて次回どうなる！！！！！！煙の中には一体誰がいる！？

それでは……作者の都合上ここまで！！！！！！

一次試験……の前に……（後書き）

更なるアンケート……

それはガイを女性にするかしないかだ（女性にする場合出来ればモデルになるキャラも書いて下さるとありがたい）（期間は次の投稿まで……）

皆さんはどちらが良い？

つとリーを巨乳（結）にするか貧乳ナジミにするか……

なんなら顔は結だけど胸は……残念に……でも良いですよ（笑）

では我愛羅も引き続きアンケート中ですのでよろしくお願いします  
アンケート……長い

あと最後にまだでてないキャラでTSしたら？ってキャラ（出来ればモデルつきで……）とこのキャラはTSしないでってキャラも書いて下さるとありがたい

青春先生が来たっ！！！！（前書き）

我愛羅の容姿はゼロ魔のタバサに決まりました！！！！

それからガイはTSにしました！！！！理由はまあ……男が女をなく  
れませんか……

では本編スタートです！！！！

青春先生が来たっ！！！！

最近仕事が増えたナレーション……略してナレーさんだ……っえ？  
銀のネタだろって？

それは分かっても言わない約束だぞ？

さて……作者が最近イナマイレン2を再びやり出してる……が  
小説の投稿を思い出し無い頭で……無い文才で書き込む物語を楽し  
んでくれる

……っえ？

ためえクビにするぞ？

……ではでは人気作家の大先生の作品を楽しんで下さい！！！！

いや……そこまで凄くないよ……by作者

sido無し

さあナレーさんだよ！！

さつき会ったばかりだがそこにも触れないのが約束だぞ？

さてさてアラン達は301に行こうとすると必ず乱入者が来るとい  
う……

アラン達一向はいつこうに前に進めずってか！！！！

はい……すいません……調子に乗って寒いギャグを言っすいません

……

さてアラン達を止めたリー……リーはサスケに喧嘩をうった！！！！  
リーはサスケに打ち勝ったリー……だか新たに現れた敵……リーは  
うち勝つ事が出来るのか！！！！

「私……ワクワクしてきました！！！！」

さあ！！！！

地球の命運をかけた戦いが今はじ「って作品変わってるじゃねえか！！！！」か…魁斗さん！！！！な…なぜ此処に！！！！「いいから話を進める脱線せずに！！！！」

は…はい！！！！

で…では冗談は此処までにして…前回（本当の）リーに勝負をしかけられたサスケ応答し勝負をしだす

その途中でサスケが未完成の写輪眼を見せる……がリーの体術に負けてしまう

最後のトドメをさそうとしたリーを一本のクナイが止める

そして煙が現れた……さてさて今回の始まりは其処から始まる

ポフン！！！！！！

「「「「「な…なに（んだ）（ってばね）（い）？」「「「「「

煙が上がり全員其方を見るリーは冷や汗を出して…

「ま…まさか……ガイ先生！？」

つと叫んでいた

そして煙が晴れてその中から現れたのは……木の葉の額宛をした大きな亀だった…

「っえ？先生？っえ？え？」

「あり得ないわ……嘘よ……どこから見ても亀よ……そうだわ……  
あの子が言った言葉は幻聴だったんだわ……そうよ……間違いない  
わ……」

「……」

ナルトは何が何だか訳が分からずサクラは一所懸命に理解しようとしてサスケとクウロは無言……ではなく何も言えなく成っていた  
そして我らが主人公……アランはと言うと……

（あれは……口寄せ動物……ならリーが言ってた先生はこの亀を口  
寄せした人物かな？）

冷静に亀を観察して答えをだしていた  
そしてリーは凄いスピードで亀に近づいていった

「す……すすすいませんでした！！！！！」

「リーよ……あの技は禁じられていたじゃろう？」

亀は土下座勢いで謝るリーに口を開いた

「は……はい……」

小さく返事をするリー  
そしてナルト達といえば……

「や……やっぱり……あの亀が先生だってばね……」

「聞こえてない聞こえてない……あれが先生な筈は無いわ……」

「もう……何でも良いや……」

「……………」

ナルトは亀が先生だと思いサクラは何が何でも認めたく無いようにで現実逃避してサスケはもう何でも良いやって感じに成っていたクウロはやっぱり無言だった

「はあ……後はガイに任せるとしよう……」

「あ……あの……やっぱりガイ先生に……？」

「当たり前じゃろ……」

「うつ……うつ……………」

呆れたように言う亀

リーは呻き声？を出した

そうしていると……

ポフンツ

亀の横から煙がまたでた……

煙が晴れて現れたのはつり目で長い黒髪を持った女性が現れた

「リー……………」

「が……ががガイ先生……！！！！」

リーがピクツと体を震わしてガイを見る  
一方ナルト達は亀が先生じゃなかったのか…… と言った感じの顔  
をしていたとかしてなかったとか……  
そんな中ガイはリーに近づき……

「馬鹿者！……！！！」

「っう……！！！」

殴った

リーきれいに吹っ飛ばされた

（（え……ええええ……！！！！））

（……ただ者じゃないね…… 体術だけなら力カシより上…… 少なくとも並みの鍛え方じゃないね）

（……………）

ナルト、サスケ、サクラはいきなり殴った事に驚いて  
クウロは相変わらず無言…… ではなく啞然としていた  
そしてアランはガイの実力を冷静に見ていた

吹っ飛ばされたリーはすぐさまガイのもとに戻り土下座をして……

「………ごめんなさい！！！！ガイ先生！！！！！」

「リーよ……！！！」

あの技を使うことは禁じた筈だ！！！！！」

「で……でも……」

「言い訳は聞かん!!」

罰としてグラウンド100周して来い!!!!!!」

「は……はい……!!」

リーは物凄いスピードでグラウンドに向かった  
するとガイがアラン達の方に振り返った

「君達は速く行きなさ……ん?君達もしかしてカカシの……」

「……っえ?

カカシ先生をしってるんですか(てばね)?」

ガイがアラン達に速く教室?に向かう事を説いたが途中で何かを思い出したように言葉を言い出した

ナルト、サスケ、サクラはカカシの名前が出たことに吃驚して聞き返した

するとガイは笑い出した

「フッフッフ……知ってるかって……?私達を知ってる奴は私達の事をこう呼ぶ……」

シュンツ

一瞬で移動してアラン達の後ろに立った

「永遠の宿敵と……」

青春先生が来たっ！！！！（後書き）

中途半端で終わってしまった……

白の容姿はまたまたアンケートしたいと思います

今は我愛羅の時人気だったレイかぬらりひよんのつらら、ぬぐべくの雪女を考えていますが……

後前回TSキャラ（モデルも考えて下さるとありがたいです）とTSしてほしくないキャラを書いて下さるありがたいです！！！！

漸く第一次試験!!!! (前書き)

漸く……漸く第一次試験が始まります!!!!!!  
では本編どうぞ!!!!!!

漸く第一次試験！！！！

やあみんな

最近出番が増えて披露が増えたナレーさんだよ

っえ？そんな事は良いから速く話を始めろ？

……はあこれだから最近の若者は……分かりましたよ始めれば良いんでしょ始めれば……

sido無し（ナレーさん）

「永遠の宿敵と」  
ライバル

ガイはそう言っただけで凄まじいスピード（アラン以外が見えない速度）で動きでアラン達の後ろに立った

（は……速い……速さだけならカカシよりも……！！！！）

（っえ……？  
な……なに？）

（あのカカシとライバルつてのも頷けるわね……）

（み……見えなかったってばね……）

『（背後をとられるとは……情けないのうナルト）』

（う……うるさいってばね……！！！！）

（へえ……なかなか速いね……多分人間の域なら最速に入る……まあ人間の“域”ならね……）

それぞれガイのスピードに思ってた時に……アランが動いた

「ほら速く行こうよ

これ以上時間食ったら……遅刻で不合格になるよ？」

「……っえ……？」

あ……う……うん……」「」

「……ああ」

アランに続いて4人も続いた時……

アランの口を開いた

「確かに力カシとあんたは速いよ……でも……」

ビシュン！！！！！

「僕はもつと速い」

新たな異常  
サンライトスピード  
太陽速度

地球から太陽に1秒で行くぐらいのスピードを出せる

「！！！！！！」

「まあ……君の事も認めてあげるよ

また会おうね……ガイ」

ビシュン！……！！

「……はあ」

（カカシの奴が言ってたアラン（化け物）……想像以上だな……）

ガイはアランが去った方向をボーっ真剣に見ていた……が急に顔を赤くした

（それに想像以上に格好良かったわ……  
まさかりーと同じ男を好きになるとは……でも仕方ないわよね……  
あんな笑顔を見たら……）

……アランの毒牙にかかったガイがいた

s i d o アラン

漸く……漸く301まで来れたよ……はあ騒がしい一同＆乱入者×  
2……疫病神でも憑いてるのかな……？

真剣<sup>マジ</sup>でそう思えてきたアランだった

ん……？

あの扉の前に居るのは……カカシ？

「やあ

遅かったわね」

カカシは笑いながらアラン達に近づいてきた

「まあね……」

色々あったんだよ……うん色々ね……」

「うんうん」「（コクコク

「……確かにな」

アランがカカシの疑問に答えたのを聞いて頷く女子3人と腕を組みながら納得するクウロ

そんな5人を見て何が何だか分からないカカシがいた

「まあ……なんだ

何があったかは知らないけど……とりあえず一つだけ命令をだしとくわ……」

カカシが真剣な顔をしたのをみてアラン達も真剣に聞く体制に入ったカカシそんな5人を確認して口を開く

「死ぬな”

……それが命令よ  
守れる奴から……奥に行きなさい」

カカシがそう言ったあと数秒間が空き……誰からか……笑みを出したそして……

「……そんなの……当たり前だ（よ）（です）（ってばね）」「  
」「」

5人一緒に扉を開き中に入っていく  
そんな様子を……カカシは微笑みながら眺めていた

（本当に……成長したわね……頑張ってきなさい……）

そしてカカシはどこかに行った

中に入った途端中にいた忍から目線が来た……  
少し殺気もあるけど……特にあの青髪の……って我愛羅じゃんか……  
はあ……戦闘狂も良いけど……少し抑えなよ……

「アラン~~~~~」

そんな時金髪の髪を持った女性……いのがアランに飛びついた

「っと……いのいきなり飛びついたら危ないよ？」

アランはいのを受け止めた後いのの方に顔を向けて注意した

「へへへっ……ごめんね？久しぶりにアランにあったからつい……」

いのは少し笑いながらアランに謝っていた……そんな中ナルトとサスケから殺気が現れた

「（いの……何時までアランに抱きついてるつもり？）」

「（そうだってばね！……！）

いのばかり羨まし……じゃなくて……アランが困ってるってばね！……！）」

「（良いじゃない

あなた達と違つて久しぶりに会つたんだから……これ位……）」

「（（駄目だよ（だってばね！！！！）））」

「（ちえ……仕方ないわね）」

心中（アラン大好きな女子は何故か出来る）で話していた  
話が終わつていのは洩々アランから離れた

「あ……あああなたなにしてるのよ！！！！！！」

「……今度私にも……」

「あ……アラン君

ひ……久しぶり……だね」

「羨ましい……僕も」

「先に越されたわね……でも私にはまだ無理ね／＼／＼」

続々とアランの仲間（大好き軍団）が集まつてきた

因みに上からキバ、ヒナタ、シノ、チョウジ、シカマルです

「久しぶりだね

みんな

元気にしてたかい？」

「あ……当たり前でしょ！！！！！！」

暴露タイム（本当は）

アランに会えなくて任務に実が入らなかった

「……寂しかったけどアランにあって元気に成った」

暴露タイム（本当は）

嘘ついてません

言ったとおりアランに会わなくて元気（友達で無ければ分からないぐらいの反応）が無かった

「う……うん……私は大丈夫だったよ……アラン君にも会えたしね（ボソッ）」

暴露タイム（本当は）

本当は寂しかったけど昨日偶々アランに会ったため寂しさは薄れている

「僕も……アランに会えなくて寂しかったかな」

暴露タイム（本当は）

これも本当です

ってかこの暴露タイムやる意味ある？っと思いだした作者

「少し……寂しかった……かな？／＼／＼」

暴露タイム（本当は）

凄く寂しかったです本当は……

「私も寂しかった！！！！」

でもアランに会って寂しさも吹っ飛んじやった！……！」

暴露タイム（本当は）

これも本当です

まあ……ぶっちゃけ時稼ぎだなと思った読者諸君……正解だそうだが因みに上からさっきの順番で最後はいのです  
分かったかな？

因みにこれらを聞いたアランは……

（やつぱり……

“友達”に会えないのは寂しいんだね……）

っと思っていた

まあ……主人公の重要スキル【鈍感】が発動しただけです……

何故だろうね……

いま無性にナレーさんにムカついたよ……  
って……ナレーさんって誰なんだろうね？

「……あ……アラン（……アラン（前のあ……が無い））（君）  
は……どうだった？」「……」

六人がアランに聞いた

「うん？

勿論寂しかったよ？」

アランは何を当たり前なって顔で言った  
六人は一斉に顔を赤くした

因みにアランは“友達”に会えなくてって意味で言っている  
すると……いきなり（と言っても数秒だけ）殺気が飛んできた後に  
白髪的眼鏡をした女性が近づいてきた

「君達？」

「少し静かにした方がいいわよ？」

女性はニコッと笑って注意する

「……君……誰だい？」

「私かい？」

私は……薬師カブト……よろしくね？」

「僕は「青葉アラン」……だよな」……

「な……なんで」

彼女……カブトが名乗ってアランも名乗ろうとした時……カブトが先にアランの名前を当てた

アランは顔を陰しくしたが……何も言わない  
 変わりにサスケがカブトに聞いた

カブトはニヤツと笑って……

「アラン君だけじゃなくて君達の事も知ってるよ」

うちはサスケ君、うずまきナルト君、春野サクラ君、秋道チョウジ君、奈良シカマル君、山中いの君、油女シノ君、犬塚キバ君、日向ヒナタ君……そして……うちはクウロ君」

! ! ! ! !

アラン以外が吃驚した表情でカプトを見た  
アランはいつの間にか顔が元に戻っており口を開いた

「なぜ……僕達の事を知ってるんだい？」

「まあ僕は……情報には自信があつてね」

「へえ……すごいね」

中忍や上忍ならまだしも下忍に成り立ての僕達の事も知ってるなんて」

「当たり前だよ」

名家だらけだし……それにアラン君は有名だからね……下忍にして上忍以上の実力って……」

「ふゝん……なら聞くけど……この中で僕以外に強いのは誰だい？」

「……皆強いよ」

でも君以外なら……あの砂の少女かな？」

カプトは我愛羅を見ながら言った

（だろうね……我愛羅は下忍の中じゃ……いや中忍でも我愛羅に勝つのは難しいだろうね）

「後は……うちはの生き残りの二人や日向ヒナタ、日向ネジ……体術ならリーって子が強いわね……」

「へえ……自分の名前は出さないんだね」

「まあ……ね……  
私は弱いからね」

アランはカブトの“弱いからね”を聞いて意味深い笑みを見せた  
カブトも同様に笑みを見せた  
ただ一瞬にして元の顔に戻り再び口を開いた

「なら……僕を入れたら……どうなるんだい？」

「間違いなく……君がダントツに強いだろうね」

カブトは迷わずそう言った

その言葉にナルト達は「当たり前」って顔してサクラは黙っていた  
クウロは「……ふん」って言うていたが文句は言わなかった  
そんな中話が聞こえてた（我愛羅、テマリ、カンクロウ、リー（いつの間にか来てた）、テンテン、ネジ以外）の忍が殺気を出していた  
そんな中……

ドカーン！！！！

音の忍がアランを殴った

「……これが最強？  
ありえないね」

何かゴツい大砲みたいなものをつけた男がそう言った  
まあ……その時何人かの女性から殺気が飛んできたが……  
そして男が元の場所に戻ろうとした時……いつの間にか横に何事も無かったかのようにアランが立っていた

「良かったね……今の僕は機嫌がいいんだ……今回だけは見逃してあげる……」

アランは少し殺気をだしながら言った

音の男は冷や汗を出しながらもう一度殴りかかるうとするが……

ポフンっ

教室の前……黒板の前に煙が現れ……そこから黒い布を纏った男性と何人かの男性が現れた

「静かにしやがれ！！！！」

失格にするぞ！！！！！！クソ野郎ども！！！！！！！！！！」

そう言った瞬間殴りかかっていた手を戻して

「……………」

黙ったまま……しかしアランに対する恐怖を持ったまま元の場所に戻った

アランもみんなの元に戻って黒板の方に視線を向けた

「待たせたな中忍選抜第一の試験  
試験管の森乃イビキだ」

こうして第一次試験が始まった

おまけ

「……………」

「どうしたんだ？ドス？？」

「……あいつは……危険だ……警戒しといて損はない……」

「ハハッ

安心しろよ俺達は“あの人”に選ばれた人間なんだぜ！！！！」

「……はあ」

案外苦労人なドスだった

おまけ2

「先生終わりました！！！！！」

「……………」

（ああ……もう一度アランと会いたいわね……まさかこれでも力  
シとライバルになるとはね……………）

「先生……？」

リーはガイの顔を見て何かをキャッチしたリー

「ガイ先生！！！！！」

「っ！！！！！」

な……なに？リー」

「私……負けませんから！……！」

「っえ……？」

お……おい……リー？」

「じゃあ

私行きますね！……！」

「あ……ああ」

案外鋭いリーだった

おまけ3

（いの……抜け駆け無しだからな？）

（何言ってるのよシカマル……こつ言つのは早い者勝ちよ？）

（そうだよ？

シカマル）

（っぐ……！

チョウジまで……）

（あっ……アラン……！！！！）

（っえ？

って……速っ……！！！！）

何時もより速く移動してアランに抱きつくいの

(つく……!!!!  
負けた!!!!!!)

(何時もより速いって……どうなってんだいの体……でも羨ましいなあ／／／)

アランの事に成ると凄いいのだった

おまけ 4

(わ…私も何時かアランに……)

『(その時はワシにも変わってくれるよなあ?)』

(分かってるってばね……はあ九尾までもアランに……でも九尾とは同盟くんだから……まだ余裕?)

『(まあ…ワシとお主は一心同体じゃからのう……)(』

(じゃあ……先ずは作戦会議からだってばね!!!!!!  
作戦名は……【アラン落とし(恋愛の意味で)】だってばね!!!!!!)

『(そうなのう……  
ならこうしてみれば……)』

(こっちの方が……)

『（ツム……ならこうじゃー！！）  
』

案外仲が良くなっている2人だった

漸く第一次試験！！！！（後書き）

眠い……はぁ

TSしたいキャラ（モデルをつけてくれれば嬉しいです）を募集です  
後人気投票中なので其方も宜しくお願いします

ではもう眠いので寝ます

また次回お会いしましょ……グウZZZZ

第一次試験……内容は……テスト！？（前書き）

最近テイルズオブザワールドレディアントマイソロジー2をもう一度初めからやり始めた作者です

キャラクターの名前は勿論……アラン！……！  
どうでもいい？……そうですね……

## 第一次試験……内容は……テスト！？

### 前回

漸く一次試験まで書けた所で終わった……

やあみんな毎度毎度現れるように……ってかバラエティーで言う所のレギュラーになりかけのナレーさんだよ……！！！！

始めでも言ったけど……漸く一次試験に来れたよ……！！！！

作者の魁斗もまさか此処まで長くなるとは思わなかったらしい……

まあ裏の話は此処までにして……！！！！

本編の始まり始まり……！！！！

s i d o 無し（ナレーさん）

「俺は一次試験の試験管森乃イビキだ……！！！！」

先ずは前にある箱からくじを引き引いた数字の場所に座れ……！！！！」

試験管……イビキがそう言うともみんな立ち上がり前にある箱からくじを引き引いた数字の場所に……！

（……… 31 番ね）

因みに言つとくが数字は適当らしい

（……… へえ……… まさかの我愛羅の隣ね………）

アランが席に向かうとそこには青髪の少女……我愛羅が居た

アランは一度我愛羅をみた後自分の席……我愛羅の隣に座った

（ふふっ……… 我愛羅が殺気を出しているから（アランに対して）僕

の右隣の子が震えてるよ……っえ？僕……？  
平気だよ……たしかに桃地より殺気は強いけど……あの蛇（変態）  
よりは弱いからね……）

アランは昔鬪った（殺し合った）相手の事を思い出していた  
因みに数人の女性が舌打ちしたらしい

さてそんな事もありながら全員が席に着き他の中忍達が確認をして  
イビキの方を見て頷く  
するとイビキも頷いた  
そしてイビキが受験者？の方を見て口を開いた

「それでは一次試験の内容を説明する……一次試験は……テストだ  
……………」

（て……て……テスト（だってばね）……………！！！！）

勉強が苦手な奴らが心のなかで叫んだ  
まあイビキ達には聞こえてないから試験は続く  
他の忍達がテストを配っているときイビキが口を開いた

「まだ表にするなよ！！！！  
では今から重大な事<sup>ルール</sup>を説明する！！  
一度しか説明しねえから良く聞けよ！！！！」

イビキがそう言った瞬間みんなが真剣な目になり聞く体制に成った

「第一のルールだ  
まずお前らには最初から各自10点ずつ持ち点が与えられている  
筆記試験問題は全部で10問

格1点そして……この試験は『減点式』となってる」

つまり10門中8門正解した場合10点から二点を引く  
つまりどれだけ得点を稼ぐかでは無くどれだけ得点を守るかに成  
るわけだ

「つまり！！！！」

問題を10問正解すれば持ち点は10点  
そのままだ

しかし！！問題で3問間違えれば持ち点の10点から……………3点  
が引かれ7点という持ち点になるわけだ」

なので10問間違えると…………0なわけだ

「第2のルール…………この筆記試験はチーム戦

つまりは受験申し込みを受け付けた三人一組の（アランとサスケは  
今回第七班ではなく第零班で来てるため5人一組ではなく2人一組  
で計算される）合計点数で合否を判断する  
つまり合計持ち点30点（20点）をどれだけ減らさずに試験を終  
われるかをチーム単位で競ってもらう」

チーム戦と言った瞬間サクラが机に頭をぶつけた  
そのまま行きよい良く顔を上げて……

「ちょ……ちょっと待ってよ！！！！持ち点減点方式の意味っての  
も分かんないけど…………チームの合計点ってどーいう事お！！！！  
！！」

文句を言った

それに対してイビキは少しイラッとした顔で……

「うるせえ！！！！お前らに質問する権利はないんだよ！！！！これにはちゃんとした理由がある！！！！」  
黙って聞いてろ！」

つと怒鳴った

サクラも納得はしていないようだがこれ以上聞いても怒りを買っただからか席に弱々しく座った

「分かったら肝心の次のルールだ

第3に、試験途中で妙な行為……………つまり

『カンニング及び、それに順ずる行為を行った』と此処いる監視員たちに見なされた者は……………

その行為『1回につき、持ち点から2点ずる減点させてもらう』…

……」

「……………！！！！！」

それを聞いたサクラは何かを思いついた顔をしたそれをみたイビキはニヤリと笑って……………

「そうだ！！！！つまりこの試験中に持ち点をすっかり吐き出して退場してもらう者も出るだろう」

つまりテストが終わる前に失格者が出すようにするためにこう言う仕組みにした訳だ

「無様にカンニングなど行った者は自滅して行くと心得てもらおう  
仮にも中忍を目指す者忍なら……………立派な忍らしくする事だ」



……やっぱり

アランはテストの用紙を開けた瞬間ニヤリと笑った

これは“カンニング”をさせるためのテスト……どれだけ上手く……  
……気づかずにカンニングするかを……さっきの無様な言葉……  
……無様じゃないつまりバレないカンニングをするように……立派な  
忍……つまり忍は“隠れて”こそ忍……そして何よりこの問題……  
……こんな難しい問題……解ける奴は少ないだろうね  
つまりここで解けない奴は自動的に誰にもバレないカンニングをするわけだね……

アランがこの試験の内容を理解しているなか……イビキは静かに笑っているアランを見ていた

（あの餓鬼……気づいたようだ……この試験の本当の内容を……  
ククッ今までも速く気づいた奴は居たが……開始早々気づいた奴は  
こいつが初めてだな……しかも徐々に分かり始めてる奴も居やがる  
……今年の下忍は中々優秀のようだ……）

まあ……僕は自力で解くほうも……カンニングする方もどちらもしないよ……っえ？ならどうするって？

簡単だよ自力で……尚カンニングするんだよ

「……ふう」

答えを得るもの（アンサートーカー）発動

アランが答えを得るもの（アンサートーカー）を発動した場合輪廻眼みたいにならず青い目が薄くなるだけ

ふう……久しぶりに使ったね……さて……と  
問題を解こうか……

アランはどんどん問題を解いて行った

s i d o サスケ

……そう言う事ね……

このテストの本当の狙いは……バレずにカンニングをする事……なら……写輪眼で相手の動きを真似れば良い……この中に問題の答を知ってる奴が紛れてるかも知れないけど……そいつを探すより……アランの動きを真似た方が速い!!!!!!

写輪眼!!!!!!

……!!!!!!

アラン……凄い……次々と解いていく……ってか手が速すぎない？  
もう問8まできてるし……

s i d o サクラ

うう……クウロ君は兎も角ナルトは……

つく……今はテストに集中しないと……それにしても……このテスト中々難しいわね……はあやっぱりナルトじゃあ……

s i d o クウ（サスケと似てるため無し）

s i d o ナルト

わ…訳分らないってばね……ど…ど…うじよぉ~~~~~!!!!!!

おまけ（没ネタ）

「容姿を○の○井にしてくれ!!!!!!」

まさかの現実世界のアイドルに……!!!!!!  
さすがに続けれる気がしないため没

おまけ（もしもシリーズ）

「行く世界をWORKINGに!!!!!!」

「今日から『ワグナリア』で働く事に成った青葉アランだ……皆仲  
良くしろよ〜」

っあ……八千代パフエ」

「はい杏子さん!!!!!!」

あっ……私の名前は轟八千代……よろしくねアラン君」

「八千代まだか〜〜?」

「あ…はい今行きます…!!」

「……刀……」

アランが八千代と名乗る女の……腰に着けてる刀を見ると……

「私は名前種島ポプラ…!!」

よろしくね…!!」

いきなり声がした

当たりをぐるっと見たが誰も居ないため首を傾げるアラン

「下だよ…!!下…!!」

つと言う声と共に下を見たら小さな女の子がいた

長くなるためとばしまゝす

「山田……山田」

「……」

「家出少女……」(ボソツ

「山田は家出少女ではありません…!!」

またまた長くなるためとばしまゝす

「君達……騒がしいよ？」

店内で暴れるなんて……僕にかみ殺されたいの？」

山田をナンパしていた男達に殺気を出しながらトンファーを向けた  
すると……

「ひ…ヒイ！！！！」

男達は慌てて逃げていった

アランは何も無かったように帰ろうと……するが

「あ…あの！！！！」

山田の声で止まり山田の方に顔を向けた

「なに？」

「た…助けてくれて……あ…ありがとう………ごきます／＼／／」

「……どういたしまして」

アランは少し笑ってから仕事戻った

山田はその場で暫くぼーっとしていた……顔を赤らめて何時もより  
速い心臓音をさせて……

「あ…アラン君……」

その……身長小さな子は……き…嫌い？／／／／

「？」

なんだい？いきなり」

「い…良いから答えて！！！！」

「？」

別に気にしないよ？」

「そ…そうなんだ……」

「じゃあ僕は行くね？」

「う…うん」

また……明日」

「じゃあね」

アランはそう言ってお店から出た……アランがいなく成った場所にはホッとしているポプラが居たとか……

……なんだこれ？

書いた後にそう思った作者だった……

**第一次試験……内容は……テスト！？（後書き）**

さて……最近感想がなくて悲しい作者です

今回はおまけでWORKING!!を書いてみました……

ただどアニメを一回（一話から最終回までリアルタイムで）見ただけでは……無理だ……

あと最後に感想下さい!!!!!!それが作者の力になるから!!!!!!  
!

一次試験終了!!!! (前書き)

フニヨ様

ヤンデレって何かいいよね!様

感想を下さってありがとうございます!!!!!!  
では本編の始まり!!!!!!

一次試験終了!!!!

あらずじ……

中忍試験一次試験の内容は……まさかのテスト!!!!

様々なルールがあり（分からない方は前回の話を又はNARUTOの漫画、アニメを見るか検索してくれ）ながらも一次試験が開始したアランはいち早く試験の“内容”を理解したがカンニングをしないでかつ真面目に解くわけではなく答えを得るもの（アンサーキー）で問題を解いていきサスケは写輪眼でアランの動きを真似クウ口は受験者に混じってる試験管を見つけてサスケと同じように写輪眼で動きを真似た

サクラは試験の内容を理解しないで地道に自分で解いていってナルトは……まあなんだ……そんな感じで進んでいった  
さて今回そんな所から始まるぜ!!!!

sidoアラン

サスケも気づいたようだね……あと……我愛羅も……砂の目で見て  
るようだし……ん？……10門目は試験終了後に出す？……へえ……  
……まだ何かあるんだ……ふふ中々面白いね……

sidoナルト

わ……分からないってばね~~~~~!!!!!!  
こ……こうなったら分かる所から解くしか……

一問目……

二問目……

三問目……

四問目……

五問目……

六問目……

七問目……

八問目……

九問目……

……はあ

分からないってばね~~~~~~~~!!!!!!

何なんだってばね!!!!!!この難しい問題は!!!!!!

……こうなったら……カンニン（シュン!!!!

な……なんだってばね……

いきなりクナイが飛んできて後ろの壁に刺さった

ナルトはゆっくり横を見ると……クナイが横に座っていた男の服の裾事刺さっていた……

「56番、45番、68番五回カンニングをしたため失格!!!!!!

」

クナイを投げた1人の試験管がそう言った

ダラダラ……

や…やっぱりカンニングは駄目だつてばね……

……試験の“内容”を知らず知らずのうちにしようとしたがカンニングがバレて失格した奴を見て止めたナルトだった

こ…こうなったら……まだ明らかに成ってない十問目に賭けるしかないってばね……！！！！

『（大丈夫かのう……）』

まだ分からない十問目に賭けたナルトを見て呆れ目でナルトを見ていたナルト

そして九尾の事を完全に忘れているナルトだった……

s i d o サスケ

もう……終わった……

は…速すぎだよ……アラン……はあ……速すぎて手が痛いよ……

手首を動かしながらため息を吐くサスケ

それにしても……

瞑っていた目を開いてテストを睨んだ（写輪眼は解いています）

十問目は終わった後……また……何かあるね……必ず……はあ

アランと同じでまた何かあると睨んだサスケ  
しかしアランと違ってめんどくさそうだが……

s i d o サクラ

ふう……漸く終わった~~~~~（アランが終わった約25分後）  
それより……ナルト大丈夫かしら？

はぁ……最悪……

それにしても……この十問目……また何かあるのかしら？……はぁ  
……何かナルト解けなくて十問目に賭けてる気がするわね……

案外勘が鋭かったサクラだった

s i d o クウ（やっぱ無しで（笑））

「……………」

s i d o 無し（ナレーさん）

なんやかんやありながら……一時間後……

「時間切れだ!!!」

餓鬼共鉛筆を机に置け!!!」

イビキの声が響いたと同時に全員（受験者）は鉛筆を机に置いた

「では最後の十問目を出す!!!!……前に確認を取る」

イビキが十問目を出す前に確認を取るって言った事に対して全員（  
受験者）達は頭に？マークを浮かべた



此処で失格に成ったら一生中忍には成れな「それなら……それまでだよ」……っ！……！！」

「あ…アラン」

アランはイビキの言葉を最後まで言わずに不適な笑みと共にそう言った

「それに……此処まで来て逃げる気なんて無いよ  
それに……中忍試験に受けられないように成ったら火影でも他の忍でも倒して認めさせれば良いんだよ」

アランがそう言った瞬間他の忍達も決意した顔をした

「本当に……良いのか？」

「真っ直ぐ自分の言葉を曲げない……それが僕（私）のルール（忍道）だよ（だってばね）！！！！」

s i d o サスケ

っふふ……

アランとナルトの言葉によって諦めてたみんなが……受ける覚悟をした

あの2人……特にアランは人を惹きつける力がある……だからみんなアランを頼って惚れる……  
そして私も……

s i d o 無し（ナレーさん）



らしアンコよ！！！！！」

シーン……

二次試験の試験管の登場にシーンとする受験生たち

そんなの関係なしつと言った感じで残った人数を数えるアンコ

「ちょっとイビキ！！！！」

少し多くない！！！！！！」

「今回は優秀な奴が多くてな……」

「はぁ……まあ良いわ

貴様ら私に着いて来い！！！！」

受験生たちはみんなアンコの言葉に従って教室から出て行った

sidoiビキ

皆が去った教室にイビキがテストを回収していた

ルール……そして忍道か……ククッ……今年は面白い奴が入ってきたな……

うずまきナルト……そして青葉アラン……っふ……あいつ等ならもしかしたら……

一次試験終了!!!!（後書き）

はあ……なんかグダグダだなあ……はあ

これからもどんどん感想を下さい!!!お願いします!!!

あと今回はおまけはありませんでしたがまた次回おまけを書くと思います!!!!!!ではまた次回お会いしましょう!!!!!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7488v/>

---

NARUTO～転生と始まりと終焉～

2011年11月24日19時49分発行